

〔稿本表紙〕

明治三年
八月
忠義公史料稿本(初稿)八

〔稿本にて補正〕

久保田

一 諏訪神社

右氏子之儀

照國神社氏子

旧福昌寺門前

一 熊野神社

右氏子之儀

長谷神社氏子

旧不動門前

一 熊野神社

右氏子之儀

河上木神社氏子

一 萩原天神

右氏子之儀

照國神社氏子

右ハ若宮外四社共、夫々会祭之儀ハ別段申渡通ニ候、

依之右氏子之儀、以来右之通被 仰付候条、向々へ可

申渡事、

上之馬場

一 若宮神社へ

七四四 藩庁庁下諸神社ヲ合祀シ、其氏子ノ所属

ヲ定ム

八月二日

藩庁庁下諸神社ヲ合祀シ、其氏子ノ所属ヲ定ム、

下六日町

一 若宮神社

右氏子之儀

照國神社氏子

右下六日町若宮社会祭被 仰付候、

戸柱

一諏訪神社へ

右久保田諏訪社会祭被 仰付候、

小野

一河上木神社へ

右旧福昌寺門前・旧不動門前両所へ建立之熊野神社

会祭被仰付候、

上惠美須町

一蛭兒^{ヒルコ}神社へ

旧号惠美須社

右上行屋町之上蛭兒神社社会祭被仰付、社号右之通被

仰付候、

旧御船手

一住吉神社へ

旧号船玉社

右大門口住吉社会祭被仰付候、

磯

一菅原神社へ

旧号天満堂

右萩原天神社会祭被仰付候、

右ハ各所御鎮座被成置候得共、此節右之通御会祀被遊

候条、銘々社司へ申渡、可承向へモ可申渡候、

但跡地面社事類ハ諸人申受被仰付、代銀ハ右各社之

御修理料ニ被振向置候、

八月二日

知政所

七四五 藩庁大砲墊移転ノ為メ邸地引上ヲ令ス

八月二日

藩庁大砲墊移転ノ為メ、邸地引上ヲ令ス、

一本加治木屋敷跡

西北通路付之方

地面 一流

右ハ此節軍務局建替ニ付、為操練場用旧垂水屋敷跡等、

取除相成候様申出置候付、同所へ被建置候大砲墊引直

度候間、右加治木屋敷跡、当分空地之場所御用地被仰

渡度候、此段申出候、以上、

午八月二日

軍務局

右之通被仰付候、向々へ可申渡候、以上、

明治三年八月

知政所

○中略

【参照】

同年明治三年八月五日

三上藩

一任外務大丞、

一

松井彌介

○以下略ス

右者大砲為指南方御雇下之儀、此内飯牟禮喜之介等出府御頼入相成居候処、仕廻方出来、今日乾行丸より但馬市蔵付添差立申候、此段申上越候、以上、

但彌介出立ニ付、仕廻料旁として、金貳百兩遣置申

八月五日

候、

元諸侯元服請願方ヲ定ム、

明治元年乙巳八月

田中清之進

〔頭註〕五年太政官第三百三十七号ニ依リ消滅〔第五百十一〕八月五日（弁官）

元諸侯へ

知政所

七四六 鮫島尚信ヲ外務大丞ト為ス

八月五日

朝廷ニ於テハ、鮫島尚信誠藏ヲ以テ外務大丞ト為ス、

鹿兒島県士族

鮫島尚信

誠藏

七四七 元諸侯元服請願方ヲ定ム

一元服之儀、本人上京之上願書可差出答ニ候へ共、無余儀次第有之候節ハ、直書ニテ近親ヲ以テ可願出候、尤願相濟本人上京之上日限可相回事、

但近親無之輩ハ、家令ヲ以テ可願出事、

一当日元服昇殿 宣旨拝受之上參 朝御礼可申上事、

【参照】

○第三百三十七号（四月二十八日）布

華族元服自今願ニ不及候条、前以日限可届出事、

七四八 兵学寮ニ教官ヲ置ク

八月七日

朝廷ニ於テハ兵学寮ニ教官ヲ置ク大小教授、大中小助教

(頭註)四年太政官第四百ヲ以テ改定
[第五百十三] 八月七日(沙)(太政官) 兵部省

今般兵学寮教官左之通御定相成候条、此旨相達候事、

大教授 相当 從五位

少教授 同 正六位

大助教 同 從六位

中助教 同 正七位

少助教 同 從七位

大得業生 同 正八位

中得業生 同 從八位

少得業生 同 正九位

(頭註)閏十月准得業生廃止
准得業生 同 從九位

七四九 城下士族ニ準シ諸郷士族ノ從僕者ノ土着

ヲ聽許ス

八月八日

城下士族ノ從僕寄留者ノ土着聽許ニ準シ、諸郷士族ノ從

僕者モ亦、同一ノ取扱ヲナサシム、

一諸人家来下人等、諸郷へ致中宿土地へ染付候筋相見得

候付、其所へ土着ニテ百姓・浦人・野町人成可被仰付

段ハ、此節別段被仰渡置候、右ニ付テハ外城士族下人

之儀、其郷内へ致中宿候儀ハ、何方ニテモ是迄之通被

免置度、尤御城下士族家来・下人之儀モ、近在内へ致

中宿候儀同断被仰付置度儀ト、尚亦致吟味候、此段申

出候、以上、

午八月八日

民事局

右之通被仰付候条、向々へ可申渡候、

午八月一日

知政所

七五〇 寺院ニ令シ末寺ノ住職継襲等ハ各管轄庁

ニ稟シテ処分セシム

八月九日

寺院ニ令シ、末寺ノ住職継襲等ノ事ハ、各管轄庁ニ稟シ

テ之ヲ処分セシム、

(頭註)五年教部省第九号及第十四号ニ依リ増設
[第五百十八] 八月九日(布)(太政官)

府藩県

寺院住職継目等之儀ニ付、別紙之通本寺・本山へ御沙

汰ニ相成候条、其旨相心得、管内寺院へ可相達事、

(別紙)

寺院住職繼目等、從來本寺・本山ニ於テ取扱来候処、
自今管轄地方官へ一応掛合之上可取計事、

但住僧不行跡不正之儀等有之候節ハ、地方官ヨリ可

及掛合候条、其本寺・本山ヨリ人選進退可取計事、

庚午八月

太政官

【参照一】

○第九号(七月三日)

府県

寺院住職繼目等中本寺以上ヲ除之外、自今総テ本寺・

本山或ハ触頭・法頭等ヨリ薦挙之添願書為差出、各地

方官ニ於テ進退致シ、毎年十一月ヲ限り、一同取纏メ

当省へ可届出、尤中本寺以上寺院ノ住職繼目ハ勿論、其

他四民之僧侶ト相成度者及僧侶之帰俗出願之向等ハ、

従前之通委詳調書ヲ以、其都度当省へ可伺出、此旨更

ニ相達候事、

【参照二】

○第十四号(八月二十三日)

府県

〔頭註〕七年教部省布達第一号達參看、八年同達書第五十二号達、十一年内務
省之第三十四号達ニ依リ消滅、八年教部省第五十一号達ヲ以テ但書追加、
寺院住職繼目等之儀ニ付、先般第九号之通及布達候処、

自今諸宗本寺・本山ヲ除之外、総テ本寺法類或ハ触頭・

法頭ヨリ之選挙添願書為差出、各地方官ニ於テ、篤ト

調査之上進退致シ、毎年十一月ヲ限り一同取纏当省へ

可届出、尤本寺・本山之住職繼目ハ勿論、其他四民ノ

僧侶ト相成度者及僧侶之帰俗出願之向等ハ、従前之通

委詳調書ヲ以テ、其都度当省へ可伺出、此旨更ニ相達

候事、

七五一 民部・大蔵二省所属ノ寮司及ヒ事務章程

ヲ更定ス

八月九日

民部・大蔵二省所属ノ寮司及ヒ事務章程ヲ更定シ、地理・

土木・駅通・鉱山・庶務ノ五司、聴訟・社寺・鉄道・電

信機・燈台・横須賀製鉄所ノ六掛ヲ民部省ニ、造幣寮、

租税・出納・用度・営繕・監督・通商ノ六司並ヒニ度量

衡改正掛ヲ大蔵省ニ属シ、府藩県ニ令シテ申牒文移等之

ヲ各主管ニ致サシム、

〔頭註〕四年太政官第三百七十五ヲ以テ民部省廃止同第四百二十三ニ依リ消滅
〔第五百一十〕八月九日(布)(太政官) 府藩県

今般民部・大蔵省分省ニ付、両省管轄之寮司並諸掛等、

左之通區別相立候条、向後両省へ可差出諸願伺届類其

外共、別紙両省事務条件ニ照準致シ可差出事、

明治3年(1870)

但是迄何月限、又八年々可差出旨ヲ以テ達置候諸帳

面類、其外諸調物類等モ、同様別紙条件ニ照準シ

可差出事、

(別紙)

民部省

地理司

土木司

駅通司

鉱山司

庶務司

聴訟掛

社寺掛

鐵道掛

伝信機掛

燈明台掛

横須賀製鉄所掛

大蔵省

造幣寮

租税司

出納司

用度司

宮繕司

監督司

度量衡改正掛

通商司当分管轄

民部省事務条件

全国ノ経緯・山川・江湖・海岸・島嶼ノ位置ヲ詳

明ニスル事

府藩県管轄地ノ經界・州郡村市制置ノ事

戸籍人員ノ事

地方石高ノ事

社寺ノ事

物産ノ事

工芸ノ事

駅通ノ事

道路橋梁ノ事

諸港津ノ事

燈明台及船路標ノ事

水利堤防ノ事

開墾ノ事

種芸牧畜ノ事

諸鉱ノ事

聴訟ノ事

府藩県中小學ノ事

濟貧恤窮ノ事

山林原野ノ事

大藏省事務条件

歳入歳費ノ事

一切用度ノ事

租税備ノ事

一切貨幣ノ事

度量衡ノ事

蓄積ノ事

通商ノ事

廻漕ノ事

献納品ヲ領收スル事

諸宮繕ノ事

一切倉庫ノ事

金穀ニテ附与スル賞典ノ事

諸官祿・秩祿支給スル事

諸費用ヲ供給スル事

國債ノ事

濟貧恤窮ノ費用ヲ給シ及金穀ヲ貸附ル事

七五二 販売鴉片煙律及ヒ生鴉片取扱規則ヲ頒布

ス

八月九日

販売鴉片煙律及ヒ生鴉片取扱規則ヲ頒布シ、又之ヲ各港

在留ノ支那人ニ告諭ス、

〔第五百一十〕八月九日（太政官）

〔頭註〕第九百四十四ニ依リ消滅

一 凡ソ鴉片烟ヲ販売シテ利ヲ謀ル者、首ハ斬、從ハ三等

流、自首スル者ハ一等ヲ減ス、

一人ヲ引誘シ吸食セシムル者ハ絞、從及ヒ情ヲ知り房屋

ヲ給スル者ハ三等流、引誘セラレテ吸食スル者ハ徒一

年、

一 収買シテ未タ售売セサル者、首ハ三等流、從ハ徒三年、

買食スル者徒二年半、自首スル者ハ並ニ罪ヲ免シ、鴉

片烟ハ官ニ没収ス、

一官吏知テ拳セサル者ハ並ニ与同罪、財ヲ受クル者ハ枉

法ヲ以テ重キニ從テ論ス、

右之通御定ニ相成候条、此旨相達候事、

七五二/一

〔第五百十二〕(布) (太政官)

府藩県へ

鴉片烟草ノ儀ハ、兼テ嚴禁ノ処、猶又今般販売鴉片烟

律御定ニ相成、各港在留ノ支那人へモ、嚴重禁止被

仰出候、且葉用ニ供シ候生鴉片タリトモ、勝手ニ取扱

候儀不相成、別紙之通取扱規則ヲモ被為立候条、各地

方官ニ於テモ、管内人民末々迄心得違無之様、屹度取

締可致事、

(別紙)

生鴉片取扱規則

一葉店中現在所持ノ分ハ、各地方官庁ニテ検査ヲ遂ケ、

品位置目等委細簿記シ可置事、

一不得止葉用ニ供シ候儀有之、売買致シ候節ハ、其度毎

ニ葉店医師ヨリモ品位置目等委細官庁へ可届出事、

一葉用關乏ニ付、外国ヨリ取寄度節ハ、各地方官ヨリ

開港場へ申立候ハ、別段ノ注文ヲ以テ取寄候様可

致事、

七五二/三 〔第五百十三〕八月九日(沙)

外務省

鴉片烟草ノ儀ハ、兼テ嚴禁ニ候処、猶又今般販売鴉片

烟律御定ニ相成候ニ付テハ、各港在留支那人へモ、嚴

重禁止ノ儀申諭シ、窃ニ取扱候儀無之様、急度取締可

致事、

七五二/四

〔第五百十四〕八月(外務省)

外務省奉上諭、前于各港府県曉示、在該港清國人等不得

藏貯鴉片等、因旋將買片烟之我國人及売付之清國等、業

已抛罪懲治在案、昔此物入清國、流毒害民、以至今日之

甚、是不可不思之也、為此本政府新定防害律例、頒示通

商各港府県、申諭在港清國商民、嗣後倘有毫犯法、在必

行以懲惡儆、凡清國人素有烟癮、刻難置其管窺者、固

不須言、即量浅似喫白相者、亦所嚴禁、断不准其來港

營生、除將現住、本港烟鬼、徹底清查、其或自能戒断

吸喫、以遵禁令者可、其不能者当即自行去此回鄉外、

奉到新諭律例以後、仍有潛匿犯大禁者、一經查出、毋

庸分別原住新來、立刻按律処治、奉此特示、

明治三年庚午 月

外務省

此度御沙汰ノ趣、外務省ヨリ御触達ノ次第、先達テ各港府県ニ於テ、其港在留清国民共へ、鴉片煙ヲ買取候我國民並壳渡シ候清国民共、其罪犯ニ依リ、夫々御処置相成居候処、右鴉片煙ノ儀、其昔清国ニ入シヨリ、流毒害民今日ノ甚シキニ至ル事、其仮難捨置儀ニ付、猶此度政府ニ於テ新ニ防害ノ律例被立定、開港場へ御布令相成、在港清国商民へ被触達候上ハ、已後聊タリトモ禁令ヲ犯シ候者ハ、屹度御法ヲ正シ、其毒源ヲ絶チ可申候、就テハ清国人民ノ内、素ヨリ鴉片ヲ嗜ミ、片時モ止カタクキ烟癖アル者ハ勿論、仮令少シ計ノ服量ニテ、徒ラニモ用ヒ候様ノ者ニ至ル迄、可為嚴禁候条、右等ノ者ハ決シテ来港渡世イタス間敷候、尤此節在来ノ内、右等ノ者精々穿鑿吟味ヲ遂ケ、断然嗜癖ヲ絶チ、嚴禁ヲ守リ候者ハ格別、其儀不能者ハ速ニ立去リ帰国可致候、右御沙汰ノ趣触達シ候後、尚潜伏罷在、大禁ヲ犯シ候者有之、及露頭候ハ、旧住新渡無差別、其時々旋ノ通罪科ニ可被処者也、

明治三年庚午 月

【参照】○八月（外務省ヨリ弁官へ上申）

鴉片烟取締ノ儀ニ付、別紙ノ通俗文漢文ヲ以摺モノ等

イタシ、各港庁ヨリ在留ノ支那人へ揭示イタサセ候間、為御心得別紙式枚相添御達申入候也、

七五三 支那人ノ我カ童男女ヲ買取ル者ヲ提警セ

シム

八月十三日

支那人我カ童男女ヲ買取ル者アルニ付、之ヲ提警セシム、

〔頭註〕「五年太政官第五十五号參看」
〔第五百三十一〕八月十三日（布）（太政官）

各港在留ノ支那人共、窃ニ童男女ヲ買取リ、海外へ可連越奸計相企候者有之、既ニ捕押ニ相成候ニ付、追テ嚴重之御処置可有之候得共、元来外國人へ御國民壳渡候儀ハ、第一国体ニ於テ不相濟事ニ候間、向後地方官ニ於テ管内屹度取締相立、教育行届候様厚相心得可申、此旨相達候事、

【參看】

〔頭註〕「六年太政官第二百六号參看」
〔第五十五号〕二月二十五日（布）

各港在留ノ支那人共我窮民ノ幼児ヲ買取候儀ニ付テハ、去ル庚午八月中相達候得共、未タ右様ノ所業致候者モ有之哉ノ趣、畢竟内国人ヨリ壳渡候故、支那人ニ

於テモ買取、本国へ連行販売スルニ至候次第ニテ、御
国禁ヲ犯シ不容易儀ニ付、向後右等不心得ノモノ於有
之ハ、嚴重所置ニ可及候間、地方官ニ於テ管内取締厚
ク可加教育候事、

七五四 普佛戰爭見聞ノ為大山巖・品川彌次郎・

林有造ヲ歐洲ニ差遣ス

八月十四日

佛普戰爭見聞ノ為メ、大山巖彌助・品川彌次郎山口藩士・林有造

高知藩士歐洲ニ差遣ス有造ノ命ヲ受ケルハ二十七日ニテリ

今般佛普戰爭相始、近来倍盛ニ相成趣ニ就テハ、当省

ヨリモ現地之振合等篤ト遂見聞度、左候得ハ後來戦法
ノ試験ト相成候ニ付、海陸軍之内ヨリ早々御人撰彼両

国へ被差出度、此段奉伺候也、

庚午八月七日

兵部省

弁官

御中

〔采〕
一伺之通

七五四ノ一

今般佛普戰爭相始、近来倍盛相成候趣ニ付、当省より
も現地之振合等、篤ト遂見聞度段申出候処、御許容相
成、他日之御用可相立人物精撰仕候様御沙汰之趣拜承
仕候、然処板垣退助始外三名精撰之義、過刻河村兵部
大丞ヲ以申上置、尚又精々遂省議候処、三宮兵部權少
丞義於当省聊差支之義無之、且又被差遣候ても可然相
応之人物ニ御座候間、早急被差遣候様御沙汰相成度、
右ニ付外務省夫々へ御達相成候様有御座度、此段申出
仕候也、

庚午八月十四日

兵部省

弁官

御中

七五四ノ三

板垣退助
各通 品川彌次郎

大山彌助

御用有之、歐羅巴洲へ被差遣候事、

庚午八月十四日

太政官

七五四ノ四

鹿兒島藩士

大山彌助

庚午八月十五日

弁官

山口藩士

大藏省御中

品川彌次郎

七五四ノ六

午八月十五日

弁官

高知藩士

板垣退助

外務省

右御用有之、歐羅巴洲へ被差遣候事、

御中

庚午八月十四日

太政官

鹿兒島藩

七五四ノ五

鹿兒島藩士

山口藩

大山彌助

品川彌次郎

山口藩士

高知藩

品川彌次郎

板垣退助

高知藩士

〔米〕
一板垣ハ被免、同藩林
有造ニ被仰付候事板垣退助

右御用有之、歐羅巴洲へ被差遣候間、此段為心得相達候也、

庚午八月十五日

七五四ノ七

午八月十七日

外務省

弁官

御中

頃迄之分見積り、旅費御手当等総テ御規則之通御渡可有之、尤從者ハ各屯人ツ、被召連候間、此段御心得可有之、仍及御達候也、

鹿兒島藩

〔志〕
「式拾九歳」大山彌助

山口藩

〔志〕
「式拾六歳」品川彌次郎

高知藩

〔志〕
「三十四歳」板垣退助

右政行被仰付候ニ付、免状取調候間、銘々年齢早々承知致シ度、此段申進候也、

庚午八月十七日

七五四ノ八
午八月十八日

外務省

御中

弁官

大山彌助外兩人、年令別紙書入之通有之候間、御落手可有之候也、

庚午八月十八日

七五四ノ九
午八月

鹿兒島藩大山彌助外二人とも御用有之、洋行被仰付候付、旅費御規則之通相渡候様御達有之候処、藩士へ被下候旅費御規則ハ無之候得共、御用柄ニも有之候間、

支度料・日当御手当並横濱迄之人足賃等ハ、奏任出仕之見合ヲ以相渡、其余往返舟車賃上下二人食料見積リ、啗人ニ付二千弗ツ、為用意、相渡候様可致ト存候間、此段御届申候也、

庚午八月廿二日

大蔵省

弁官

御中

尚々今日御達相成候中濱萬次郎其外之分も、同様御心得有之度候也、

七五四ノ〇

此度大山彌助外四人、欧羅巴洲へ被差遣候ニ付てハ、右五人共従者ハ不召連単身ニて罷越シ可然義と存候、尤自分勝手ニて召連罷越候儀ハ、当人之心得ニて、旅費御渡シハ無之て可然存候、依て一応及御掛合候間、御省中御見込至急致承知度、御異存有之候ハ、早々此便へ御答可有之候也、

庚午八月廿三日

弁官

兵部省

御中

七五四ノ一

大山彌助外四人、歐羅巴へ被差遣候ニ付、従者之義昨日も御申越有之候通、何も異存無御座候、其通相成可然儀と存候、此段御答申進候也、

庚午

八月廿四日

兵部省

弁官御中

七五四ノ二

鹿兒島藩大山彌助外四人とも今度洋行ニ付、旅費御渡し方可有之旨、御申越之趣致承知候、然ル処往返舟車賃及ヒ食料、一人ニ付二千弗宛御渡し可有之旨ニ候得共、右五人とも従者ハ不召連、単身ニテ罷越候御見込ニ付、従者入費ハ御渡しニ不及申候間、此段御承知有之度候也、

庚午八月廿四日

弁官

大藏省御中

追テ本文従者召連候共、自分勝手ニ付、入費ハ御渡しニ不及候事、

七五四ノ三

別紙之通高知藩より願出相成候処、尤之儀ト勤考仕候ニ付、退助代りとして有造洋行被仰付御請仕度、此段

厚ク申進候也、

庚午

八月廿四日

兵部省

弁官御中

七五四ノ四

右ハ弊藩板垣退助歐羅巴洲へ行被^{一字脱力(洋乙)}仰付置候処、藩庁用ニ付、帰藩為仕度奉願候処、御聞届被 仰付候付、右之者板垣退助為代歐羅巴洲へ御差立被 仰付度奉願候、以上、

庚午

八月廿四日

高知藩公用人 毛利恭助

兵部省

御役所

七五四ノ五

高知藩板垣退助義、依願洋行被 仰付度段、尚当藩ヨリ退助代り被 仰付度段、当省へ願出候ニ付、御許容相成度、昨日申出仕候処、今日河村大丞へ 御沙汰之趣ニテハ、退助儀再度出府之節、洋行仕度段

内願仕置候趣ニ付、同人代り申義ハ不相成段為申聞之趣承知仕候、然ル処早速同藩之者呼出、委細相尋申候処、退助義ハ決テ右様之儀ハ無之、再度出府万一洋行願出候共、其節ハ自費ニテ罷越候心中ニ御座候テ、夫等ハ御懸念不被為在、何卒代り人被差遣候趣願度、繰々申出、別紙改テ願差出し候間、厚御評議被成下、願之通御許容相成候様仕度、此段申進候也、

庚午八月廿二日

兵部省

弁官

御中

^{七五四ノ一六}鹿兒島藩大山彌助外四人、今度歐羅巴洲へ被差遣、凡六七ヶ月モ滞在之御見据ニハ候得共、戦地へ罷越候義ニ付、平常洋行トモ違ヒ、旅費御渡方ノ儀モ格別之御取計有之度、付テハ先般山縣狂介有明・西郷真吾從進兩人洋行之節入用金不足ニテ、二千弗宛増渡之儀願出候儀も有之候ニ付、此度之御渡方右兩人之振合ヲ以、御増渡し之二千弗ヲ旅費ニ結ヒ込、御渡シ相成候欵、又ハ別段ニ用心金トシテ為御持相成候力、又ハ右御渡し方無之、平常ノ御渡金ノミニテ、不時ニ差支候節ハ、於彼

地借用致シ、帰国ノ上彼国へ御払ヒ相成候力、右三件之内何レトモ至急御取極メ有之、今第十二字迄ニ御回答可有之候也、

庚午八月廿五日

弁官

大蔵省

御中

追テ山縣・西郷兩人へ御増渡しノ金高二千弗ト認候得共、其辺睨ト当官ニテハ相分り不申候間、其御省ニテ御取調之上、御見込承知致シ度候也、

^{七五四ノ一七}

鹿兒島藩大山彌助外四人、今度歐羅巴洲江被差遣候処、戦地江罷越候儀ニ付、平常洋行とも違ヒ、旅費渡方之儀も格別之取計有之度、付テハ山縣狂助・西郷真吾洋行之節、増渡し之儀願方も有之、右之振合ヲ以二千弗渡方取計候様承知致シ候、右ハ為用心金渡方取計候様可致候、且中濱万次郎儀ハ通弁之趣ニ付、奏任出仕之旅費ニも及申間敷哉、御見込致承知度、至急御答有之度、此段御答旁申入候也、

大蔵省

弁官御中

七五四ノ一八

歐羅巴行之面々、来ル廿八日頃出帆之都合ニ付、諸費用差急ギ候ニ付、前刻も申入候通早々御詮議可有之、全体戦地跋涉之儀候事故、尋常罷越候者トも違ヒ、臨時之入費も有之候故、忝人一季分四千五百兩之見積リヲ以、六七ヶ月分御渡可相成、去ル廿二日御見積御申出相成候分ハ、上下兩人ツ、之処御詮議之趣も有之、皆々単行ニテ従者無之、然レハ忝人分之外ニ用心金千弗宛、合シテ二千二百兩宛一人へ可与^マ立^マ下御詮議ニ候間、其辺ニテ受取罷出候ハ、御渡方可相成、此段申入候也、

追テ用心金千弗之分ハ、帰国之上過不足可申出様可被相達候也、

庚午八月廿五日

弁官

大蔵省

御中

七五五 藩庁西郷隆盛ヲ以テ鹿兒島藩ノ大参事ト

為ス

八月十五日

藩庁西郷隆盛ヲ以テ、鹿兒島藩ノ大参事ト為ス、

西郷吉之助

任鹿兒島藩大参事

右

宣下候事、

庚午七月

太政官

右之通被

仰出、今日 御直ニ被 仰達候条、向々江可申渡候、

八月十五日

知政所

七五六 有馬次兵衛へ李漏生国留学ヲ命ス

八月十七日

朝廷ニ於テハ、鹿兒島藩士有馬次兵衛へ李漏生国留学ヲ命ス、

鹿兒島藩

有馬次兵衛

李漏生国留学申付候事、

庚午八月十七日

七五七 藩庁横山安武へ下賜ノ祭祀料目録ヲ返上

稟請ス

八月十八日

藩庁、先キニ横山安武正太郎へ、祭祀料トシテ太政官ヨリ

下賜ノ目録ヲ返上稟請ス、

七五七ノ一藩士横山正太郎儀、死ヲ以テ献言仕候処、誤聞ノ廉有之、

実以テ恐入次第二御座候、右ニ付祭祀料頂戴被仰付候得

共、誤ヲ正シク申立候始末、御咎目奉蒙筈候処、却テ

御目録被成下候テハ、名実不相当ノ訳何以靈魂慰可申

哉、賞罰ノ典ニヨヒテ、何レトモ方嚮ヲ失ヒ、所置難

仕御座候間、重疊恐懼ノ至御座候へ共、御目録返上仕

候付、宜敷御執奏奉冀候、以上、

八月十八日

鹿兒島藩庁

七五七ノ一

道島正亮日記八月廿六日

横山カ自殺於東京、余リ評判モ不宜、不似合ノ致方杯

ノ段々風説有之、八月初旬頃大隊長中村半次郎罷下候

様ノ説被立候、八月廿五日当分教頭池上四郎左衛門不

時ニ出立、左之通御使者ニテ候ヨシ、

藩士横山正太郎死ヲ以テ献言仕候処、誤聞ノ廉有之由、

実ニ奉恐入候次第二御座候、右ニ付祭祀料頂戴被仰

付候へトモ、誤ヲ正シク申建候始末御咎目可奉蒙筈

之処、却テ 御目録被成下候テハ、名実ニ不相当ノ

訳、何ヲ以テ祭シ、何ヲ以テ靈魂ヲ慰可申哉、賞罰

ノ典ニヨヒテ何レトモ方嚮ヲ失ヒ、所置難仕御座候

間、重疊恐懼之至御座候へトモ、御目録返上仕候間、

宜敷御執奏奉冀候、以上、

鹿兒島藩庁

右ハ西郷吉之助書ノ由、専ラ風説イタシ候由、

七五八 海江田信義ヲ奈良県知事ト為ス

八月十九日

朝廷ニ於テハ、海江田信義次武ヲ以テ奈良県知事ト為ス、

七五八ノ一

鹿兒島県士族

海江田信義

○中略

同年明治三年八月十九日

天保三壬辰年二月生

武次

一任奈良県知事、

同日

一叙従五位、

○以下略ス

七五八ノ二

○奈良県

略○中

奈良県知事

略○中

三年八月十九日任 海江田信義 鹿兒島士

四年十一月廿二日廢官、

同年明治三年八月十九日

一任堺県知事、

同日

一叙従五位、

○以下略ス

七五九ノ一

○大阪府

堺県知事

略○中

三年八月十九日兵 税所篤 鹿兒島士四年十一月廿二日廢官、県令ニ更任

略○以下

七五九 税所篤ヲ堺県知事ト為ス

八月十九日

朝廷ニ於テハ、税所篤長藏ヲ以テ堺県知事ト為ス、
七五九ノ一

鹿兒島県士族

税所藤原篤

篤信
長藏

略○中

七六〇 府藩県ヨリノ上納金並ニ囚人等護送中ノ

宿泊所ニ不寝番ヲ置カシム

八月二十日

府藩県ヨリノ上納金並ニ囚人等護送中ノ宿泊所ニハ、不

寝番ヲ置カシム、

(通誌) 四年太政官第五百三十九ヲ以テ改ム一
[第五百三十六] 八月二十日(布) (太政官)

府藩県ヨリ差立上納金並囚人等、是迄旅中泊宿ニ於テ

明治3年(1870)

区々之取計有之、駅々難渋之趣相聞候間、向後右等差
立候節、旅中泊宿ニテ駅方ヨリ預証文取候トモ、不寝
番為致候人足ハ、相当之賃錢ヲ以テ相雇ヒ、護送之者
旅宿ニ於テ不寝番可申付事、

【参看】

〔頭註〕「六年太政官第三百九十一号、七年大蔵省乙第三号達参看、十年内務省乙第七号達ニ依リ消滅」

【第五百三十九】 十月十四日(布)

各県ヨリ差出候上納金並ニ囚人泊宿ニ於テ、取計方ノ
儀ニ付、昨午八月中御布告ノ次第モ有之候処、以来宿
方へ預ケ候儀ハ不相成候条、宿役人ヨリ身元慥成モノ
相選ミ為差出、護送人泊宿ニ於テ不寝番申付、其所相
当ノ賃錢可相払候事、

但不寝番ノモノ共不正筋有之カ、又ハ怠慢ヨリ異変
出来候節ハ、自分並ニ番人迄相当ノ咎可請旨ノ証
書、宿役人ヨリ可為差出事、

七六一 西郷従道ヲ兵部権大丞ト為ス

八月廿二日

朝廷ニ於テハ、西郷従道稱儀ヲ以テ兵部権大丞ト為ス、

鹿兒島県士族

西郷従道

〔慎吾〕

略○中

庚午八月十二日

一御用有之、当分東京滞在被仰付候事、

庚午八月廿二日

一任兵部権大丞、

略○以下

七六二 本藩並金澤以下十九藩ニ民政ニ熟練ノ者

各一人ヲ撰出セシム

八月廿三日

本藩並ニ金澤以下十九藩ニ令シテ、民政ニ熟練ノ者各一
人ヲ撰出セシム、

島津鹿兒島藩知事

御用有之候間、民政熟練之者一人相撰、至急差出候事、

〔本〕
「庚午八月廿三日 内閣記録課蔵「公文録鹿兒島藩伺」ニハ年月日」
「本執筆史料ニハ年月日ナシ」

【参照】

前田金澤藩知事

徳川静岡藩知事
徳川名古屋藩同上

徳川和歌山藩同上

細川熊本藩同上

毛利山口藩同上

鍋島佐賀藩同上

徳川水戸藩同上

池田鳥取藩同上

藤堂津藩同上

松平福井藩同上

池田岡山藩同上

伊達仙臺藩同上

山内高知藩同上

佐竹久保田藩同上

井伊彦根藩同上

上杉米澤藩同上

酒井大泉藩同上

溝口新發田藩同上

豊凶平均ヲ見テ定免ヲ稟候セシム

八月廿四日

諸藩及旧幕旗下上地村々四五年検見ノ上、豊凶平均ヲ見テ定免ヲ稟候セシム、

(頭註)「六年太政官第二百七十二号ヲ以テ廢止
[第五百四十四]」八月廿四日(大蔵省)

諸県支配地之内、諸藩及旧幕旗下上地村々去巳年検見之上、取箇取極又ハ私領引付等、依申立取計候分モ有之候得共、畢竟是迄收租ノ法不一定所ヨリ、村民狐疑ヲ抱、不都合之場合ニ立至候間、当午年ヨリ兩三年乃至四五ヶ年致検見、豊凶平均地味厚薄熟知、無偏頗定免迂取極、右ヲ目的ニ相立伺出可申候事、

但府県調方一定不相成候テハ、不都合ニ候間、隣接地方官江申合、取計可申候事、

七六四 大山巖歐洲派遣ノ同行ヲ吉田清成ニ命ス

八月廿五日

大山巖ニ歐洲派遣ヲ命シタルニ依リ、其同行ヲ吉田清成ニ命ス、

七六三 諸藩及旧幕旗下上地村々四五年検見ノ上

七六四ノ一

亞米利加国留学生吉田巴二へ、別紙之通

御沙汰相成候間、今度大山彌助航行彼国へ立寄、同人へ相達シ、歐羅巴へ同行致シ候様、御達可有之候也、

庚午八月廿五日

弁官

兵部省

御中

七六四ノ二

鹿兒島藩

吉田巴二

御用有之、大山彌助歐羅巴洲へ被差遣候ニ付、同行被仰付候事、

庚午八月廿五日

太政官

七六四ノ三

吉田巴二

右ハ、今度大山彌助外四人歐羅巴洲江被差遣、李佛両国へ引別レ罷越候ニ付、佛国為通辞被差遣候間、旅費

御詮議可有之候也、

庚午八月廿五日

弁官

大蔵省

御中

七六四ノ四

吉田巴二

右今度大山彌助外四人歐羅巴洲江被差遣、李佛両国江引分レ罷越候テ、佛国為通辞被差遣候間、旅費詮議可有之旨御達ニ付、取調候処、彼者儀ハ未米因滞留中ニ付、旅費用意トシテ洋銀二千弗可相渡候ニ付、右五人至急出足之由候故、右便ヲ以差送り候様取計候間、此段及御答候也、

庚午八月廿七日

大蔵省

弁官

御中

七六五

藩庁郷土持高兼併ノ積弊ヲ矯メ、一郷中

協心戮力スヘキヲ令ス

八月廿五日

藩庁郷土持高兼併ノ積弊ヲ矯メ、一郷中協心戮力スヘキヲ令ス、

一諸郷土着士族之儀ハ、往古天下一同

天朝之兵制ニテ、無双之良法ニ候処、御藩内而已残唐、

中古歴代之戰爭有名之士土着之内ニ不少、且耕シ且戦ヒ義勇相助候御国風ニ候得共、方今治乱之職業祖先ニ不恥様勉勵可有之候、畢竟衰世ノ習弊相募リ、過当之持高等兼併、安逸ニ馴候輩衆、并之耕戦之道スリ致苦情候事ニ立至候、就テハ土着之不相勤訳ニ付、以来右体名実ニ不相協、無益之者ハ土族差上候、全体其郷ヲ屯田之実地ニ相心得、夫々耕地割渡候儀当然之訳ニ候得共、自分其趣法ヲ立施行可致事ニ候、乍然民之塵ヲ奪フ如キノ失体ニ陥候テハ不相濟儀ハ、誰モ存知之前

ニ候処、士民共相互ニ便ヲ得、各其業ニ安シ、一郷ハ一郷丈ケ之全力無之候テハ、世々変乱ハ何時到来モ難測事ニ候得共、境内又ハ海岸之場所ハ、若哉賊徒襲来モ不被計、其場ニ至リ候節ハ、其郷ヲ先陣ト被相定候儀、古来之御規則ニ候間、形勢ニ依テハ地頭管轄之人數、何方迄モ出陣被仰付儀モ可有之候条、其時ニ至リ御藩名ヲ不汚様、兼テ手厚可申談旨地頭へ申渡、可承向々へモ可申渡候、

午八月廿五日

知政所

七六六 鹿兒島藩士湯地定基へ米国留学ヲ命ス

八月廿五日

朝廷ニ於テハ、鹿兒島藩士湯地治右衛門へ米国留学ヲ命ス、

鹿兒島藩

(定基)

湯地治右衛門

米利堅国留学被 仰付候事、

但專ヲ農政学研究可致事、

庚午八月廿五日

七六七 兵部省ヨリ深川仙臺堀鹿兒島藩上邸跡ノ

貸与方ヲ稟請ス

八月廿五日

兵部省ヨリ深川仙臺堀鹿兒島藩上邸ノ跡へ、暫ク兵器置

場所ノ貸与方ヲ稟請ス、

造兵司諸器械、今般大坂表へ差送リニ相成候処、暫時

差置候ニ付、何分大器ニテ可然場所無之、甚困却仕候

間、深川仙臺堀鹿兒島藩上邸、水利等モ大ニ都合宜敷

候故、当省へ御貸渡被下候様致度、此段至急申進候也、

庚午八月廿五日

兵部省

弁官

御中

七六七ノ二

別紙之通兵部省ヨリ申出候間、御取調早々御答有之度、

此段申入候也、

庚午八月廿五日

弁官

東京府

御中

追テ別紙御返却可有之候也、

七六七ノ三

過日御申立造兵司諸器械置場所、深川仙臺堀鹿兒島藩

上邸之義、東京府へ相達候処、別紙三通申上候ニ付、

猶御取調外上邸御申立可有之候、依テ此段申入候也、

庚午八月廿七日

弁官

兵部省

御中

七六七ノ四

深川仙臺堀鹿兒島藩上ヶ邸之儀、造兵司大器械置所ニ

暫時御貸渡相成度旨、兵部省より申立候ニ付、御達之

趣承知仕候、右は於当府品々見込も有之、頃日修繕等

之取調もいたし居候間、右邸へ行渡兼候間、外上ヶ邸

之内見立相願御達相成候上ハ、早々取調可申上候、此

段兵部省へ被仰達被下度、別紙返上此段申上候也、

庚午八月廿五日

東京府

弁官

御中

七六八 藩庁從來宮繕役職ノ輩ニ与フル慰勞金ノ

給与方ヲ停止ス

八月廿七日

藩庁ニテハ、從來宮繕役職ノ輩ニ与フル慰勞金ノ給与方

ヲ停止ス、

一御当地ハ勿論諸郷何ツノ御普請等ニ付、掛ノ面々へ骨

折料トシテ御成就等之節、金子等は迄被成下候得共、

右掛之向ハ職掌当然之事ニテ、為其俸禄又ハ旅扶持米

等、夫々相当之被下方モ有之候付、常例外之外御普請

等之節ハ、別段之事情得共、其余ハ骨折等以来ハ不被

成下候条、於向々モ深其職掌ヲ相考、聊御費筋之儀無

之様、可相心掛旨被仰渡度事、

八月廿七日

會計局

右之通被仰渡候条、可申渡候、

午八月

知政所

給与可致候事、

一 双方ノ軍艦港内へ進口致シ、一方之船出帆後廿四字内ハ、其一方ノ船出帆不相成候事、

一 開港場内ニ兵士ヲ置、軍艦滯泊其外、海軍屯所差許

七六九 李佛兩國交戰中局外中立ノ前令ヲ改メ、

更ニ府藩県ニ令ス

置候国モ有之候へ共、右ハ全ク平時港内在留之其自
国商民保護之為ニテ、他国交戰之為差許置候儀ニハ
無之候ニ付、右屯所平日ノ用事ノ外、総テ右場所ヲ
以、其敵国ヲ伐之利ニ資ケ候儀ハ不相成候事、

八月廿九日

朝廷ニ於テハ、李佛兩國交戰中局外中立ノ前令ヲ改メ、

更ニ府藩県ニ之ヲ令ス、

〔第五回四十六〕 八月二十九日(布)(太政官)

李瀾生・佛蘭西兩國交戰ニ及候処、於 皇国ハ局外中

立ニ付、開港場並ニ海岸諸要区心得之条々、先般御布

告相成候処、更ニ左之通り御改定相成候事、

一 港内及ヒ内海ハ勿論ニ候へトモ、外海之儀ハ凡三里

陸地ヨリ砲丸ノ達スル距離以内兩國交戰ニ及候儀ハ不相成、尤軍艦・

商船共、通行ハ是迄通り差許候事、

一 薪水・食料等ニ欠乏シ、或ハ艱難ニ出逢ヒ、開港場

ハ勿論、不開港場へ来候右兩國之軍艦・商船トモ、

兼テ御布令之趣ニ基キ、通例之手続ヲ以、偏頗ナク

一 御国船艦ニテ交戰ニ及候方へ、兵士武器其外、直ニ
戰争ニ供シ候品物運輸イタシ候儀不相成候事、

一 交戰国ノ船艦へ水先案内ノ外被雇乘組、出先ニテ兵
難ニ遇ヒ及訴訟候儀不相成候事、

一 戰地ニテ分捕イタシ候品物ヲ、港内ニ於テ売買イタ
シ候儀不相成候、尤売買不致候テハ不相成場合モ有

之節ハ、其旨可伺出候、然ル上分捕致シ候国ノ公使
へ談判御処分有之へク候事、

一 其外輸出輸入品ニ就テハ、条約面ニ禁制セル品ノ外
ハ、平日ノ通心得可申候事、

一 右規則中外国人ニ相拘候件々違背及ヒ候様子相見候

節ハ、開港場ハ其国々コンシユルへ掛合差止可申、

若シ不服ノ節ハ、其港軍艦ニ相達シ、兵部ノ処置可有之候事、

但不開港場其外海岸ニテ、右様ノ儀有之候ハ、於

地方官近傍開港地ノ庁、並滯泊之御軍艦へ可相達、

懸隔之場所ハ、其願末速ニ兵部省並外務省へ可届

出候事、

右条々開港場並府藩俱諸要区屹度可相心得候事、

七七〇 藩庁一二等官役職者ノ俸給差減率ヲ令ス

是月(八月)

藩庁一二等官役職者ノ俸給差減率ヲ令ス、

一等官

一八百俵

内百六十俵

一千俵

内二百俵

一千二百俵

内二百四十俵

二等官

一三百五十俵

内七十俵

一四百俵

内八十俵

一四百五十俵

内九十俵

右ハ先般二等官任職之面々、依願俸禄之内七十俵ツ、

減少被仰付置候得共、此節ヨリ二等官勿論一等官之儀

モ、来年三月限右之通減禄被仰付候条、向々へ可申渡

候、

午八月

知政所

七七一 藩庁管内里程改定表ノ建設方ヲ令ス

是月(八月)

藩庁管内里程改定表ノ建設方ヲ令ス、

一鹿兒島藩内程表

東 高岡路至昌朝管地嵐田村界何里

山之口路至飯肥藩界何里

志布志路至高鍋藩管地福島界何里

南 至佐多岬何里・至山川港何里

明治三年八月

知政所

西 至加世田野間岬何里

出水路至熊本界何里

北 牛山路至熊本藩界何里

加久藤路至人吉藩界何里

一 鹿兒島程表ヨリ何里

右ハ此節御藩内大御支配付、道路里数御改定被仰付候

付、下町札辻辺へ程表石被召建、右之通被記置、諸方

里数塚木之儀モ、右之通書改被仰付候条、道繩引掛へ

申渡、向々へモ可申渡候、

但程表之儀ハ場所定置、追テ道繩引相濟候上書記シ

可相建候、尤幅尺等之儀ハ致吟味可申出候、

明治三年八月

知政所

七七二 藩庁伊藤彦介ヲ以テ家令ト為ス

是月(八月)

藩庁伊藤彦介ヲ以テ家令ト為ス、

一家令

伊藤彦介

右之通被仰付候条、可承向々へ可申渡候、

七七三 藩庁三帝追諡ノコトヲ藩内ニ令ス

是月(八月)

藩庁ニテハ、去月廿三日大友帝ヲ弘文天皇ト、大炊麿帝

ヲ淳仁天皇ト、九條麿帝ヲ仲恭天皇ト追諡セラレタルヲ

令ス、

大友帝

一 弘文天皇

麿 帝

一 淳仁天皇

九條麿帝

一 仲恭天皇

右之通

三帝御諡被為

奉候条、此旨相達候事、

庚午七月廿三日

太政官

別紙之通、於東京被仰渡候段申来候条、向々へ可申渡

候、

八月

知政所

七七四 藩庁外国人雇使規則ヲ藩内ニ達ス

是月(八月)

藩庁ニテハ、外国人雇使規則ヲ令セラレタルヲ以テ、更ニ之ヲ藩内ニ達ス、

外国人雇入候節ハ、兼テ相廻置候雇入心得書ノ廉々、
屹度相心得、条約面ニ於テモ、緊要之儀書加ヘ候様
可取計ノ処、往々疎漏ノ条約取極、其末彼カ議論ヲ醸
シ、徒ニ許多ノ失費ヲナシ、且外国ノ笑ヲ請候事不少、
因之尔来雇入候節ハ、条約面ニ左之廉々書加ヘ可申、
此他各其雇入ノ筋ニ付、要条ノ廉ハ了然相掲、不都合
無之様可取計候、此段申達候也、

庚午七月八日

外務省

- 一 給料一ヶ月何程並渡方前後、
- 一 食料旅費彼方手賄款、此方賄款、
- 一 雇入場所何所、
- 一 雇入年中若彼レ身勝手ヲ以暇ヲ乞候節ハ、其日迄ノ
給料ヲ遣シ、其翌日ヨリ不遣候事、

一 不勤ニテ、数日之間其職ヲ奉セス、或ハ酒色ニ耽リ
放蕩之所業有之、雇入タル本業ニ妨ケアル時ハ、年
限中トイヘトモ暇差遣、且其日ヨリ給料不遣事、
一 外国人雇入条約書並岡士承諾証書、何レモ横文相添
可差出事、

別紙之通、於東京被仰渡候段申来候条、向々ヘ可申渡
候、

明治三年八月

知政所

七七五 各藩支配地收納六箇年平均額ヲ録上セシム

ム

是月(八月)

各藩ヲシテ、各藩支配地收納六箇年平均額ヲ録上セシム、
〔頭註〕第七百三十二參看
〔第五百四十九〕八月(民部省) 諸藩

各藩支配地收納六ヶ年平均別紙雛形ノ通、往返日数ノ
外三十日ヲ限り早々取調可差出候、此段相達候也、
〔別紙雛形ハ第
三百八十一
二同シ〕

【参照】

〔第七百三十二〕 閏十月十日 (民部省)

各藩支配地收納六ヶ年平均調、往復之外三十日限り可
差出旨、先般相違候処、今以等閑或ハ猶予願出候向モ
有之、追々遅延致シ不都合ニ候条、来ル十二月限無相
違差出可申、尤実無拠差支之分ハ、其段可申出候事、

七七六 米金授受ノ節勘合印影ヲ進致セシム

是月 (八月)

府藩県ヲシテ、米金授受ノ節、勘合印影ヲ進致セシム、

〔第五百五十二〕 八月 (大蔵省)

府藩県米金受取渡ノ節、為見合入用ニ候間、大小印影
五枚宛、来ル九月廿日限り可差出候、此段相違候也、

七七七 騎兵・砲隊・銃中隊半隊長以下ノ月給額ヲ

定ム

是月 (八月)

朝廷ニ於テハ、騎兵・砲隊・銃中隊半隊長以下ノ月給額
ヲ定ム、

〔頭註〕「第千及第千一ヲ以テ解隊」
〔第五百五十三〕 八月

自今月給左之通差遣候事、

一 銃中隊半隊長	金七兩
一 同分隊長	同六兩
一 砲隊裨官	同五兩
一 銃中隊裨官	同五兩
一 同嚮導	同四兩
一 喇叭嚮導	同四兩
一 砲隊伍長	同二兩二分
一 銃中隊伍長	同二兩二分
一 喇叭伍長	同三兩
一 騎兵半隊長	同七兩
一 同嚮導	同四兩
一 同伍長	同二兩二分
一 第九小隊長	同十兩
一 同半隊長	同七兩
一 同分隊長	同六兩
一 第九分隊裨官	金五兩
一 同嚮導	同四兩
一 同伍長	同二兩二分

明治3年(1870)

一 砲騎銃手

同二両

一 喇叭手

同二両二分

一 砲隊御用掛属

同四両

一 銃中队御用掛属

同四両

【参照一】

【第一千】 十二月二十四日(兵部省)

第一二砲隊

第一二銃中队

今般兵制改革ニ付、解隊復籍申付、東京府へ引渡候条、
此旨相達候事、

【参照二】

【第一千】 十二月二十四日(兵部省)

第三砲隊

第三四銃中队

第九小队騎兵

今般兵制改革ニ付解隊復籍申付、東京府へ引渡候条、
此旨相達候事、

〔稿本表紙〕

明治三年
九月 忠義公史料稿本(初稿)九

〔稿本にて補正〕

七七八 町田久成ヲ以テ大学大丞ト為ス

九月二日

町田久成三郎ヲ以テ、大学大丞ト為ス、

鹿兒島県士族

町田久成

三郎

天保九戊寅年正月生

○中略

同治三庚午年九月二日

一任大学大丞、

○以下略ス

七七九 鹿島・香取両社遙拝ニ付、諸官省長官ヲ參

朝セシム

九月二日

鹿島・香取両社御遙拝ニ付、諸官省長官ヲシテ參朝セシム、

〔第五百五十四〕九月二日(布) (太政官)

来四日鹿島社 御遙拝、同七日香取社 御遙拝被為

在候ニ付、当日弁官以上並諸官省長官、第九字參朝可

致事、

但長官不參ノ節ハ、次官參 朝可致候、重輕服者ハ、

政府出仕ノ輩タリトモ可相憚事、

七八〇 申ネテ逃籍士民ノ復貫条規ヲ頒ツ

九月四日

申ネテ逃籍士民ノ復貫条規ヲ頒ツ、

〔頭註〕「四年太政官第一百三ヲ以テ改定」
第五百六十 九月四日(布) (太政官)

脱籍無産之輩復籍方ニ付、別紙之通御規則被相定候条、各地方官ニ於テ、右規則ニ随ヒ、送受方可取計候事、

(別紙)

規則

一 脱籍無産之輩、其本貫ニ復帰セシムルハ、士民ニ不拘、其者脱籍ノ始末及生國・親族等篤ト取糺シ、府藩県送ヲ以テ、本貫ヘ可引渡候事、

但士民共府藩県送りノ儀ハ、一応其本貫ヘ問合之上

取計、送方差支候者ハ、其本貫ヨリ請取人差出サ

セ可申候、且又平民之者当人帰國ヲ不望者ハ、其

本貫ヘ掛合、原籍ヘ復シ候上、其戻入稼人トイタ

シ、夫迄居附候地ヘ差置候トモ不苦候事、

一本貫ヲ脱籍イタシ候者、其居附候地ヘ入籍致シ度分ハ、

前同様本貫之地方ヘ掛合之上、人別ノ送渡ヲイタシ、

本人望之地方ヘ新ニ入籍セシメ、一戸之新籍ヲ立候ト

モ、又ハ他之厄介ト相成候トモ都合次第可取計事、

一 父母其元籍ヲ脱シ、流寓中出産之子、両親ヲ失ヒ生所

不相分者ハ、夫迄居附候地之籍ヘ編入可致事、

一 復籍為致ヘク者、原籍之地方ヘ引渡方之儀ハ、其可差

送官庁ヨリ可受取、地方官ヘ掛合之上、可取計管ニ候

ヘトモ、遠隔之地ハ往復時日遷延可致ニ付、当人之申

立慥成分ハ、其道筋府藩県送りヲ以差立置、其段可引

渡地方官ヘ相達可申事、

但当人生所之申立不慥成分ハ、都テ掛合之上差送可

申事、

一 右復籍ニ付入費之儀ハ、当人本籍存在候ハ、其親族

又ハ其村町ヨリ為差出可申候、当人除籍ニ候ハ、其

者差立候迄之入費ハ其地方官ニテ相賄ヒ、道筋之入費

ハ、道筋地方官之官費タルヘキ事、

但士卒又ハ平民籍外之者ニテ、村人別ニ不加、右費

用可差出親族モ無之者ハ、仮令除籍ニ無之候トモ、

本文同様地方之官費タルヘキ事、

一 有籍之者復帰セシムルニ付テノ入費ハ、兩地方官差送候

受取候官庁、打合之上計算可致、尤道筋之旅費ハ、差送候地方

官ヨリ凡積リヲ以テ繰替置、其者本官(マ)ヘ到着之上総入

費償却相成候様可取計事、

一 士卒平民其外共脱走之者有之節ハ、早速其地方官ヘ届

出、其親族又ハ村町ニテ精々探索イタシ、六ヶ月毎ニ

模様申立、三十六ヶ月ヲ過尋得不申候ハ、除籍致ス

へキ事、

但何等之子細有之候トモ、右期限前除籍致シ候儀ハ

不相成候事、

一各地方官ニ於テ疑敷所業有之、捕押候士民処置濟之上、

原籍へ引渡方ハ、都テ前同断之手続ヲ以取扱可申事、

但刑法ニ拘リ候儀ハ、刑部省へ伺之上取計可申候、

尤帰籍入費之儀ハ前条ニ照準シ、籍之有無ヲ以テ、

費用公私之別可相立事、

一復籍相成候輩ハ、生業相立候様地方官ニ於テ世話致可

遣事、

但右授産ニ付、廉立候官費有之節ハ、民部省へ伺之

上取計可申事、

右之通相定候事、

七八一 藩庁民事局人別方出錢定額ヲ令ス

九月四日

藩庁民事局人別方出錢定額ヲ令ス、

人別出錢一人ニ付

二十二文

一五人ヨリ十四人迄

差代 一文

一十五人ヨリ二十四人迄

差代 二文

一廿五人ヨリ三十四人迄

差代 四文

一三十五人ヨリ四十四人迄

差代 六文

一四十五人ヨリ五十四人迄

差代 八文

一六十五人ヨリ七十四人迄

差代 十二文

一七十五人ヨリ八十四人迄

差代 十四文

右之割ヲ以、出錢被 仰渡置候間、与中へ可被申渡

候、以上、

午九月四日

民事局

人別方

七八二 諸官員並宮・華族ノ家来下向滞在者ニ、留

守官印鑑ヲ交付ス

九月四日

在京諸官員並宮・華族等ノ家来下向滞在者ニ対シテ、自

今留守官印鑑ヲ交付ス、

(願註)「四年太政官第四百三十八ヲ以テ留守官廢止
第五百六十四」 九月四日 (留守官)

先般以来、諸官員並宮・華族等家来下阪滞在之向、当

官へ伺出聞届之上、京都府ニテ印鑑相渡来候処、自今
当官ニ於テ印鑑可相渡候条、此旨更ニ相達候事、

七八三 諸官員・宮・華族等家来ノ氏名・居所ヲ京
都府ニ開申方ヲ止ム

九月五日

諸官員・宮・華族等家来ノ氏名・居所ヲ、京都府ニ開申

方ヲ止ム、

〔頭註〕四年太政官第七十二依り消滅
〔第五百六十五〕

九月五日(留守官)

諸官員・宮・華族以下家来末々ニ至ル迄、姓名・居所
等巨細書記シ、京都府へ可届出旨、先般相達置候処、
自今不及其儀候事、

但市中住居之向、宿所届ハ從來之通同府へ可差出事、

七八四 宮・華族・門跡等家来ノ氏名・宿所ヲ彈正

台ニ開申方ヲ改ム

九月五日

宮・華族・門跡等家来ノ氏名・宿所ヲ、彈正台ニ開申方

ヲ改ム、

〔頭註〕四年太政官第三百三十六依り消滅
〔第五百六十七〕

九月五日(留守官)

宮・華族・門跡尼・御所家来、名前・宿所等云々(全文
百六十
二同シ)

右之通先達テ彈正台ヨリ申出候ニ付、相達置候処、自今
故障有之、暇差遣候向而已同台巡察出張所へ可届出、
其余ハ総テ不及届出候事、

七八五 彈正台京都出張所ヲ廢ス

九月五日

彈正台京都出張所ヲ廢ス、

〔頭註〕四年太政官第三百三十六ヲ以テ彈正台廢止
〔第五百六十六〕

九月五日(留守官)

彈正台

其台京都出張所被止候事、

但巡察官員滯京、時々交代可致事、

庚午七月二十五日

太政官

右之通ニ付相達候事、

七八六 集議院長官・判官及ヒ議員ヲ參朝セシム

九月八日

集議院長官・判官及ヒ議員ヲシテ参朝セシム、

〔頭越〕第五百八十三卷〕
九月八日〔太政官〕

明後十日十二字、集議院長官・判官並ニ議員一同参朝之事、

但衣服之儀ハ平服之事、

七八七 越中島ニテ薩・長・土・肥四藩兵ノ操練ヲ

天覽、偶暴風雨ニテ遽ニ還幸セラル

九月八日

〔東京都江東区〕

天皇越中島ニ臨ミ、薩・長・土・肥四藩兵ノ操練ヲ閱ス、

偶暴風雨アリ、遽ニ還幸セラル〔金四千両ヲ賜ヒ、兵士ヲ勞ス〕

七八七ノ一

明後八日、於越中島練兵

天覽、

行幸被

仰出候ニ付、

御道筋至急御取調、明日参

朝之節、御持参可有之候也、

九月六日

壬生東京府知事殿

追テ

御道筋警衛等之儀、例之通御取計可有之候也、

七八七ノ二

明八日、於越中島練兵

天覽被 仰出候事、

庚午九月七日

太政官

七八七ノ三

同七日

兵部省

明八日、於越中島練兵

天覽被

仰出候条、此旨相達候事、

庚午九月

太政官

七八七ノ四

明八日、越中島

行幸ニ付テハ、右御道筋万年橋破損所も有之哉之由、

篤ト御取調之上、早々手当方可有之、此段至急申入候

也、

明治3年(1870)

九月七日

弁官

供奉

東京府

御中

七
八
七
ノ
五
御道筋

大手より和田倉御門辰之口御堀端通り、呉服橋御門呉服町通り左へ通り、老丁目四日市左へ、江戸橋を渡り、荒布橋より小網町通り、左へ濱町通り、新大橋を渡り、佐賀町通り、相川町、熊井町、大島町、夫より越中島、

午九月七日

七
八
七
ノ
六

明八日、於越中島練兵

天覽、

行幸被 仰出候ニ付、供奉並御場所詰等、別紙之通差出可申候、就テハ御軍律並御行列書等、至急御差廻シ有之度、此段申進候也、

庚午九月七日

彈正台

弁官御中

追テ御場所詰之者ハ、御場所非常監視之為メ差出候儀ニ付、孰方ニテ取締受持ニ候哉、相伺候也、

七
八
七
ノ
七

過刻申進候明日練兵

天覽ニ付、御軍律並御行列書、至急御差廻有之度、再御掛合申進候也、

庚午九月七日

彈正台

御先御場所

- 九條彈正尹
- 北垣大巡察
- 小原少巡察
- 根岸巡察属
- 佐野巡察属
- 山田大巡察
- 武久權大巡察
- 阿部少巡察
- 尾崎少巡察
- 大井巡察属
- 今江巡察属
- 吉田巡察属
- 多賀巡察属

弁官

御中

七八七ノ八

御申越致承知候、即御行列書並御道筋書御廻シ申入候、
軍律之儀ハ此度ハ無之候間、此段及御答候也、

庚午九月七日

弁官

彈正台

御中

七八七ノ九

今日

御幸被為在候処、大風雨ニ就テハ、最早

還幸相成候哉、亦ハ何方ヘ欵

御駐輦被為在候哉、至急相伺候、御即答有之度、此段

申進候也、

庚午九月八日

彈正台

弁官

御中

七八七ノ一〇

御書面之趣承知候、唯今

還幸被為在候、此段及御答候也、

即刻

彈正台

御中

七八七ノ一一

鹿兒島藩

山口藩

佐賀藩

高知藩

徵兵

各通

昨八日、於越中島練兵

天覽之節、俄ニ暴風雨兵士難洪不少、依之為慰勞目錄

之通下賜候事、

庚午九月九日

太政官

目錄 四千兩

右四藩へ

七八七ノ一二

明治三年九月八日、天皇兵ヲ越中島ニ閱ス、偶暴風

雨アリ、遽ニ還幸ス、

是日 天皇越中島ニ臨ミ、薩・長・肥・土四藩兵ノ

操練ヲ覽ル、偶暴風雨アリ、未タ畢ラスシテ 還幸

ス、九日金四千両ヲ兵士ニ賜フ、

略ス

七八七ノ二三

九月八日、車駕越中島ニ臨幸シ給フテ、薩摩・長門・

土佐・肥前四藩徵兵ノ操練ヲ親閲シ給フ、会マ暴風雨至ル、操練未タ終ラスシテ、還幸シ給フ、此日具視扈從セス、天象悪シ、ト雖、猶ホ臨幸シ給フト聞キ、急ニ蓑ヲ披キ、草鞋ヲ穿テ、徒步シテ越中島ニ至ル、車駕既ニ還幸ノ後ナリ、故ヲ以テ直ニ参朝シテ天機ヲ候ス、而シテ十二日ヲ以テ、再ヒ越中島ニ臨幸シ給フヘントノ命ヲ承ク、乃チ手書ヲ三條實美ニ贈リ、之ヲ告ク、其文ニ曰ク、

今朝天象悪敷候間、行幸御延引ハ勿論之事ト相心得候テ大隈方ヘ罷越、御用談為濟帰宅ノ上承リ候処、矢張行幸被為在候旨、臣大隈ヨリ帰路スラ風雨烈敷、頗ル困難之次第ニ付、鳳輦之御危難甚御案申上、不堪安座、風雨ヲ衝キ步行シテ、越中島行在所ヘ参上候処、最早還幸被為在候旨、拝承仕候ニ付、直ニ引返シ参朝候処、三職御方々ハ御退出後ニテ、中山・萬里小路両御参り合セ相成居候間、今日練兵半途

ニテ還幸被為遊候間、此後ハ如何可被遊候哉ト、両御ヲ以テ思召之程奉伺候処、今度俄ニ四藩徵兵之操練御覽之儀、被仰出候御趣意ハ、李佛戰爭之折柄、殊更海外形勢御懸念被為在、国内軍備之儀、至重至大ト被思召候ヨリ被仰出候儀ニ付、今日之天象還幸被為在候ハ、一時不得已之儀、是非共天覽之思召ハ御貫徹被遊度、明九日快晴ニ候ハ、於旧本丸跡天覽被為遊度、若雨天又ハ泥濘ニテ難操練候ハ、明夕ヨリ御潔斎、十一日神宮御遙拜、十二日朝御神事解ニ付、十二日以後雨天順延之御積ニテ、天覽可被為遊旨被仰出候、然ル処、内実四藩徵兵交替之都合モ有之、洋船雇入方彼是心配之旨モ有之候段、及言上候得共、是非前条之通御沙汰被為在候ニ付、三職御方々ヘ御相談モ不申入候得共、退朝掛ケ兵部省ヘ立寄り、河村・鷹谷兩人ヘ面会、御沙汰之旨申入候得ハ、兩人申候ニハ、右様被仰出候ハ、四藩兵隊モ一層憤発、弥感奮可仕ト奉存候間、十二日以後、越中島行幸之儀御請申上候、乍併洋船雇入之費用辺、心配之談シモ有之候得共、右延引之分丈ハ、政府ヨリ別段ニ相償可申様申聞置候、依之明日旧本丸跡ニ

テ、天覽之儀ハ御止ニ相成候、此段言上迄如此御座候、頓首、

九月八日

具視

三條殿

追テ一分ニテ卒尔之取計、何共恐入候得共、明日ハ節句、同夜ヨリ御潔斎、十一日ヨリハ兵隊交替ニ付余日無之、彼是苦心右様取計申候、思召モ候ハ、早々御賢示可被給候也、

七八七ノ二四

大久保利通日記

八日明治三年九月

一今日於越中島練兵就 叡覽、五字參朝、七字御發輿、供奉九字頃越中島ニ至ル、今日暴風雨調練半途ニシテ還幸、誠ニ烈風迅雷、希代ノ天変、水溢レ、家倒レ、御通行筋難渋、心配絶言語候得共、無御滞 還御奉安心候（風雨溢水永代橋流ル）

七八七ノ二五

昨日は川村江来る八日調練

叡覽御内定被為在候付、内々相達置、表通御沙汰ハ今日可有之趣ニテ達申候、直様都合ニ相掛り候事ハ、取

掛り可申候へ共、表通御達無之て不相濟事柄も有之候付、是非今日中ニハ御運被成下度と、別て承申候、自ら今日ハ其通御達シ之趣ニ御咄ニ御座候へ共、為念申上候、尤明後日ニなり候得は、是非今日ニハ彼は無手拔様有之度奉存候、早々再白、

七八八 藩制太政官ヨリ布告セラル

九月十日

藩制ヲ釐革シ、分ツテ大中小三等（大藩十五万石以上、中藩五万石以上、小藩二万石以上）

ト為シ、知事・参事以下ノ職員、海陸軍資公廩及ヒ知事・士卒ノ家禄ヲ定メ、官禄ハ各藩其宜シキニ從ヒ、藩債ハ公廩費・家禄ニ賦課シテ之ヲ償却シ、藩製紙幣兌換ノ成算ヲ立テ、毎年十二月歳計ヲ録上シ、俸禄ノ与奪及死刑ヲ除クノ外、賞罰ハ悉ク知事ニ委ス、知事ノ朝參ハ三歳一次トシ、滞京ハ三月ヲ限ル、又公議人及ヒ公用人ヲ廢シ、正権大参事ヲ以テ議員ト為ス、

（頭註）「四年太政官第三百五十三ヲ以テ廢藩」
〔第五百七十九〕 九月十日（布）（太政官）

今般藩制別紙之通被 仰出候、素ヨリ其綱領ヲ被掲候儀ニテ、節目施設之方ニ至テハ、篤ト御旨意ヲ奉体シ、

藩々其宜ヲ斟酌シ、務テ旧弊ヲ除キ、有名無実ニ不涉、
政績相頭候様尽力可致事、

(別紙)

藩制

一藩分為三、物成十五万石以上ヲ大藩トシ、五万石以

上ヲ中藩トシ、五万石未満ヲ小藩トス、

〔頭註〕「第六百四十二參看」
一石高ハ草高ヲ不称、物成ヲ以テ可称事、

但雑税金石八両立ニテ、本石高二可結込事、

一藩庁

知事

大参事 不過二人

権大参事 有無其便宜ニ従フ

少参事 不過五人

権少参事 有無其便宜ニ従フ、小藩ハ之ヲ置カス

以上掌見職員令

〔頭註〕「第五百八十九參看」
大属

権大属

少属

権少属

史生

以上分課専務スル所アルヘシ、譬ハ會計・軍事・刑法・
学校・監察ノ類ノ如シ、

右官員ノ多寡、大中小藩ニ従テ可為適宜事、

庁掌

使部

一藩高

譬ハ現米拾万石

内宅万石知事家禄

残九万石

但公廨諸費常額、追テ可被相定候ヘ共、当分左
之通、

内九千石海陸軍資

但其半ヲ海軍資トシテ官ニ納メ、半ヲ陸軍資ニ

可充事、

残八万千石

但公廨入費、士卒禄ニ充ヘシ、尤精々節減シ、

有余ヲ以テ、軍用ニ可蓄置様、可心掛事、

〔頭註〕「第九百四十四參看」
一官禄藩々之適宜ニ任スヘキ事、

一功アツテ禄ヲ増シ、罪アツテ禄ヲ減キ、及ヒ一切ノ

死刑等ハ 朝裁ヲ請ヘシ、一時ノ賞並ニ流以下ノ刑

ハ、収録シテ年末ニ可差出事、

一士族・卒之外、別ニ級アルヘカラサル事、

一正権大参事ノ内一人在京、集議院開院之節、即チ可

為議員事、

但半年交代可致、尤公議人称呼廃止之事、

一公用人ノ称呼ヲ廃シ、其事務之大小ニヨリ、参事或

ハ属等ニテ用弁ヲナサシムヘキ事、

一知事朝集三年一度、年々四季ニ分チ、滞京三ヶ月タ

ルヘキ事、

但国家重大之事件ニヨリ、朝集ハ此限ニアラス、

一歳入・歳出年々十月ヨリ九月迄ヲ限り、分界ヲ立テ

別紙雛形之通明細書ヲ以テ、年末ニ可差出事、

但雛形ハ追テ可相違事、

一従前藩債ハ一般之石高二閑スル事ニ付、其支消之法

ハ、藩債之総額ニヨリ、支消年限之目的ヲ立、知事

家禄・士卒禄、其他公廨入費等ヨリ分賦シテ可償却

事、

【参照】

大久保利通日記

廿八日 明治三年八月

一八字参朝、御評議例之通、四字ヨリ條公亭江集会、藩

政之儀評議有之、華族東京住、家禄減少等ノ件、異論

ヲ立候、実名唱ノコト同断、

七八九 諸藩知事一門ノ輩ニ位階ヲ賜フヲ停ム

九月十日

諸藩知事一門ノ輩ニ、位階ヲ賜フヲ停ム、

諸藩知事一門之輩、追テ位階可賜旨、被 仰出有之候

処、御詮議之筋有之、位階不被下候旨更ニ被 仰出候

事、

七九〇 皇族・華族ノ臣隸職員ヲ定ム

九月十日

皇族・華族ノ臣隸職員(家令一人、家扶一家)ヲ定ム、

九月十日 (布) (太政官)

官並ニ華族家人・職員左之通、

家令 一員

家扶 人員宜ニ任ス

家従 同

家丁 同

右之通被定候事、

七九一 集議院ヲ閉ツ

九月十日

集議院ヲ閉ツ、

〔第五百八十二〕 九月十日(沙)(太政官)

集議院

閉院被 仰出候事、

七九二 集議院議員ヲ帰藩セシム

九月十日

集議院議員一同ヲシテ、帰藩セシム、

〔第五百八十三〕 九月十日(沙)(太政官)

議員

今般藩制被 仰出候ニ付テハ、一同帰藩被 仰付候事、

但藩制至重之事ニ付、本文之通ニ候条、前日御下問

度量之儀ハ、帰藩之上以書面可申上事、

七九三 三條右大臣ニ練兵代覽ヲ令ス

九月十二日

天皇再ヒ越中島ニ幸シテ、練兵ヲ覽ントス、偶聖体不予

ヲ以テ、右大臣三條實美ヲシテ代臨セシム、

〔七九三〕 九月九日

兵部省

来ル十二日、於越中島練兵

天覽被

仰出候事、

但雨天御順延之事、

庚午

九月

太政官

右之通被 仰出候間、申入候也、

九月十日

弁官

諸官省宛略ス

七九三ノ二
明後十二日、越中島おいて練兵

天覽之儀、兵部省へは昨日被

仰出候趣及承候ニ付、御模様相伺申候也、

庚午九月十日

東京府

弁官

御中

尚以同日獨逸參

内之儀は、延引ニ相成可申哉、是又相伺申候也、

庚午九月十日

弁官

七九三ノ三
御申越之趣致承知候、来ル十二日越中島

行幸之儀、只今申入処、此下二字脱カ行違ニ相成候と致候、且来ル

十二日外国公使參 朝之儀、御延引ニ不相成候間、此

段御答申入候也、

庚午九月十日

弁官

東京府

御中

仰出候、就ては御規則並御列御道筋等、総て去ル八日
之通ニ有之、此段為御心得申入候也、

庚午九月十日

弁官

東京府

御中

七九三ノ五
過刻、来ル十二日越中島練兵

行幸之儀、総去八日之通と申入候処、

御出興は九字ニ有之候間、此段申入候也、

庚午九月十日

弁官

東京府

御中

七九三ノ六
来ル十二日、於越中島練兵

天覽 行幸被 仰出候、就ては御規則並御列御道筋等、

総て去ル八日之通ニ有之候間、為御心得申入候也、

庚午九月十日

弁官

彈正台

御中

七九三ノ四
来ル十二日、於越中島練兵

天覽行幸被

明治3年(1870)

七九三ノ七
過刻、来十二日越中島練兵

行幸之義、総て去ル八日之通ト申入候、第九字御出興
ニ有之候間、此段申入候也、

庚午九月十日

弁官

彈正台

御中

七九三ノ八
先日ヨリ

行幸之節、供奉に別紙之通出張之例ニ候処、当四月駒
場野練兵

天覧 行幸之節ハ、総て御軍律ニテ、段々御達之趣モ
有之事故、人員減少致候得は、此度ハ尚又先例之通ニ
出張可致候、就てハ

御前後之列、且巡察之場所柄等御差図有之度、此段申
進候也、

庚午九月十日

彈正台

弁官

御中

御先場所詰

武久權大巡察

尾崎少巡察

大井巡察属

多賀巡察属

御先供奉

九條 尹

山田大巡察

阿部少巡察

今江巡察属

吉田巡察属

御後供奉

稻津權大忠

小原少巡察

根岸巡察属

佐野巡察属

御先

忠以上 吉人

大巡察 吉人

少巡察 吉人

属 式人

御後

忠以上 一人

大巡察 一人

少巡察 一人

属 三人

練場巡察

大巡察 一人

少巡察 一人

属 三人

以上

七九三ノ一〇

御申越致承知候、今般ハ練兵天覽行幸ニ付、軍律書ハ

無之、且御場所非常云々之儀、弁官供奉ニ有之候間、

右弁官へ御問合有之、仍て御答申入候也、

庚午九月十日

弁官

彈正台

御中

七九三ノ一一

別封屯通御執達有之度、御採用ニ相成候哉、否哉、至

急御答有之度候也、

庚午九月十日

彈正台

弁官

御中

七九三ノ九
去ル七日、越中島練兵

天覽 行幸之御軍律等、御回有之度申進候節、右御場

所詰之者ハ、御場所非常監視之為差出候義ニ付、取締

向ハ執方ニテ受持ニ相成候哉、相伺候一条御答未タ無

之候間、右早々御答有之度、此趣再申進候也、

庚午九月十日

彈正台

弁官
御中

〔朱〕
一明日尹參

朝之上、何分之

御沙汰可有之候事

七九三ノ一二

来ル十二日、於越中島練兵

天覽

行幸被 仰出候趣奉拝承候、然ルニ一昨八日

天覽之節、風雨激水ニテ、出張之人員一同狼狽途ヲ失

ヒ、還幸之節供奉警衛等モ乏シク、總テ御規則不相立、

不容易混雜ニ相及候様、天変水沓畏ニ不足トハ、書生

無識之者ノ説処ニシテ、堂々タル

朝廷ノ御体裁ニハ有之間敷、聖賢ニ於テハ、戎慎恐懼

有之候儀ニ付、此般変沓ノ如キハ、

聖体ニヲイテモ、深ク

御自省被為在、且当日出張之官員等、奉職之得失ニヨ

リ、賞罰等モ嚴ニ被

仰付候上、更ニ日ヲ撰テ

天覽被 仰出度奉存候、抑供奉ノ人員狼狽、方ヲ失ヒ

御輿ノ前後御手薄ノ事ニテ、若シ万々一不慮ノ変差起

リ候ハ、何ヲ以テ之ヲ防カン、実ニ寒心ノ至ニ奉存

候、禍ヲ未萌ニ防キ候ハ、前哲ノ格言ニ御座候間、以

來練兵

天覽之節ハ、兵隊行軍之式ヲ以テ、

鳳輦之前後左右混テ供奉警衛致シ候様、御規則相立度、

是非トモ明後日

天覽被為在候ニ御座候ハ、即当日ヨリ右ノ御規則ニ

御改相成、右辺鄭御評議有之度、此段申上候也、

庚午九月十日

彈正台

七九三ノ二三

今日、於越中島練兵

天覽、依

御鳳輦御延引、三條右大臣殿へ御代覽被

仰付候間、此段申入候也、

庚午九月十一日

弁官

東京府

御中

七九三ノ二四

東京府御中

弁官

至急

行幸之儀は、御延引相成候得共、

御代覽被仰出候ニ付、右大臣殿初、参議・弁官・彈正

台致出張候ニ付、此旨為御心得申入候也、

九月十二日

七九三ノ二五

於越中島練兵

天覽御延引之処、右大臣殿御初メ

御代覽之儀、被 仰出候ニ付ては、御道筋御案内とし

て、当府役員御刻限迄ニ出頭可為仕哉、且又御道固メ等も差出可申哉、此段至急相伺申候也、

庚午九月十二日 東京府

弁官

御中

七九三ノ一六
御書面之趣承知候、今日練兵、右大臣殿 御代覽被

仰出候に付ては、諸事

行幸之通、御取計可有之、此段及御答候也、

九月十二日 弁官

東京府

御中

七九三ノ一七
今十二日、越中島練兵

天覽御達例ニ付、三條右大臣へ代

覽被 仰付候事、

庚午九月十二日 太政官

七九三ノ一八
庚午九月十二日、越中島ニ於テ

御沙汰

兵之隆否ハ、国家安危之関スル所、殊ニ方今宇内之形勢ニ付テハ、益以其術ヲ講究シ戮力勉勵干城之任ヲ可
尽旨、御沙汰候事、

庚午

九月

七九三ノ一九

兵部省

越中島練兵諸事行届候段、及

奏聞、御満足被

思食候、依之酒肴下賜候事、

庚午九月

太政官

七九三ノ二〇

拜啓仕候、過刻承知仕候通、川村江懸合候処、今十二
字頃より、越中島江差越候由ニ御座候、必ス明日御都
合見合之為と相察候、西郷も帰宿不仕候付、是も同様
帰次第二ハ差出し候様可仕候、抑今般調練

天覽奉願候趣意、四藩徴兵之内追々交代相成候付、不

時練兵之精粗

御覽相成候得ハ、一体兵隊之励ミ合ニ相成候事ハ不及

申、即今内外之形勢を以論シ候ても、約リ国之興廢は、

兵力ニ有之事勿論ニテ、只々急務は兵事ニ有之、殊ニ於御前親敷存慮御尋、無忌諱申上候様にと御一言ニても相降り候得ハ、一同感銘各死力を以、

朝廷之御為身を致さん事を思ひ候様可相成、今日名分を以少し有志之者ハ、

朝廷ニ尽ス事は当然と可相心得候得共、未一般ニは其通に参兼候場合有之二付、願くは、非常之恩を示され候て、兵気を鼓舞いたし候得は、藩ニ帰り候ても

天恩之難有を忘却不仕、其感動する処之淺深厚薄ニ依てハ、其藩ある事ヲわすれて、

朝廷之兵たらん事を願ひ候様之人心ニ可相向、又

朝廷よりも藩兵とよそに被思食候様有之候得は、必らず藩兵とのミ相心得、いつく迄も臭気を脱シ不申は必然ニ御座候、古今英雄之所為、恩を与へ、親を取るを主といたし、即今海外を以テ論し候ても、ヒスマロクなども只々兵事と会計とのミ大事に相勤候由、今般大勝利を得候も、兵氣を得候丈之事ニ可有之、誠ニ此にハ御注目なくんハあるへからず、畢竟

皇国之盛衰ニ大関係仕候事にて、兵部之願なと、思食被下候てハ、以之外ニ御座候、俗吏輩ニおひては、

御前ニ被召

御沙汰等被為在候てハ、余御輕易ニ過候ナト、論し候者も可有之候へ共、凡て取るに足さる事ニ可有之、此辺厚右府公と御示談可被成下候、尤乍恐

勅語ハ御片言にて、其余ハ右府公御伝へにて宜可有之、既に調練場ニ被為

臨候上ハ、戦場も同様ニ付、大隊長・司令官等被為食候て、

勅語相下り候事ハ、決て珍しからざる事ニ御座候、

一大久保一翁江御面会之事過刻粗申上候通、是も

御趣意感銘、御辞退も得不申上様に御仕向專要に奉存候、既に人物ヲ以被食候上ハ、人物之御会釈無之てハ不相濟、況乎即今大基礎不相立、人心紛紜之際ニ会するをや、古より明主之人を用る、千里を遠しとせずして親切ニ相求めし類不少、孝王ハヒスマロクと常に車ヲ同ふし、大事ある時は自ら迎に参候由、是等は国体も違ひ同日之論にハ無御座候得共、畢竟君職之重を任し候誠意之厚き処は同じ道理と相考申候、願くは閣下御駕を任せられ候て、懇々御旨趣を御示し旁ら、思食を以御弁論被下候ハ、実ニ意外ニ感動可仕ハ必

然と奉存候、今日迄之事ヲ以論し候得ハ甚異論も可有
之候得共、既に格別之

御趣意にて公平至当一彈丸ニなつて、前途之事を御成
業被為在と之御事ニ候へハ、右体之事は非常に出候様
に無御座候てハ決て御趣意相貫キ不申候、尚御熟考奉
仰候、

一兼て御沙汰承候、政府一層刻苦して其実を表し候辺、
何卒一日も速ニ御治定有御座度、尤愚存も有之候付、
屹と言上も可仕と奉存候、右辺大体御治定相付候上発
途可仕候、官祿五分一等之事も是非速ニ御決シならて
ハ相濟不申候、

一木戸横濱行にて小臣趣意談合之事急ニ相叶申まし、
兼て御暇願ひ差越居候得ハ、小臣私に呼返しも出来不
申候付、凡御決定廣澤江談合之上、一日懸横濱江參候
て篤と談可申上候と相考申候、尚御勘考奉願候、

右恐縮之至奉存候得共、川村一条申上候序に愚考之
次第荒増申上候、不悪御放量御取捨奉願候、謹言、

九月七日

利通

岩倉公閣下

〔日本史籍協会叢書大久保利通文書にて補正〕

七九三ノ二
三條實美公年譜

九月十二日、公 天皇ニ代リ、兵ヲ越中島ニ閲ス、

是日 天皇再ヒ越中島ニ 幸セントス、偶 聖体不
予ナルニ依リ、公ヲシテ代リ臨シム、午前九時、公
越中島ニ抵ル、文武百官多ク随行ス、午後五時ニ至
リ、演習終ヲ告ク、

○以下
略ス

七九三ノ三
大久保利通日記

十三日九
月

一徵兵練兵、於越中島 天覽可被為在筈之処御不例、條
公代覽被仰出、供奉ニテ九字ヨリ參、四藩練兵終日有
之、

七九三ノ三
岩倉公實記

十二日練兵親閱仰出サルト雖、聖体不予、實美ニ勅シテ
代リ往キ、之ヲ閲セシメ給フ、

(附注)

松平慶永八日還幸ノ御途中、頗ル危険ノ事アルト聞
キ、手書ヲ具視ニ寄セテ、将来ノ注意ヲ促ス、愛君ノ

情尤見ル可キナリ、其文ニ曰ク、

奉内啓候、逐日冷氣増進仕候処、閣下愈御安泰被為
涉、為天下奉敬賀候、扱昨日は於宮中一寸得拜顔、
大慶仕候、昨日參賀仕承知仕候得は、一昨日越中島
行幸、折悪敷大風猛雨、供奉之輩殊之外心痛之由ニ
テ、別て御還輦之節ハ、危殆之御儀、万年橋土州邸
前御通輦之後、纒六尺ヲ隔テ土州長屋潰れ、今少々
御通輦御遅ク候時ハ、如何之御危難可相成哉ト申事、
青木大典医ハ為之圧死候趣、清閑寺正三位ハ怪我致
候由、実ニ之ヲ承リ、喫驚寒心臣子之情恐懼所不堪
候、何卒此後ハ右様之天候ニハ、必御延引被仰出候
様奉至願候、昨夜モ土州長屋之潰れ、御通輦のおそ
ろしき事を存しつゝ、け、余り恐しさの為ニ終夜不眠、
其節愚考仕候処、先月二十九日晚より御神事、今月
九日晚より御潔斎、右御神事中ハ重軽服者僧尼參朝
モ憚り候様、被仰出モ有之、八日之行幸ハ御神事中
ニテ、乍恐御敬神之道ニ於て、如何被為在候者哉ト、
深奉恐入候、凶例ヲ申上候てハ恐入候得共、嘉永度
内裡炎上ハ、御神事中ト承り申候、別て道路ト申ス
モノハ、行幸之日ハ清潔ニ掃除ヲ致シ、不浄ノ事ハ

無之候得共、服者其外往来等之儀も難計候、今後ハ

御神事中ハ行幸之儀、不拘晴雨無之様仕度ト風ト存
付申候、決て大風雨杯ハ天之所令然ニテ、行幸之有
無ニハ関係無之候へ共、当今兎角行幸之節ニ、右様
大風雨有之、折柄御神事中ニモ候得ハ、人ノ口ニハ
戸カ立ラレ不申ト申ス氣味ニテ、なんてもなき事ヲ
彼是評論仕、遂ニハ乍恐御聖徳ニモ拘り可申欤ト、
臣子之情実残念ニ奉存候、呉々御神事等之節ハ、可
成丈御慎被為入行幸無之様奉願度、在廷之諸君子モ
被為在、疾ク御申上とハ奉存候得共、臣子之情実、
例之狂妄忍ふ能はざる衷情、僭越之罪難遁、伏て多
罪御海容奉希上候也、恐惶謹言、
庚午九月十日 慶永

岩倉公閣下

尚々毎々失礼之儀言上、恐懼之至奉存候、不外御
懇命被成下候事故申上候、御海容可被下候也、

七九四 大中小藩大属以下ノ官位相当ヲ定ム

九月十三日

朝廷ニ於テハ、大中小藩中ニ於ケル大属以下ノ官位相当ヲ定ム、

〔第五百八十九〕九月十三日(布)

〔通註〕「太政官第三百五十三ニ依リ消滅」
大中小藩共

大属 從七位

權大属 正八位

少属 從八位

權少属 正九位

史生 從九位

庁掌 同上

右相当之事、

但從來公用人役場之事務、正權大属ニテ可取扱事、

七九五 鮫島尚信へ歐羅巴派遣ヲ命ス

九月十三日

鮫島尚信誠藏へ、歐羅巴派遣ヲ命ス、

鹿兒島県士族

鮫島尚信

誠藏

○中略

同年明治三年八月五日

一 任外務大丞、

同年九月十三日

一 御用有之、歐羅巴洲へ被差遣候事、

○以下略ス

七九六 藩庁硫黄島・口永良部詰ノ檢事ヲ廢シ、

生産奉行ニ之ヲ管セシム

九月十四日

藩庁ニテハ、硫黄島・口永良部詰ノ檢事ヲ廢シ、生産奉行ヲシテ之ヲ管セシム、

一 硫黄島並口永良部島之儀ハ、是迄檢事ヨリ詰被仰付來候得共、右兩島之儀ハ、生産方計ヲ以硫黄取次相應之御産物ニモ相成候付、兼テ生産奉行ヨリ混ト不相勤候テハ、利害得失之訳モ有之候付、來春交代ヨリ檢事ハ御引取ニテ、兩島共生産奉行副役見習之間ヨリ、詰被仰付哉、於其儀ハ御産物之一種、其詮相立候様致度儀ト吟味仕候、以上、

明治三年九月十四日 會計局

右之通被仰付候条監察へ申渡、其外可承向へ可申渡候、
明治三年午九月 知政所

七七七 藩庁城下外城ニ至ルマテ、諸屋敷ノ檢地

取扱方ヲ令ス

九月十四日

藩庁城下外城ニ至ルマテ、諸屋敷ノ檢地取扱方ヲ令ス、

鹿兒島二十五ヶ村並御城下諸屋敷、当暮ヨリ大御

支配被仰渡候付、諸屋敷取扱之儀、左ニ申上候、

一是迄余人名前ヲ借、一屋敷之境等取除致支配候者モ可有之哉ニ相聞得、右様之者ハ御法違之事候付、御取揚

可被仰付候得共、全体手狭之所ヨリ、一冊ニ為相田筈、

今般大御支配ニ付テハ、別段之訳ヲ以ニ屋敷相田、一

反限ハ、此節ニ限り居屋敷ニ可被召附哉、余ハ相對讓

渡候様被仰付度候、

一居屋敷之儀ハ、是迄凡五畦以下ハ、御免無之事候得共、

間々五畦位之屋敷へ、内々ニテ兩人居住之者モ有之哉

ニ相聞得候付、二畦位迄ハ屋敷立賦ニ付、右様之屋敷

ハ此節ニ限り、二屋敷ニ御免被仰付度、二畦以下ハ不

屋敷立候付、合居住之向ヲ以被召置度候、

一居屋敷格別手狭ニ有之、添地等御免之人、御定之坪数

丈ハ、居屋敷ニ被召附度候、

一御城下並近在寺跡之儀学校又ハ軍局御用地等之外、地

面可有之候付、向々立会差支無之場所ハ、夫々士族屋

敷ニ申請被仰付度候、

一旧福昌寺門前地等、此以前所置相付居候場所、凡下体

之者ハ、其節ハ御定之通十ヶ年限、引移之儀ハ其通ニ

テ、此節新ニ士族屋敷相定候所へハ、凡下居住之者ハ、

御竿入ヨリ十ヶ年引移方被召延度候、

一士族屋敷之内、間々内々ニテ近所之者へ本物返等之約

束ニテ、切坪ニテ讓渡置候者モ可有之、右体之屋敷ハ、

当分四壁形ニ御竿相究候様被仰付度候、

但屋敷御竿入之儀ハ、年鑑久敷故、不格好之屋敷モ

可有之、右ハ見分之形行ヲ以、取直方可致候、

一諸座附御借地之内へ、内々ニテ諸人家来等致居住、名

目迄ニテ諸座附之者不能居屋敷ハ、御取揚被仰付度候、

一旧船手之儀、生産方一冊之地面ニテ、右之内へ水主之

者共御借地被仰付置候処、当分士族過分致借地、右地

面之儀、屋敷帳へ被載置候現屋敷之事候付、此節御檢地ニハ、士族借地之儀ハ、居住之俣御定之畦反通申受被仰付、水主之者共ハ、生産方御借地之名目ニテ、外々同様御借地被仰付度候、

但向船手之儀モ、同様取扱被仰付度候、

一上下町・西田町並浜浦屋敷之儀モ、夫々三畦位御免數被相究度候得共、依職業テハ一反内外モ無之候テハ、相濟間敷候付、此節ハ御竿召入、畦直リ迄被仰付度候、以來商売向盛ニ仕建、倉庫等作リ広メ度願候者ハ、時々吟味次第地面取添候儀ハ、不苦筋被究置度候、

一町屋敷之中へ、間々士族屋敷所持之者有之候付、依願ハ此節町屋敷ト被仰付度、且町屋敷引続等之士族屋敷へ下人等召置、店明御免之所モ有之候付、右様之屋敷ハ当分形被仰付度候、

但無免之店構ハ被召除度、以來願出候テモ致免許間敷候、

一現屋敷致所持、引続高地面一反以上相円居候人ハ、現屋敷之方、余人へ讓渡候様被仰渡候、

但家作ニ付差支候分ハ、現屋敷高地面之方へ繰替候

儀ハ、御免被仰付度候、

一過上屋敷所持之者、居家ニ差支候分ハ、十ヶ年ハ御免可被仰付旨被仰渡、此節大御支配ニ付テハ、御竿召入致屋敷割不置候テハ、名実ニ不相叶、勿論以後家作引直ノ節モ、混雜無之賦候間、其通被仰渡候、

一過上屋敷所持之者、分地別立ニテ致附屬、又ハ余人江屋敷売払付テハ、自然四壁等イタス筈候得共、此節御竿入ニハ差掛混雜之儀モ難計候間、經界分明四壁可取扱旨、尚又被仰渡候、

一近在五ヶ村御免借地、一反限り現屋敷ニ被召成、過上丈ハ余人へ讓渡候様被仰渡候付テハ、過上屋敷讓受度者ヨリ、当分借地主へ讓受度相對致内談、右之趣ヲ以、当局へ代銀上納申受之願書差出候ハ、御檢地之上畦反相究、当局ヨリ引付ヲ以、在番所へ相納候様被仰渡候、

右之通一統へ被仰渡、当閏十月中願出候ハ、時々差免帳面仕付等イタシ、十一月初方ヨリ屋敷致改方候ハ、来春ヨリ御檢地取掛、差支之廉有之間敷候、尤是迄之改様ニテハ、屋敷主居住之実否不相分候付、万一疑敷有之候節ハ、直ニ糺方之上、不正之屋敷ハ、屹ト御取揚被仰付度致吟味、此段申出候、以上、

明治三年午九月

民事局

鹿兒島中諸屋敷取扱向、別冊之通被 仰付候条、向々
へ可申渡候、

明治三年午九月十四日

知政所

一ヶ年交代卜相定メ、

但其節ハ往還旅費・食料共、御定メ通り被下、船
ニテ往還便利之藩ハ、船御雇遣し賃錢御払相成
度候事、

七九八 東京徴兵第四大隊鹿兒島ニ帰着ス

九月十七日

東京徴兵第四大隊鹿兒島ニ帰着ス、
七九八^一 寺師宗道日記

同月十八日 晴

出席候、東京兵隊去ル十四日金名川ヨリ乗舟ニテ、昨
夕前濱へ着舟、四番大隊也 (以下略也)

七九八^二
鹿兒島・山口・高知・佐賀四藩徴兵之儀、昨年出張後

各藩都合ヲ以、小内兵士交代為致居候処、元来斯ク御
徴相成居候上ハ、交代等之儀も御規則被

仰出、其節ハ往来之旅費文御下ケ渡ニ不相成テハ、各
藩頗ル困窮之情実も御座候ニ付、左之通御定メ相成度、

至急御治定可被下候、

右御決定相成候ハ、大蔵省江出金之儀、御達し置相
成度、此段申進候也、

庚午九月二日

兵部省

弁官

御中

(朱)
「別紙大蔵省見込之通ニ候事」

七九八^三
午九月

徴兵交代費用之儀、別紙之通兵部省ヨリ申出候、右ハ
至急之儀卜被存候間、御取調之上、尚御見込早々御申
立可有之、依テ別紙相副へ此段申入候也、

庚午九月三日

弁官

大蔵省

御中

追テ別紙御返却有之度候也、

七九八ノ四

過日四藩徵兵交代等云々申出候節、往環旅費・食料並
船御雇遣し之儀は、如何御座候哉、早々何分之御沙汰
御座候様仕度、此段御尋申進候也、

庚午九月十三日

兵部省

弁官

御中

七九八ノ五

鹿兒島・山口・高知・佐賀四藩徵兵交代之節、往還旅
費之儀、兵部省ヨリ伺出候ニ付、過日及御打合置候処、
未タ御答無之、尚又同省ヨリ別紙之通申出候間、至急
御取調御答可有之、此段申入候也、

庚午九月十三日

弁官

大蔵省

御中

七九八ノ六

徵兵交代之節、旅費被下方之儀ニ付、別紙御廻し見込
御問合ニ付取調候処、此程御布告之通、各藩おゐて軍
資米備置相成候上は、出京迄之旅費ハ、右之内ヲ以仕
払、帰藩之節は、兵部省定額三拾万石之内ヲ以取賄可
然、尤当十月已前帰藩之分は、別段御出方取計可申と

存候、此段及御答候也、

庚午十月四日

大蔵省

弁官

御中

猶々別紙兵部省書面御返却いたし候也、

七九八ノ七

徵兵交代之節、旅費被下方之儀ニ付、去月中御問合之
節、出京迄之旅費は各藩より仕払、帰藩之節は兵部省
定額三拾万石之内ヲ以取賄可然旨、尤十月以前之外は、
別段御出方之積及御答候処、薩長二藩は同月以前帰藩
之趣ニ付、右は別段御下渡之積、尤兵部省ニ於ては、
往返共旅費相渡候趣ニ付、同様御出方之積取計可申と
存候、右は先般御答之趣も有之候ニ付、尚兵部省打合
之上、此段申進也、

庚午十月十八日

大蔵省

弁官

御中

七九八ノ八

鹿兒島徵兵交代之儀願出候ニ付、聞届候処、猶又別紙
之通願立候得共、右ハ旧例モ御座候事故、為御濟被下、

外務省へモ御達御座候様仕度、此段奉伺候也、

庚午八月二十五日

兵部省

弁官

御中

部省より伺出、御聞届相成候間、此段御達申入候也、

庚午八月廿七日

七九九 諸藩ノ願伺等ハ自今藩名ヲ以テ之ヲ進致

セシム

七九八ノ九

当藩徴兵交代之儀、別紙を以奉窺候付、其通被仰付、

来月中旬頃御当府出立之筈御座候、就てハ横濱より外

国船相雇、鹿兒島迄為乗廻度候付、不開港場之儀ニは

候得共、此内も両度迄御免許相成例も御座候間、此節

之儀も同様被仰付被下度、此段奉願候、以上、

鹿兒島藩

公用人

庚午八月廿五日

田中清之進

兵部省

御役所

七九八ノ一〇

午八月二十七日

外務省

弁官

御中

鹿兒島藩徴兵交代ニ付、外国船雇入之儀、別紙之通兵

九月十七日

諸藩ヲシテ願伺等ハ、自今藩名ヲ以テ之ヲ進致セシム、

〔第五百九十九〕九月十七日(布) (太政官)

〔頭註〕四年太政官第三百五十三ヲ以テ廢藩
自今諸願伺等、一切藩名ヲ以可差出事、

但知事始官員身上ニ係り候儀ハ、非此例事、

八〇〇 藩制発令前正権大少参事在職・解官共、更

ニ稟候セシム

九月十九日

藩制発令前、正権大少参事及ヒ在職並解官共、更ニ之ヲ

稟候セシム、

〔第六百九〕九月十九日(太政官)

此度藩制被 仰出候ニ付テハ、是迄正権大少参事共、

宣下相成居候得共、猶御趣意ヲ奉シ精細取調、在職解官共更ニ可伺出事、

二被 仰出候事、

ハ〇一 庶人氏ヲ称スルヲ許ス

九月十九日

庶人氏ヲ称スルヲ許ス、

〔第六百八〕 九月十九日(布) (太政官)

〔頭註〕「八年第二十二号布告參看」
自今平民苗氏被差許候事、

ハ〇二 天長節百官及ヒ外国使臣ニ酺宴ヲ賜フ

九月廿二日

天長節、百官及ヒ外国使臣ニ酺宴ヲ賜フ、

〔第五百六十九〕 九月七日(布) (太政官)

〔頭註〕「六年太政官第二十五十八号ヲ以テ十一月三日ニ改ム」
九月廿二日 聖上御誕辰、毎歲此日ヲ以テ天長節トシ、

群臣ニ酺宴ヲ賜ヒ、天下ノ刑戮ヲ停メ、衆庶ト御慶福ヲ共ニ被為 遊度旨、一昨年御布告ニ相成候処、未タ末々迄御旨意貫徹不致向モ有之趣ニ付、府藩県共此旨篤ト奉体シ、衆庶一同 御慶辰ヲ奉祝候様可致旨、更

ハ〇二ノ二
〔第五百七十一〕 九月七日 (太政官)

天長節勅任官第八字拝賀、奏任官第十字宮内省へ參賀申上、判任官ハ各其長官へ可申上事、

但酺宴之儀ハ、奏任以下各官省ニ於テ被下候事、

ハ〇二ノ三
〔第五百七十一〕 九月七日

藩知事

天長節拝賀賜酺宴候事、

ハ〇二ノ四
〔第五百七十五〕 九月七日(弁官) 諸官省へ

〔頭註〕「第五百九十三・第六百一參看」
来廿二日、天長節ニ付諸官省

奏任官

御祝酒 重肴三重

判任官

御祝酒 重肴二重

右之通賜候間、其官省ニテ取扱人員・御入費取調、大藏省へ申出可請取事、

ハ〇二ノ五
〔第五百九十一〕 九月十三日 (兵部省) 諸艦へ

〔頭註〕四年兵部省第百八十六ヲ以テ改ム、第百五十一卷第一
天長節礼式之儀、別紙之通り御治定相成候ニ付、来ル

二十二日 天長辰艦々ニ於テ、執行可有之候、且海軍
旗章別冊之通り、是亦御治定相成候条廻申候、此旨
相達候也(旗章出来不致ニ付、
不差送ト原文ニアリ)

(別紙)

海軍礼式

祝砲 廿一発

一天長辰各所砲台、各隻軍艦、皆正午ニ此式ヲ行フ、

朝第八時ヨリ昏ニ至ル迄、大桅ニ国旗ヲ揚ケ、艦長

ハ慶賀ノ故ヲ艦内ニ布告ス、午前十一字ニ皆甲板上

ニ列シ、位ヲ正フシ、万才ヲ唱フ、楽手慶賀ノ楽ヲ

奏シ、十二字ニ祝砲ヲ発ス、

但楽手無キ艦ニテハ、鼓手慶賀ノ鼓ヲ奏ス、

八〇二ノ六
〔第五百九十三〕 九月十四日 (弁官)

来ル廿二日、 天長節ニ付、御祝酒被下方ノ儀、判任

官以上迄ハ過日相達置候ヘ共、等外ノ分ハ御祝酒重肴

一重肴、於其官省下賜候間、例之通大蔵省ヘ御申出御

取計可有之候也、

八〇二ノ七
〔第五百九十四〕 九月十四日 (民部省) 府県

奏任官

御祝酒 一合五勺

此代銀一匁六分

重肴 三重

此代銀十一匁

一人前

合銀十二匁六分

判任官

御祝酒 一合五勺

此代銀一匁六分

重肴 二重

此代銀八匁

一人前

合銀九匁六分

等外

御祝酒 一合五勺

此代銀一匁六分

重肴 一重

此代銀四匁

一人前

合銀五匁六分

右ハ 天長節ニ付賜候酒肴価積之通、過不足無之様可
取計旨、弁官ヨリ達ニ付相達候事、

八〇二ノ八
〔第五百九十七〕 九月十五日（兵部省）

来ル廿二日 主上御誕生日ニ付、例年之通御祝発申上
候様、夫々用意可有之候、尤外国船モ碇泊中ニ付、応
放等之儀ハ、外務省へ引合之上、又々可相達候事、

八〇二ノ九
〔第六百一〕 九月十七日（大藏省）

官省院台校へ

奏任官

重肴 三重

此代銀十一匁

酒 一合五勺

判任官

重肴 二重

此代銀八匁

酒 一合五勺

等外ノ者

重肴 一重

此代銀四匁

酒 一合五勺

右ハ来ル二十二日 天長節ニ付、御祝酒被下方入費、
書面之通御治定相成候間、其官省院台校ニテ、御取賄
人員書相添、入費御請取可有之候、此段及御達候也、

八〇二ノ一〇
〔第六百五〕 九月十八日（太政官）

〔頭註〕「五年太政官第二百七十六号ニ依リ消滅」
天長節重服者參 朝可憚事、

八〇二ノ一一
〔第六百七〕 九月八日（留守官）

来ル二十二日 天長節ニ付、勅任官於 禁中賜齋宴候、

奏任官ハ別紙之通、各其官省ヨリ大藏省へ申出可請取

候間、此段為心得申入候也、

（別紙）

奏任官

御祝酒 一合五勺

此代銀壹匁六分

重肴 三重

此代銀拾壹匁

明治3年(1870)

耆人前

合銀十二匁六分

判任官

御祝酒

一合五勺

此代銀壹匁六分

重肴 二重

此代銀八匁

耆人前

合銀九匁六分

等外

御祝酒

一合五勺

此代銀壹匁六分

重肴 一重

此代銀四匁

耆人前

合銀五匁六分

八〇二ノ二
〔第六百十一〕九月十九日(留守判官)

〔願註〕〔第六百十九〕ヲ以テ祝砲時刻ヲ改ム
来ル廿二日 天長節ニ付、先例ノ通同日曉六時於川東

練兵場、祝砲相發候段、兵部省出張所ヨリ申出候間、

此旨及通達候也、

八〇二ノ三
〔第六百十二〕九月二十日(留守官)

華族門跡尼室へ

来ル廿二日 天長節ニ付、辰刻ヨリ午刻迄ニ 禁中

大宮御所 中宮御所へ、 参賀可申上事、

但 中宮御所ハ 禁中ニ於テ可申上事、

八〇二ノ四
〔第六百十三〕九月二十日(神祇省回達) 諸省

来ル廿二日 天長節御祭典ニ付、神殿拜礼之儀、諸官

員、非職官・華族等、当日辰刻ヨリ申刻迄被差許候間、

此旨申達候也、

八〇二ノ五
〔第六百十四〕九月二十日(兵部省)

第三第四大隊 一通

第一遊軍隊 一通

第一二三砲隊 一通

第一二三四中隊 一通

来ル廿二日 天長辰ニ付テハ、山下御門内於練兵操練

所、祝砲執行可有之、此旨相達候事、

但本日第十一字、場所へ相揃可申、発砲之義ハ、当
省出張之官員ヨリ指揮可致事、

八〇二ノ一六
〔第六百十六〕 九月二十日（兵部省） 海軍操練所

来ル廿二日 天長節ニ付、其操練所出仕ヲ初旬読手伝
迄、一同朝第七字迄礼服着用参省慶賀可申上候也、
但本文相済候テ、御酒肴被下候事、

八〇二ノ一七
〔第六百十七〕 九月二十日（兵部省） 海軍操練所

来ル廿二日 天長節ニ付、部長ヲ初生徒一同へ、御酒
肴被下候条、明後廿二日十二字迄ニ、当省会計司へ受
取之者可差出候也、

追テ其操練所門番小使ニ至迄、悉ク御酒肴被下候間、
同様受取之者可差出候也、

八〇二ノ一八
〔第六百十八〕 九月二十日（兵部省） 千代田形艦 樺太船

飛隼丸 行速丸 船長中

来ル廿二日 天長節ニ付、艦長始メ水火夫ニ至ル迄、
御酒肴被下候間、会計司江請取人可差出候也、

八〇二ノ一九
〔第六百十九〕 九月二十日（留守判官）

来ル廿二日 天長節ニ付、於河東練兵場、祝砲相發候
刻限曉六ツ時ノ旨及通達置候処、都合ヲ以テ午刻ニ相
改候段、兵部省出張所申出候間、此旨更ニ及通達候也、

八〇二ノ二〇
〔第六百二十〕 九月二十一日（兵部省） 諸艦へ

明廿二日 天長節ニ付、祝砲之義相達置候処、右執行
一同江御酒肴別紙之通被下候間、宜可取計候也（別紙
略ス）
追テ甲鐵艦修復中ニ付、祝砲ハ無之候得共、乗組一
同江御酒肴被下候間、中島四郎殿ヨリ相達可申候也、

八〇三 宮・華族ヲシテ其家士三代相恩ノ者ヲ録

上セシム

九月廿三日

宮・華族ヲシテ、其家士三代相恩ノ者ヲ録上セシム、

〔第六百二十一〕 九月二十三日（太政官）

〔頭註〕〔第六百七十二參看〕
宮並華族之面々、家士三代相恩之者急速取調、当月中
可差出事（京都在住ノ向へハ、当月
中ヲ来月十日迄ニ作ル）

【参照】

第六百七十一 十月十五日 (布) (太政官)

〔頭註〕四年宮内省第二參看
宮並華族之面々、家士三代相恩之者取調可差出旨、先

般御達相成候処、猶又

一 其家々召抱候由緒並年月

一 召抱候初代ヨリ幾代

一 給祿幾程

右明細相認、來ル閏十月廿日迄ニ可差出候事、

八〇四 町田久成実名ヲ通称ニモ使用ヲ届出ツ

九月廿五日

大学大丞町田三郎、俗称ヲ止メ、実名久成ヲ通称ニモ使

用方ノ届、

私儀以来俗称相止、実名久成ヲ以、通称ニモ相用申候、

此段御届仕候也、

庚午九月廿五日

町田大学大丞

弁官

御中

八〇五 海軍資金上納方ヲ定ム

九月廿五日

海軍資金上納方ヲ定ム、

第六百七十五 九月二十五日 (布) (太政官)

〔頭註〕四年太政官第五百八十四ニ依リ消滅
海軍資金上納方之儀、年々十月中御蔵米平均値段ヲ以

テ、石代相場相立、大蔵省ヨリ相達可申間、其年十二

月、翌年三月、七月、都合三度ニ割合セ、上納可致候

事、

但当年年十二月ヨリ上納之事、

八〇六 従前ノ軍資金ヲ廢ス

九月廿五日

従前ノ軍資金ヲ廢ス、

第六百七十六 九月二十五日 (布) (太政官)

今般藩制被 仰出、海・陸軍費御定則被為立候ニ付、

従前軍資金ハ、当九月納ヲ限り被廢候事、

八〇七 藩庁軍務局塾移転ニヨリ軍務局前通り往

来止メヲ令ス

九月廿七日

藩庁軍務局塾ヲ旧加治木屋敷ニ移スニヨリ、軍務局前通り往来止メヲ令ス、

一軍務局塾、旧加治木屋敷江曳直方ニ付、明廿八日より来ル朔日迄、軍務局前通り往来止被仰渡度奉存、道路方掛申談、此段申上候、以上、

午九月廿七日

宮繕奉行

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年午九月

知政所

八〇八 府藩県管内開墾地規則ヲ定ム

九月廿七日

土地開墾稟准ノ制ヲ廢シ、開墾規則ヲ頒ツ、

〔第六百三十一〕九月二十七日(布) (太政官)

(頭註)「五年大蔵省第一号ヲ以テ取消」

府藩県管内開墾地之儀、是迄御布令ニ遵ヒ、都テ何出

指図相受候処、左候テハ時日相後レ、自然機会ヲ失ヒ、

開業難行届儀モ有之候間、向後別紙之通規則被相定候

条、右ニ照準シ取計可致事、

(別紙)

規則

一府藩県支配地之内、山林野沼及ヒ海岸附寄洲等之場所、自費ヲ以テ開墾致度段願出候節ハ、村内ハ勿論近傍村々故障之有無相糺、屹度有益無害ニ候ハ、反別五町歩ヲ限り、其管庁ニ於テ差許、歛下年季地代永等、至当之所分可致事、

但些少タリトモ、故障之次第有之ハ、利害得失ヲ

明弁シ、民部省へ相伺可否之決ヲ可請事、

一試作ハ地所之種類、反別之多少ニ不拘、全ク故障無

之節ハ、管庁限可聞届置事、

但御林・陣屋敷其他御用地ニ属スル場所ハ、試作

タリトモ、都テ絵図面相添、民部へ伺ノ上可取

計事、

一五町歩以上之開墾ハ、土地之種類ニ不拘、反別其他

故障之有無、利害之原由ヲ記載致シ、且絵図面ヲ

副、総テ民部省へ伺之上、諸般之施行可致事、

一府藩県入会之地、或ハ他之管轄ニ関係致シ候用水ヲ

分流シ、一管内ト雖トモ、田畑ヲ潰シテ溝渠ヲ疏シ、

又ハ従前之養水・溜池等ヲ埋、堤防ヲ毀、或ハ川中附寄洲等、水利ニ関涉致候地ヲ開墾願出候節ハ、地之広狭ニ不拘、土地之模様、故障之有無尤精密ニ取調、絵図面相添民部省へ相伺、指図ニ依テ可取計事、一高入之儀ハ反別之多少ニ不拘、土地之品位ヲ検査致シ、至当之免附取調、民部省へ可伺出事、

但一区百町歩以上ノ土地、並管轄入り交候場所ヲ

檢候節ハ、民部省役員之立会可請事、

一官費ヲ以テ開墾致シ候節ハ、五町歩以下ト雖トモ、故障之有無、利害得失ハ不及申、經費之數ヲ精算シ、土地之品類、反別等明細ニ書記シ、絵図面相添、民部省へ伺出、許可之上功ヲ可起事、

〔頭註〕四年民部省第七參看
一管庁ニ於テ差許候開墾地ハ、反別其他缺下等之取極

振、並絵図面ヲ詳明ニシ、且又伺之上免許之分ハ、只反別而已相記、毎年十二月限り民部省へ可届出事、右之通確守可致候事、

八〇九 藩庁士族持高増減毎二届出方ヲ令ス

九月廿八日

藩庁士族持高増減毎二届出方ヲ令ス、外城モ亦之ニ準ス、一御当地士族持高多少ニテ、俸禄之被下方ニ相拘候付、

高直願出候節、五拾石以上又は五拾石以下出入有之節は、高直之差出江、其身は勿論、二男・三男・末子迄も、何御奉公相勤候訳書載願出、左候て高直御免之上は、右書付米穀掛出納奉行より、会計局江差出候様被仰付置度候間、時々無手拔様可取計旨被仰渡度事、

但何秋より所務米可相受取取も可書載候、尤諸郷之儀も、二拾五石以上以下出入之節は、同断之事、

九月

会計局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年九月廿八日

知政所

八一〇 諸藩ノ常備兵額ヲ定ム

九月廿八日

諸藩ノ常備兵額ヲ定メ、現石一萬石ニ兵員六十人(士官ヲ除ク)トス、

〔第六百三十五〕九月二十八日(布)(太政官)

〔頭註〕第九百五十七參看
今般藩制被仰出候ニ付テハ、現米壹萬石ニ付、士官

ヲ除ク之外、兵員六拾人ヲ以テ、先ツ常備ト被相定候事、

八一 藩庁谷山宮締人外三締人ヲ廃止ス

九月廿九日

藩庁谷山宮締人外三締人ヲ廃止ス、

一 谷山宮締人

一 川見締人

一 川尻砂揚場取締人

一 鹿倉見締人

右吟味之訳有之被廢候条、可承向江可申渡候、

明治三年午九月廿九日

知政所

八二 米三十万石及ヒ諸藩所納ノ海軍資金ヲ以テ、

テ海軍費ニ充ツ

九月廿九日

米三十万石及ヒ諸藩所納ノ海軍資金ヲ以テ、海軍費ニ充ツ、

〔領事〕四年太政官第四百九十六ニ依リ消滅
〔第六百三十八〕 九月二十九日（沙） 兵部省

現米三十万石並諸藩上納ノ海軍資金、年々其省へ御渡可相成候間、海陸軍諸般之用度ニ可充候、尤戰爭費用之外、臨時諸費ハ不被渡候、此旨相達候事、

八三 銀台二分金十二月十五日ヲ限り引替シム

九月廿九日

銀台二分金引替残アルモノ、十二月十五日ヲ限り、之ヲ引替セシム、

〔第六百四十〕 九月二十九日（大藏省）

銀台二分金之儀、昨巳年限り百兩ニ付三十兩ニテ、御引替可相成旨達置候後、猶早々差出候様、当三月中相達置候処、今以引替残有之哉ニ付、追々差出際限無之候間、来ル十二月十五日限り、従前ノ通引替、右期限後ハ引替不相成候条、管内不洩様告示可致、此旨相達候事、

八四 藩庁士族ノ御免借地ノ年貢上納ヲ当分通

リトス

明治3年(1870)

九月晦日

藩庁ニテハ、鹿兒島近村ニ士族ノ御免借地ハ、檢地ニ付屋敷トナスヘキコトヲ聽許シタルモ、總檢地済了迄ハ、当分通り年貢上納方ヲ令ス、

一鹿兒島近在五ヶ村之内江、士族御免借地之儀、總御檢地ニ付ては、屋敷成御免被仰付旨被 仰渡置候得共、
兎角總御檢地相濟迄之間、当分形御年貢上納無異儀いたし候様被 仰渡度、於其儀は借地人之内も、御日限内上納難遂向も有之候間、御日限不差掛内、夫々村長方江屹と皆納いたし候様、被 仰渡度、此段申出候、以上、

明治三年九月晦日

民事局

右之通被 仰付候条、向々江可申渡候、

九月

知政所

八二五 諸藩参事在京判任黜陟ノ開申及石高称呼

ノ方ヲ定ム

九月晦日

諸藩ニ令シ、明年正月ヨリ正權大参事之内一人宛ヲ京ニ

駐メシメ、判任職員ノ黜陟ハ、毎月之ヲ届ケ出テシメ、又元治甲子ヨリ明治戊辰ノ歳ニ至ル五箇年平均物成ヲ以テ、石高ヲ称セシム、

〔第六百四十二〕九月晦日(布)(太政官)

〔頭書〕一四年太政官第三百五十三依リ消滅
今般藩制被 仰出候ニ付、

一正權大参事之内、一人ツ、在京之儀、来年未正月ヨリ出張可致事、

一判任之職員黜陟共、毎月可届出事、

一石高之儀、甲子ノ年ヨリ戊辰之年迄、五ヶ年平均均之

物成ヲ以テ可称事、

右之通更ニ相達候事、

八二六 藩庁楽長並楽隊小頭長ヲ置ク

是月(九月)

藩庁ニ於テハ、楽長並楽隊小頭長ヲ置ク、

一楽長

右七等官標官次

一楽隊小頭長

右八等官步兵小頭長次

右之通、官等被召建候旨被 仰達候条、向々江可申渡候、

明治三年午九月

知政所

八一七 藩庁黒田彦左衛門ヲ以テ三俣外二郷ノ地

頭ト為ス

是月(九月)

藩庁黒田彦左衛門ヲ以テ、三俣外二郷ノ地頭ト為ス、

一上三俣・山之口・下荘内地頭

黒田彦左衛門

右之通被仰付、上三俣江可罷在旨、被 仰付候条、向

々江可申渡候、

明治三年午九月

知政所

八一八 藩庁梶山・勝岡ヲ合セ上荘内地頭ニ、高原

高崎ヲ合セ小林地頭ニ夫々管轄ヲ移ス

是月(九月)

藩庁梶山・勝岡ヲ合郷シ、其管轄ヲ上荘内地頭ニ、高原・

高崎ヲ合郷シ、其管轄ヲ小林地頭ニ移ス、

一梶山・勝岡合郷

右上荘内地頭管轄

一高原・高崎合郷

右小林地頭管轄

右は合郷被仰付段は別段申渡通ニテ、右之通管轄被相替候条可申渡候、

明治三年庚午九月

知政所

八一九 藩庁借地払方心得ノ事項ヲ令ス

是月(九月)

藩庁借地払方心得ノ事項ヲ令ス、

一此節惣檢地付近在五ヶ村御免借地、並塩屋村相对借地江致居住候士族、並兵器方附士之儀は、現屋敷被仰付、御定之畦反通五百目余地は無屋舗之者江、壹畦壹貫目直成を以、申受被仰付候旨被仰渡候処、間ニは現屋敷同様差心得、余地相对を以致附属候向モ有之哉ニ相聞得、心得違之事ニ候、依て被定置候外余地有之、借地在在中江差返候儀、相当之事情得共、自然望之者於有之は、双方熟談致シ候上、申受之願申出候は、御卒入

明治3年(1870)

之上は夫々申請被仰付候条、心得違之儀共無之様被仰
渡度吟味いたし候、以上、

午九月

民事局

右之通被仰渡候条、向々江可申渡候、

九月

知政所

〔稿本表紙〕

明治三年
十月 忠義公史料稿本(初稿)十

〔稿本にて補正〕

八二〇 常備兵員ヲ定メ、海軍ハ英國式、陸軍ハ佛
國式ヲ採ル

十月二日

常備兵員ヲ定メ、海軍ハ英國式、陸軍ハ佛國式ヲ採ル、
因テ諸藩ヲシテ、陸軍ノ編制ヲ更革セシム、

〔第六回十九〕十月二日(布) (太政官)

〔頭註〕第七百五十六、第九百五十七參看
兵制ノ儀ハ、皇國一般之法式可被為立候得共、今般
常備兵員被定候ニ付テハ、海軍ハ英吉利式、陸軍ハ佛

蘭西式ヲ斟酌御編成相成候条、先ツ藩々ニ於テ、陸軍
ハ佛蘭西式ヲ目的トシ、漸ヲ以テ編制相改候様被
仰付候事、

【参照】

〔第七百五十六〕閏十月二十日(布) (太政官) 諸藩

〔頭註〕第七百八十七參看
陸軍ハ、佛蘭西式ヲ斟酌御編制相成候旨、先般被

仰出候ニ付テハ、陸軍生徒、大中小藩高二応シ、左之
割合ヲ以テ、來ル十二月十五日ヨリ二十五日迄ニ、大
阪兵学寮へ可差出候事、

大藩 九人

但現石拾五万石以上

中藩 六人

但現石五万石以上

小藩 三人

但現石壹万石以上

現石壹万石未満之藩生徒差出方之儀ハ、追テ

御沙汰可有之事、

一生徒人選之儀ハ、兼テ御布令之兵学令ニ可相基事、
一入学手順並費用等之儀ハ、兵部省へ可相回事、
一四月來兵部省之達ニテ、生徒差出居候藩、藩高相当

之分ハ是迄通り、不足之分ハ更ニ増員、過分之分ハ其俾入学被差許候事、

【参照】

第九百五十七 十二月二十二日(布) (太政官)

(頭註) 四年兵部省第七十三ヲ以テ改ム
各藩常備兵ノ儀ハ、總テ大隊ヲ以テ編制可致、大隊未

滿ノ藩ハ、中隊・小隊ヲ以テ可編制事、

但歩兵三中隊以上ノ藩ハ、大隊長並副官ヲ置キ不苦

事、

兵隊官員上等士官ノ儀、尔来左之通、

大隊長

右

少佐ト改称ス、

右撰挙之法、追テ御規則被相定候得共、從來ノ分並当

分ノ内、於其藩撰挙、藩庁ヨリ伺出 奏聞ノ上、被

仰付候事、

中隊長

右大尉ト改称ス、

副官

小隊長

右

中尉ト改称ス、

半隊長

右

少尉ト改称ス、

以上上等士官

右撰挙ノ御規則ハ、追テ被相定候得共、当分從來之通

藩庁ニテ撰挙致シ可届出事、

曹長

権曹長

軍曹

以上下等士官

伍長

右四職ハ少佐ニテ撰挙、藩庁へ可届出事、

但下等士官進退黜陟ノ儀ハ、藩庁取束置、毎年二月

八月兵部省へ可届出事、

一砲兵ノ儀ハ、一隊六門ヲ以テ編制可致、最モ歩兵二

大隊ニ付、一砲隊相備可申事、

但歩兵二大隊以下ハ、砲兵ノ備否便宜ニ可任事、

隊長

右

大尉ト改称ス、

副官

分隊長

右

中少尉ト改称ス、

以上上等士官

右撰拳之御規則ハ、迫テ被相定候得共、当分從來之通

藩庁ニテ撰拳致シ可届出事、

曹長

權曹長

軍曹

以上下等士官

伍長

右四職ハ少佐ヨリ撰拳、藩庁ヘ可届出事、

一万石以上之藩々ニテ、常備歩兵・砲兵トモ編隊致シ、

石高端分有之向ハ、予備兵ヲ制候欵、或ハ兵員ヲ廢

シ候トモ可任便宜、最モ其旨兵部省ヘ可届置事、

一月給之儀ハ、先ツ藩々之適宜ニ可任事、

一軍服之儀ハ、製法並紐釦及ヒ帽前面之徽章共、別紙

御定之通可相用事、

一帽子・軍服地織質之儀ハ、可為別紙之通、最モ俄ニ

改製ニ不及、尔後新製之分漸ヲ以テ改メ可申事、

但士官・兵卒服地合區別有之候得共、即今之処可

任適宜事、

右之通ニ候条、此旨相達候事、

(別紙ハ略ス)

八二一 海軍旗・皇族旗・大中小旗等ノ徽章ヲ定ム

十月三日

海軍御旗・皇族旗・大中小旗等ノ徽章ヲ定ム、

〔第六百五十一〕 十月三日 (布) (太政官)

海軍御旗章・國旗章並諸旗章、別冊之通ニ候条、各省

府藩県ニ於テ、紛敷印相用申間敷、地方管内外国形運

送船ニハ、後桅縦帆船ノ端ニ國旗ヲ掲ケ、中桅ニ其省

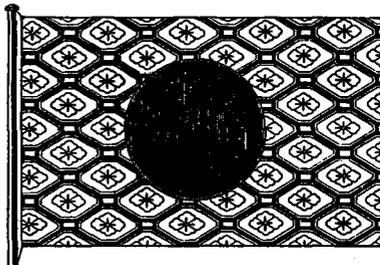
府藩県ノ符号旗ヲ掲クヘキ事、

(別冊)

明治3年(1870)

御旗

裏面銀月



一御旗 錦布金日銀月章 (白_キ所_ハ赤_キ)

縦七尺八寸・横一丈一尺七寸

風下余幅

五寸八分

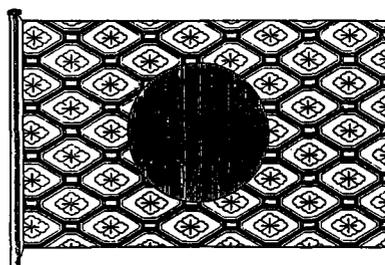
但シ縦径ハ横径ノ三分ノ二、

又横径ノ二十分一ヲ風下ノ

縁ニ加フ、

日月ノ径ハ縦径ノ五分三ト定ム、

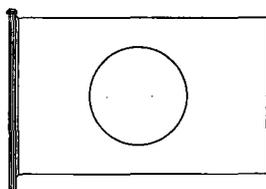
皇族旗



一皇族旗 青地錦布紅日章 (白_キ所_ハ青_キ)

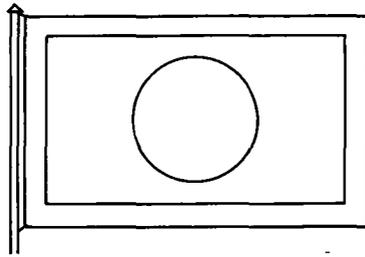
縦横右ニ同シ、

御国旗

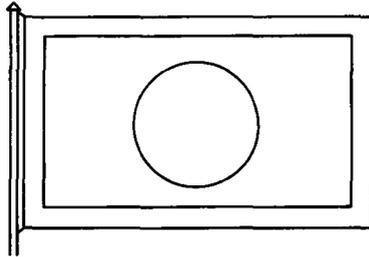


一御国旗 白布紅日章

縦横右ニ同シ、



大將旗



中將旗

風雨ノ日及ヒ小艦ニ在テハ、小ナル者ヲ用ユ、縦横ノ比例ハ定法ニ從フヘシ、

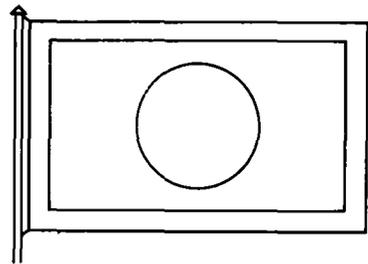
一 船首旗章 国旗ニ同シ、

縦六尺・横八尺

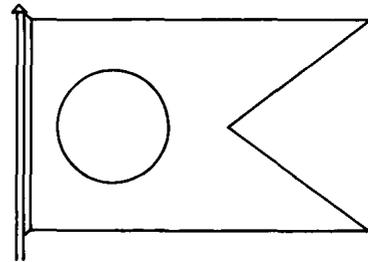
小艦ニ在テハ小ナル者ヲ用ユ、

但シ信号ニハ定尺ノ者ヲ用ユ、

少將旗



代將旗



一 大將旗 中

縦六尺・横九尺 風下余幅四寸五分

一 中將旗 前

縦横右ニ同シ

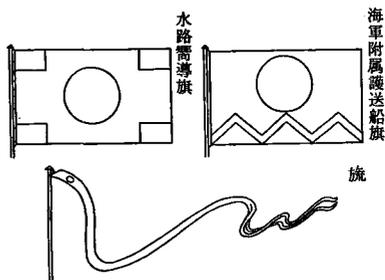
一 少將旗 後

縦横右ニ同シ、

一 代將旗 中

縦横右ニ同シ、

但シ三角形凹截三分ノ一



一 旗中 白布紅日

大長サ 八間上幅四寸

中長サ 五間半上幅三寸六分

小長サ 三間半上幅三寸

凹截 全長二分一

一 海軍付屬護送船旗 白布紅日

紺山形縦六尺・横八尺

但シ艦隊ニ屬スル時ハ旗ヲ揚ク、

一 水路嚮導旗 白布紺隅紅日章

縦横右ニ同シ、

一 各省府藩臬船中其省府藩臬ノ符号

縦横右ニ同シ、

八二三 海軍学寮創立ニ付、府藩臬ノ海軍志願者

ノ姓名等ヲ録上セシム

十月三日

海軍学寮創立ニ付、府藩臬ニ達シテ、海軍志願者ノ姓名等ヲ録上セシム、

〔第六百五十三〕 十月三日 (兵部省)

別紙相達候条、藩々へ早々廻達可有之候事、

(別紙)

海軍之儀、大ニ御興張之御趣意ニ付、今般海軍学寮御創立、普ク生徒御教育相成儀ニ候条、是迄海軍ヲ志シ學術修行及其筋勤務致シ候者、姓名・年令・生国・住所・何学何科・何ヶ年修行之訳委敷相記シ、在府者当月廿日限、在藩臬者無遅延至急可申出候事、

八二三 藩庁神道ノ講義ヲ開キ一般ニ聴聞セシム

十月七日

藩庁ニ於テハ、敬神ノ念ヲ普及センカ為メ、神道ノ講義ヲ開キ、城下町内一般ニ聴聞方ヲ令セシム、

一此節御城下町内ニおゐて、神道講義被 仰付、町役共

敬神之 御趣意を奉汲受、一統致聴聞候様可取計旨、

民事局江申渡、向々江可申渡事、

但

致聴聞度面々は、誰人ニても不苦候、

明治三年十月七日

知政所

八二四 安藤則命ヲ東京府大属ト為ス

十月七日

安藤則命十郎ヲ以テ、東京府大属ト為ス、

鹿兒島県士族

安藤則命

十郎

文政十一年戊子三月生

○中略

同年明治三年十月七日

一任大属、

東京府

以下略ス

八二五 藩庁横山安武ヲ靖献靈社ニ合祀ス

十月八日

藩庁横山安武正太郎ノ祭祀ヲ行ヒ、尋テ靖献靈社ニ合祀ス

ルコトヲ遺族ニ令ス、

横山元千代

右ハ、明九日靖献靈社ニライテ、亡親横山正太郎忠魂

祭祀被 仰付候間、四ツ時ヨリ相詰候様可申達候、

十月八日

知政所

祭文

臆能横山大人乃御前尔告申久汝命能 鷄鳴吾孀尔物学尔

在志時尔今

皇朝乃公卿斗 侍留 藤原朝臣等能 茂梓乃 中取奏比志 御政

能状波 徳川將軍我 行来之旧弊尔毛 増奴部支 不善政事能

美 許多有天下能 復乱 奈事 貴志 歎比 思留 任其条々 貴

婆 委曲尔 論比

朝廷尔 奏状 献乍 意尔 御身 貴屠天命亡座 渡志 大倭魂能 凝成

礼留 伊曾志 支雄々 志支 武士能 態尔 為天 万世能 龜鑑斗 毛

尊美 仰志 功勲在斗 藩主尔 毛 深久 感賞 給尔 奈毛 汝命

貴本乃 官尔 治給比 其御靈 貴靖献神社尔 配祭比 家内乃 妻

子良尔 許多能 物賜奴 是以汝命能 為尔 無窮尔 諫以天往 卒

御名 貴 大倭魂 茂真盾 雄命斗 御名 貴 称天 神床 貴 春秋能 永

世尔御祀仕奉^半所乎移奉^久相宇豆奈^比給^比御心和尔
 鎮座斗奉留案代能幣帛美尔聞食天今毛往前毛横山能家
 内尔波天地能不祥非時能災害不令有子孫能弥次々武士能
 道日月昇留如久繁昌^天妻子親族等荒玉能年緒長久^天広支
 厚支御惠^衰分授給斗齋主太田春國鷄自物頸突拔^天白須

又

藩知事源朝臣能命^衰以天横山安武大人能靈尔白給^久斗
 白須吾大人乃鷄鳴吾孀能都尔物学尔在時

今上皇帝能御世乃始尔公卿等能朝廷乃政^衰一尔己我欲
 支任議奏^比志状被風乃音能遠皇祖乃御世田神随尔定免

留御法尔違留能美不可却志且德川能醜臣我天下尔号令

世志態尔毛不及奴五十狭小汀乃細介支事能美盛尔成往
 天皇国乃正支風^衰花勝見都天毛不知異国能氣吹尔惑痴

多留所為尔志有介礼婆其事^衰窃仁^憂比思天諫奉礼留人
 等毛雖有採用^比給布事毛無介礼婆吾大人婆本余利慨美

憤留心衷^衰不顯白天婆不堪斗思興世留仕尔

朝廷能政乃不善条々浅茅原委曲尔漏限無久論^比奏状上
 乍意尔身乎屠天命^志座^志被大日本魂凝成留伊曾志支雄

々志支大丈夫能態尔為天万世乃龜鑑斗母尊美仰久部支
 大功在良志斗嘉美思座我故尔大人乃忠魂^衰聊慰給^半斗

家内能妻子多知^衰波惠美治給^比其官^衰毛旧官尔復^天奈
 毛靖獻神社尔配祭給^半斗祭主白尾國和尔料^天今日能生
 日乃足尔御社^衰天地乃共遠久長久齋奉年所斗移奉久
 衰相宇豆乃比御心和尔鎮座斗薦生留礼代乃幣帛^衰旨酒
 能美尔聞食^天広支厚支御德能任尔天皇朝廷能奇御
 魂幸御魂斗為座^天九重能内外毛安久穩尔護惠美給^比諸
 卿等母己我得^方自支幸^衰望求^米此尔託彼^半横乃謀美構
 留事無久曲傾留心乎齋正食^国乃大直日神直^思尔直往^部
 支太平御世登成福給斗白給斗白須

【参照】

横山正太郎安武ハ、旧鹿兒島藩士森有恕の四子にして、
 前文部大臣森有禮公の兄、母は隈崎氏なり、天保十四
 年正月元日誕生し、出て横山安容の後を継ぐ、其人と
 なり忠実にして、博く人を愛し、親に事へて愛敬を尽
 し、君に事ふるにハ、顔を犯して人の言ふこと能ハさ
 るを言ふ、故に藩主の側に在る十余年、上旨下に貫き、
 下情上ニ達し、内外間隔の憂へなかりしハ、安武の功
 居多なり、曾て英艦鹿兒島港ニ来り、戦を開き、数百
 の人家兵火に罹りしに、安武の家も其中に在りたり、
 其節藩主より戸毎に救助金を賜ハリたるに、独り安武

ハ多年の勤勞あるに因りて、特に恩賜ありたり、安武其賜金を数多に包ミ分け、夜中窃かに貧苦の家に投入れて去りければ、其金を受けたる者共ハ、不思議や神の冥助なりとて、皆々躍り悦びたりと、又近侍たりし時、専ら公子を輔導し、以爲く深宮に成長し給ハ、恐らくハ下情に疎からんとて、切に遊學を勧め、身常に随行するなど、屢々至誠に発したる所爲あり、庚午の春故ありて職を辞し、五月京師に遊學し、偶瘧疾に嬰り、六月に至て僅かに癒へけれハ、遽に東行せんとしけるを、友人等宜しく養生し、秋涼を待ちて行くへしと留めけれとも、安武更に聞かすして曰く、兄等の深恩に頼りて今日有るを得たり、深く肝に銘したる上、強ち貴意に背くにあらねとも、此度ハ我に自ら誓ふことあり、若し徒らに牖下に死するあらハ、何を以て君父の恩に報せんやと、涙を拭ひて別を告げ、遂に大坂より海路東京ニ入けり、而して田口某の門に就學せしハ、七月二十日なり、当時百官事を誤る者多けれハ、安武慨歎謂へらく、王家衰頽の機今日に兆せり、苟も臣子たる者、身を致し力を尽し匡救せざるへけんやと、筆を執て一扁の諫疏を作り、これを封書となし、竹に

挿み集議院の門扉に立て置き、退て津藩邸裏門に至て層腹せり、時に年僅かに二十八、実に明治三年七月廿六日の夜なり、翌廿七日の曉、門番の者其容貌を認取り、急に馳せて薩藩邸に至り実を告ぐ、邸吏直ちに赴き扶け帰りたるに、氣息未だ絶ずして、書を集議院に奉りたりと云ふ、其語僅かに通したれハ、早々其由を集議院に伺ひけるに、封書ハ既に政府に上りたりと、依て其言を安武に申聞け、れハ、安武苦中に在りながら、欣然の色を作して瞑目せり、此事忽ち都下に聞へ、知るも知らざるも感賞せざるなし、扱安武の柩ハ即日芝伊血子大圓寺に葬れり、其後友人相謀りて石を建て、忠績を刻し、又彈正台にハ其誠心を賞し、其所爲を旌せんことを建言せり、朝廷深く其憂國の衷情を愍み給ひ、祭資料若干を賜ふ、又藩主島津公ハ数々賞賜の末、靖獻靈社に配祭せり、嗚呼安武の忠誠氣節、是に於て万世に伝えて朽すざる可し、右ハ忠諫の始末追思の余、之を略記して同感諸子の一覽に供ふノミ、

明治廿二年十一月

西巷居士焚香録

八二六 永山盛輝ヲ伊那県大參事ト為ス

十月九日

永山盛輝正藏ヲ以テ、伊那県大参事ト為ス、

鹿兒島県士族

永山盛輝

正藏
文政九年丙戌八月生

○中略

同明治三年七月二十九日

一任伊那県少参事、

大蔵省

同年十月九日

一任伊那県大参事、

○以下略ス

八二七 諸藩歳出入表及編制例則・分類略解ヲ頒

ツ

十月九日

諸藩歳出入表及編制例則・分類略解ヲ頒チ、毎年十二月

大蔵省ニ録上セシム、

第六百五十九 十月九日(布) (太政官) 諸藩へ

〔頭註〕四年太政官第三百五十三依り消滅
歳入歳出表別冊二御渡相成候条、夫々書記シ、来末年

ヨリ年々十二月中、大蔵省へ差出可申事、

(別冊ハ略ス)

八二八 卒族ヲ卒ト单称セシム

十月九日

卒ノ称呼ニ卒族ト記スルヲ改メ、唯单ニ卒ト称セシム、

第六百六十 十月九日

〔頭註〕五年太政官第二百九号ニ依り消滅
卒之称呼 諸伺届等之内卒族ト相認差出候向モ有之処、

右ハ藩制御達書之通、自今卒ト单称可致候、此段為心

得相達置候事、

八二九 諸藩庁並藩邸・飛地出張所等門・玄関紋ノ

幕・挑灯ヲ使用セシム

十月十日

諸藩庁並藩邸・飛地出張所等、門・玄関御紋ノ幕・挑灯

ヲ用キシム、

第六百六十三 十月十日(布) (太政官)

〔頭註〕四年太政官第三百五十三依り消滅
諸藩庁並藩邸・飛地出張所等、門・玄関自今御紋之幕・

挑灯相用可申事、

庚午十一月十二日

彈正台

弁官

御中

八三〇 彈正少弼黒田清綱帰省願ヲ提出ス

十月十二日

彈正少弼黒田清綱納帰省願ヲ提出ス、

私儀、御暇日数往復三十日下賜、帰省仕、既ニ其期限

相及、速ニ上京可仕之處、老母病氣有之、今暫時添着

病仕度候間、重畳恐入奉存候へ共、今三十日御暇日数

重ト被成下度奉願候、此旨御執奏有之度候也、

庚午十月十二日

黒田彈正少弼

弁官

御中

附紙

願之趣被 聞食届候事、

庚午十一月十四日帰京候旨、弁官へ届有之、

【参照】

黒田少弼事、願之上改帰省候処、本月三日大坂表へ着、

其後御用柄ニ付、暫ク同断へ滞在之趣申越候、此段御

届申候也、

八三一 諸藩知事朝集ノ順序ヲ定ム

十月十三日

諸藩知事朝集ノ順序ヲ定メ、四季毎ニ更番三箇年、合セ

テ十二番ニシテ一周ス、

〔第六百六十五〕十月十三日（布）（太政官）

〔頭註〕四年太政官第三百五十三依り消滅

諸藩 朝集、別紙之通被相定候条、簡易輕便ヲ旨トシ、

供連始精々減省総テ冗費無之様可致事、

（別紙）

諸藩 朝集ノ順次、四季コトニ更番三ヶ年、合テ十二

番ニシテ一周ス、其順番譬ハ未ノ春ニ当リ候分ハ、午

ノ冬ニ参着、未ノ春三ヶ月在京、夏ニ至テ帰藩スヘシ、

以下皆同例ナリ、若一季中閏月アラハ、四ヶ月在京タ

ルヘキ事、

未春戌丑辰年同
和歌山紀伊一久留米筑後一小濱 若狭一佐倉 下総

明治3年(1870)

未冬戌丑辰年同

岩村田信濃	伊勢崎上野	上山羽前	人吉肥後	宮津丹後	山口周防
曾我野上総	小野播磨	岩槻武蔵	西條伊予	高鍋日向	久保田羽後
下妻常陸	結城下総	八戸陸奥	廣瀬出雲	上田信濃	富山越中
	椎谷越後	刈谷參河	水口近江	村松越後	中津豊前

未秋戌丑辰年同

三池筑後	伯太和泉	飯田信濃	大聖寺加賀	明石播磨	熊本肥後
多古下総	清崎越後	黒石陸奥	佐土原日向	高崎上野	津伊勢
	矢島羽後	高梁備中	長尾安房	村上越後	米澤羽前
	谷田部常陸	多度津讃岐	加納美濃	龜岡丹波	福山備後

未夏戌丑辰年同

堀江遠江	石岡常陸	壬生下野	岡崎參河	豊浦長門
六浦武蔵	泉磐城	福江肥前	吉田伊予	膳所近江
	野村美濃	大多喜上総	龜田羽後	杵築豊後
	成羽備中	峰山丹後	高取大和	龍野播磨

松岡常陸

吉見近江	日出豊後	菊間上総	松本信濃	高知土佐
黒羽下野	赤穂播磨	福知山丹波	館渡島	福井越前
峰岡越後	鴨方備中	出石但馬	高槻摂津	大泉羽前
生實下総	長岡越後	一關陸中	龜山伊勢	島原肥前

申夏亥寅巳年同

館山安房	佐野下野	長島伊勢	笠間常陸	中村磐城	佐賀肥前
小見下総	麻田摂津	清末長門	園部丹波	鶴舞上総	岡山備前
	母里出雲	西大路近江	佐伯豊後	今治伊予	郡山大和
中	荻野山相摸	林田播磨	安中上野	豊橋參河	大垣美濃

申春亥寅巳年同

吹上下野	半原參河	岡田備中	沼田上野	丸龜讃岐	静岡駿河
高岡下総	今尾美濃	大溝近江	丸岡越前	三春磐城	姫路播磨
	新谷伊予	綾部丹波	府内豊後	土浦常陸	平戸肥前
	櫛羅大和	丹南河内	飯野上総	久居伊勢	前橋上野

申秋亥寅巳年同

三章 播磨

牛久 常陸

大田原下野

金澤 加賀

柳河 筑後

仙臺 陸前

津山 美作

延岡 日向

西尾 参河

大洲 伊予

小城 肥前

高島 信濃

〔朝日山力〕 近江

本莊 羽後

久留里上総

岩崎 羽後

足守 備中

與板 越後

勝山 越前

柳生 大和

福本 播磨

苗木 美濃

千束 豊前

山家 丹波

志筑 常陸

七戸 陸奥

櫻井 上総

湯長谷磐城

斗南 陸奥

西端 参河

申冬亥寅巳年同

西秋子卯午年同

徳島 阿波

松江 出雲

豊津 豊前

忍 武蔵

鹿兒島薩摩

弘前 陸奥

高田 越後

松代 信濃

岡 豊後

大村 肥前

桑名 伊勢

宇都宮下野

岸和田和泉

小田原相模

舞鶴 丹波

唐津 肥前

田邊 紀伊

鯖江 越前

岩村 美濃

鶴田 美作

郡上 美濃

鳥羽 志摩

庭瀬 備中

三日月播磨

小諸 信濃

鶴牧 上総

磐城平磐城

田原 参河

下館 常陸

天童 羽前

守山 磐城

龍岡 信濃

安志 播磨

加知山安房

小久保上総

田原本大和

黒川 越後

佐貫 上総

宮川 近江

小幡 上野

七日市上野

穴戸 常陸

生坂 備中

村岡 但馬

大網 上総

足利 下野

宇和島伊予

酉春子卯午年同

酉冬子卯午年同

名古屋尾張

鳥取 因幡

高松 讃岐

館林 上野

廣島 安芸

彦根 近江

水戸 常陸

宇和島伊予

臼杵 豊後

徳山 周防

古河 下総

秋月 筑前

篠山 丹波

既肥 日向

津和野石見

尼崎 摂津

新宮 紀伊

三田 摂津

柴山 上総

飯山 信濃

蓮池 肥前

大野 越前

犬山 尾張

二本松岩代

鹿島 肥前

柏原 丹波

棚倉 磐城

高須 美濃

花房 安房

重原 参河

鳥山 下野

柳本 大和

譽母 参河

新見 備中

菺野 伊勢

山上 近江

重原 参河

鳥山 下野

柳本 大和

明治3年(1870)

森 豊後 小泉 和泉 一宮 上総 小松 伊予
淺尾 備中 高富 美濃

八三二 藩庁屋久島在番ノ職制ヲ廃止ス

十月十四日

藩庁屋久島在番ノ職制ヲ廃止ス、

一屋久嶋在番之儀、二等在番より相勤候筋、職制被載置

候得共、生産奉行より相詰来候付、右之職制被相除候

一条諸島掛生産奉行江申渡、可承向江も可申渡候、

明治三年午十月十四日

知政所

八三三 宮・華族家士三代相恩者ニ查点条件ヲ定

ム

十月十五日

宮・華族家士三代相恩ノ者ニ対シ、查点条件ヲ定メ、之

ヲ録上セシム、

〔第六百七十〕十月十五日(布) (太政官)

〔頭註〕四年宮内省第二參看

宮並華族之面々、家士三代相恩之者取調可差出旨、先

般御達相成候処、猶又

一其家々々召抱候由緒並年月、

一召抱候初代ヨリ幾代、

一給禄何程、

右明細書相認、来ル閏十月廿日迄ニ可差出候事、

八三四 華族隱居剃髮ノ輩ヲシテ復飾セシム

十月十五日

華族隱居剃髮ノ輩ヲシテ復飾セシム、

〔第六百七十二〕十月十五日(布) (太政官) 諸藩

華族隱居剃髮之輩、自今復飾候様被 仰付候事、

八三五 職員記名ノ界紙並書式ヲ諸藩ニ交付ス

十月十七日

職員記名ノ界紙並書式ヲ諸藩ニ交付シ、年々十二月ヲ以

テ、之ヲ録上セシム、

〔第六百八十〕十月十七日(布) 諸藩

〔頭註〕四年太政官第三百五十三依り消滅

職員姓名書入之界紙御渡相成候条、夫々定式之通相認、

年々十二月十五日迄ニ可差出事、

式		書	
大	正權大參事	知事	苗字通称実名○若シ有位ナレハ位並 苗字加フ、以下皆同シ
中	權知事	苗字位戸実名	
小	藩	干支月	
		何藩高	藩邸

八三六 外国公使旅行ノ節取扱方ヲ定ム

十月十七日

外国公使旅行ノ節取扱方ヲ定メ、之ヲ府藩県ニ令ス、

〔第六百八十一〕十月十七日(沙) (太政官)

〔頭註〕「七年内務省甲第十二号布達、八年同乙第五百五十九号達參看」
外国公使旅行之節、心得方別紙之通候条、此旨相達候

事、

(別紙)

府藩県

外国公使旅行之節、城下又ハ陣屋許へ休泊致候ハ、
官員一人平服ニテ旅館へ相越シ、知事之口上ヲ以尋問

可致事、

但公使ニ無之候ハ、不及其儀候事、

旅館へ幕・台・提燈・盛砂等、総テ馳走ケ間敷儀ニ不
及候事、

外国官人通行之節、其宿駅ニ於テ、問屋役人之内出迎
案内可致、地方官庁ヨリ送迎之役員等不及差出候事、
外国人通行之節、往來見物イタシ候儀ハ不苦候エトモ、
彼方ニテハ高官ノ者モ手輕ニ旅行イタシ、且彼我之礼
義モカハリ候儀ニ付、在々ノ人民ニ於テハ、殊更外国
人之情態ヲモ熟知セサルユエ、不作法等之儀有之候テ
ハ不相濟儀ニ付、地方官ニテ屹度取締可致事、

外国人へ対シ、万一不礼イタシ候モノ有之歟、或ハ不
都合之儀有之節ハ、取締出張之官員又ハ宿駅役人トモ
附添、官員へ申談嚴重始末相付ケ、其段書取ヲ以テ、
外務省又ハ開港場最寄ニ候ハ、其開港場へ可届出事、
旅籠料並人足賃錢トモ、相對ヲ以仕払候筈ニ候条、外
務省又ハ開港場之具庁ヨリ之先触面通り相心得、夫々
不都合無之様取計可申、尤休泊之場所ハ、宿駅役人共
取締筋精々心付、夜中ハ別テ入念見廻リ可申事、
外国人旅行先ニ於テ、土産物等買入候儀ハ不苦候得共、

万一密商ケ間敷事柄有之候ハ、見聞次第御国人之儀
ハ、其庁ニ於テ始末柄相糺シ、外務省又ハ最寄開港場
ヘ可相届候事、

但外国人之儀ハ、外務省並最寄開港場ニ於テ取糺可
致事、

八三七 藩庁有馬新助ヲ鹿屋・始良・大始良・高隈

ノ地頭ト為ス

十月十七日

藩庁ニ於テハ、有馬新助ヲ以テ、鹿屋・始良・大始良・
高隈ノ地頭ト為ス、

一鹿屋・始良・大始良・高隈地頭

有馬新助

右之通被 仰付候条、向々ヘ可申渡候、

明治三年午十月十七日

知政所

(義岡氏藩達留にて補正)

八三八 諸御門警衛ヲシテ宮・華族家人・職員中ノ

執事ヲ家令ト改称セシム

十月十八日

諸御門警衛ヲシテ、宮・華族ノ職員中ニ於ケル執事ヲ、
家令ト改称ノコトヲ知会セシム、

〔第六百八十七〕十月十八日(兵部省)

(編註) 一印鑑改正ニ依リ消滅

西九千御門以下十三御門
坂下御門

警衛中

宮・華族家人・職員、先般御定ニ相成候ニ付テハ、御
城門印鑑、是迄称号何家執事ト相認候処、今度家令ト
相改メ候旨、弁官ヨリ申来候ニ付、為心得相達置候条、
得其意早々順達可有之候也、

八三九 酒井忠篤来麿ニ付其接待方ヲ令ス

十月十九日

大泉藩知事酒井忠篤^{徳之助}ノ隠居同忠篤来麿ニ付、其接待

方心得ヲ令ス、

一大泉藩御隠居様、近々御当地江御越之筈候付、御手当

左之通、

一客屋江御滞在付、内外差引糧餉役受持、

但御成御門並本門幕張立、砂飾桶いたし、門番所江

足輕昼夜不明様可相詰候、

一 津畑より客屋迄、御行列先江足輕兩人相立、御通路筋

取締可相勤候、尤御帰之節も同断、

一 御着船之節、書記出役御案内等可相勤候、

一 御滞在中上下共、賄方並夜具手当等之儀、諸財掛出納

奉行受持にて、都て町計、

但御着船之節御酒肴等被差出、且平日賄方之儀、兼

て上等之御使者饗応定式之通にて、応人数可致手

当候、

右外略す、

右之通被仰付候条、可承向々江可申渡候、

明治三年十月十九日

知政所

【参照】

(記) 本日、前大泉藩主旧庄内酒井蓬堂篤、家人・兵員ヲ

率ヒ来到アリ、時ニ信州上田藩主松平鏞三郎和忠モ、途

ヨリ相連レテ来到アリタリ、藩庁之ヲ優待セリ、時ニ

酒井家ノ随員ハ左之通、

家令 加藤源五右衛門

家扶 加藤右平

全 加賀山完兵衛

家從 淺香彦右衛門

全 黒谷謙次郎

全 伊藤吉太郎

全 宮坂一覺

全 宮田求馬

全 遠藤三千太

全 加藤元彌

外ニ銃隊修行トシテ、

大泉藩士 五十人

松嶺藩士末家 二十人

八四〇 河島醇へ東伏見宮英国留学ノ随從ヲ命ス

十月二十日

東伏見宮英国勤学ニ付、河島醇新之丞へ随從ヲ命セラル、

御沙汰書

鹿兒島藩 河島新之丞

東伏見宮英国勤学被 仰付候ニ付、随從申付候事、

【参照一】

第七百十九 閏十月五日

東伏見宮

〔頭註〕「五年十月二十六日歸朝」
今般英國留學被 仰付候ニ付テハ、総テ書生之心得ヲ
以勤學致シ、弁務使之指揮可相受旨 御沙汰候事、

【参照二】

〔第七百一十〕 閏十月五日（沙） 外務省

東伏見宮留學中ハ、總テ尋常書生ヲ以テ取扱候様、本
國政府並在留ミニストルへ、屹度掛合可致置事、

八四一 地方官朝賀規則ヲ定ム

十月二十二日

地方官朝賀規則ヲ定ム、

〔第六百九十〕 十月二十二日（布）（太政官）

〔頭註〕「五年太政官第三百四十七号ヲ以テ改ム」
地方官 朝賀規則

元旦

天長節

右両辰勅任ハ一員一紙、奏任ハ一紙連署ニテ賀表ヲ上
ルヘシ、判任ハ長官相受、一紙ニ認メ言上可致候事、

但奏任以上在京之輩ハ、参 朝拜賀、其他出張之官

員ハ、本文之振合ヲ以テ、其庁へ可差出事、

八四二 元旦及天長節兩辰士族ノ拜賀ハ、府藩県
長官ヲシテ之ヲ受ケシム

十月廿二日

元旦及天長節兩辰士族ノ拜賀ハ、府藩県長官ヲシテ之ヲ
受ケシム、

〔第六百九十〕 十月二十二日（布）（太政官）

〔頭註〕「制度変更ニ依リ消滅」
元旦 天長節兩辰府藩県實屬士族之拜賀、其長官ニテ

相受可申事、

但不及言上候事、

八四三 藩庁定時用封ノ煩多ニ過クルヲ以テ之ヲ

戒メ制限セシム

十月二十二日

藩庁定時用封ノ煩多ニ過クルヲ以テ、之ヲ戒メ制限セシ
ム、

一時付御用封之儀、格別至急之事ニ限り差出候様、従前

被仰渡置候処、此比諸所駅々時付御用封、過分ニ次越

候段相聞得、右は昼夜に相掛、百姓共別て致難洪候儀

二付、格別重立急速御用之外、尔後屹と不差出様、諸
向江御布告相成度致吟味、此段申上候、以上、

午十月十九日

民事局

右申出之通被仰付候条、以来時付御用封継来候節は、

諸郷は其宛所之郷役、御当地は其局々又は当人より時
々御用筋之次第、民事局江届申出候様向々江申渡、諸
郷江も不洩様可申渡旨、地頭江可申渡候、

明治三年午十月廿二日

知政所

八四四 藩庁織物所ヲ蚕織方ト改称ス

十月廿二日

藩庁織物所ヲ、蚕織方ト改称ス、

一蚕織方

右は是迄織物所と唱来候得共、以来右之通名目被相替
候条、掛製造奉行江申渡、可承向へも可申渡候、

明治三年午十月廿二日

知政所

八四五 林清康ヲ兵部少丞ト為シ従六位ニ叙ス

十月廿二日

林清康三ヲ以テ、兵部少丞ト為シ、同日従六位ニ叙ス、

大阪府士族元鹿兒島

林源清康

天保十四癸卯年正月生

謙三

○中略

庚午年十月廿二日

一任兵部少丞、

同日

一叙従六位、

○以下略ス

八四六 押小路三丸英国勤学ニ付、西直八郎へ隨

從ヲ命ス

十月廿三日

押小路三丸英国勤学ニ付、西直八郎へ隨從ヲ命ス、

御沙汰書

鹿兒島藩 西 直八郎

押小路三丸英国勤学被 仰付候ニ付、隨從申付候事、

八四七 神祇官ヲシテ大小神社順序定額並祭典式

神官職制等ヲ查点セシム

十月廿五日

神祇官ヲシテ、大小神社順序定額並祭典式・神官職制等
ヲ查点セシム、

〔第七回〕 十月二十五日（沙） 神祇官

一 官社以下、大小神社順序定額之事、

一 祭政一致之意ニ基キ、祭典式府藩具一定之事、

一 神官職制並叙位之事、

右永世之規則更ニ取調候様、被 仰出候事、

八四八 元中大夫席菊池次郎家来小河小藤太へ、

留守史生ヲ命セララル

十月廿五日

元中大夫席菊池次郎家来小河小藤太へ、留守史生ヲ命セ
ラル、

其藩管轄元中大夫席菊池次郎家来小河小藤太儀、留守
史生申付候間、此旨菊池次郎へ通達可有之候也、

庚午十月廿五日

鹿兒島藩知事殿

留守判官

八四九 藩庁国鈔引換及ヒ其取扱順序ヲ令ス

十月廿七日

藩庁国鈔引換及ヒ其取扱順序ヲ令ス、

一 錢拾貫文札

但柿色宝船之模様、

一 銀百目札

但白紙模様同断、

一同五拾目札

但書同断、

一同拾匁札

但書同断、

一 錢壹貫文札

但柿色宝船之模様、

右は去々卯年、右通通融被差出置候処、相古ヒ文字分
兼候様成立、此節改札被仰渡、別紙致正札御出来相成
候付、此涯拾貫文より銀五拾目札迄、引替被仰付、左

候て銀拾匁札より銭壹貫文札迄は、右濟寄候上引替被仰付度、一緒六品共引替候ては、混雜罷成候間、仕向左之通、

一御当地三町之儀は、此以前之振合通、町役計を以嚴重引替方被仰付度、於其儀は每町在札之大數を賦、国鈔方江申出、右ニ応致正札相渡、町役方ニテ出入差引帳取仕立、引替濟之上、旧札相添差出候様、左候ハ、国鈔方枚數勘定、真偽鑑定之上、過不足相究、右之内贖札又は不足等有之候ハ、早速上納被仰付度、就ては町役共引請、無遲滞致上納候様被仰付度候、

一諸御藏々納合並諸役場取扱之紙札は、奉行頭人又は掛之役場より枚數等相改、封印之上問合相付、国鈔方江差廻候ハ、尚眞贋等改方之上引替相渡、其内贖札過不足等有之候ハ、双方引合之上、混雜無之様可取計旨可被仰渡哉、

一御城下並諸郷々共、引替方として差出候旧札之裏ニ、銘々所持之名前を記シ、札枚數端書相添差出候様被仰渡置度候、

但島々共同断、

一贖札相見得候ハ、堅ニ半分裂裁候て、其当人江相渡

候様可被仰渡哉、

一引替期限之儀、御当地当十一月中引替被仰付度、屋久島・種子島其外端島之儀は、便船次第国鈔方江差出、引替候様可被仰付哉、

但長島・甕島之儀は、諸郷同前十一月中、

一引替方之儀、休日外毎日朝五ツ時より七ツ時迄之内、国鈔方へ差出候様可被仰付哉、

右之通取扱ニテ、来月朔日より引替可被仰付哉、於其儀は、右限月相過差出候者は、格別誤合無之候ハ、屹と引替不被仰付旨可被仰渡哉、左候て壹貫文ニ付、四文ツ、掛錢之儀、此以前振合通被仰付度事、

十月 會計局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年十月廿七日 知政所

八五〇 諸官員・宮・華族以下京都府下人民抱入方

ヲ定ム

十月廿八日

諸官員・宮・華族以下、京都府下人民抱入方ヲ定ム、

〔第七百三〕十月二十八日（留守官）

〔頭註〕〔第九百五十九ニ依リ消滅〕
諸官員・宮・華族以下、京都府下人民家来ニ召抱候節、

差支有無前以同府へ可伺出、暇差遣候節ハ、其趣並何
某へ引渡候段、同府へ可届出事、

但年季・半季抱共、帶刀ノ者ハ同様可相心得事、

八五一 兵部省管轄兵隊復籍後府藩県ニ任用ノト

キハ、兵部省ニ稟候セシム

十月廿九日

兵部省管轄兵隊復籍ノ後、府藩県ニ於テ軍事ニ任用スル
トキハ、兵部省ニ稟候セシム、

〔第七百四〕十月二十九日（布）（太政官）

〔頭註〕〔四年兵部省第百四十九參看〕
兵部省管轄兵隊之者除隊復籍之後、府藩県ニ於テ軍事

ニ召使候節ハ、一忖兵部省へ可伺出候、此旨相達候事、

八五二 藩県各管内石炭等産出ノ地名並産額ヲ録

上セシム

是月（十月）

藩県各管内石炭・鉛・硫黄等、産出ノ地名並産額ヲ録上
セシム、

〔第七百十〕十月（民部省）

〔頭註〕〔四年太政官第百六十一參看〕
各縣管内石炭産出之場所並ニ凡一ヶ年出高取調、見本

相添当省へ可差出、産出無之候ハ、其段可申立事、

附鉛・硫黄・薬石之類産出之場所モ、同様可申立、

且先般相達候金・銀・銅・鉛山取調書、今以不差出
向モ有之、不都合之事ニ候、是又早々可申立事、

八五三 藩庁敬神説略ヲ刊行シ一般ニ頒売ス

是月（十月）

藩庁ニテハ、神道興隆ノ為メ、敬神説略ノ刊行ヲ為シ、
其頒売方ヲ一般ニ知ラシム、

一敬神説略全部一冊

右は、今般仏法被廢神道御興隆之折柄ニ付、庶民神祇
崇敬之理を明解し、教化益被行候様ニと之、御趣意を
以、右之書刊行候て、藏版方より申受被仰付候付、望
之者貴賤之無差別同所江申出候ハ、申受被仰付候條、
向々江可申渡候事、

右申出通被仰渡候段、向々江可申渡候、

午十月

知政所

(奉)

一敬神説略ハ、明治三年二月鹿兒島藩学頭助知国学
關盛長ノ撰ニ係ル

八五四 諸郷藏々貢米收納ニ関シ、繩俵等粗製方

ヲ戒飭セシム

是月(十月)

諸郷御藏々貢米收納ニ関シ、繩俵等粗製方ヲ戒飭セシム、
一諸郷御藏々貢米取納振ニ付ては、追々被

仰達置候処、依場所は米拵は勿論、繩俵別て麩末成品
津廻相成、取納之節致取扱候村長等、態々御呼付相成、
引替方等被仰付候場所も有之候付、当年之処は、決し
て夫等之儀は無之筈候得共、旧来之郷々且新郷之儀は、
自然不心得之向も難計候間、猶又取納之節米拵等行届
候様、諸郷々江被仰渡置度事、

明治三年午十月二日

會計局

右申出之通、諸事行届候様可申渡旨地頭江申渡、可承
向江も可申渡候、

十月

知政所

八五五 天長節定マリ之ヲ藩内ニ達ス

是月(十月)

九月廿二日、此日聖上御誕辰天長節ト定ム、仍テ一昨年
御布告アリタルモ、其旨意ヲ貫徹セサルモノアルニ付、
申ネテ之ヲ令セラレタルニ依リ、藩庁更ニ之ヲ藩内一般
ニ達ス、

一九月廿二日

聖上御誕辰、毎歳此日ヲ以テ 天長節トシ、群臣酺宴
ヲ賜ヒ、天下之刑戮ヲ停メ、衆庶

御慶福ヲ共被遊度旨、一昨年御布告ニ相成候処、未末
々迄 御旨意貫徹不致向モ有之趣ニテ、府藩県共此旨
篤ト奉体シ、衆庶一同

御慶辰ヲ奉祝候様可致旨、更ニ被 仰出候事、

庚午九月七日

太政官

別紙之通、於東京被仰渡候段申来候条、向々江可申渡
候、

明治三年午十月

知政所

八五六 藩庁自今諸願ノ稟請ニハ藩名ヲ用キルコ

トヲ令ス

医学学校兼病院

一 藥局取締

右同

一 器械取締

右式行等級是迄之通ニテ、順席之儀此節右之通被相改

候、

右同

一 生徒取締助兼塾長助

但

第五等処方掛頭

右同

一 藥局定詰四人

右同

一 器械預助四人

右式行、此節新ニ第五等ニ被召立候、

右同

一 史生式人

右等外ニ被召立、俸祿之儀は、是迄之通被成下候、

右之通此節被相定候條、調役江申渡、可承向江も可申

渡候、

是月(十月)

藩庁自今諸願ノ稟請等ニハ、総テ藩名ヲ用キルヲ令セラ
レタルニ依リ、更ニ藩内ニ之ヲ知ラシム、
一自今諸願同等、一切藩名ヲ以テ可差出事、

但

知事始官員身上ニ係リ候儀ハ、非此例事、

午九月十七日

太政官

別紙之通、於東京被仰渡候段申来候條、諸局江可申渡

候、

明治三年午十月

知政所

八五七 藩庁医学学校兼病院職員ノ等級ヲ定メ、新

ニ職員ヲ置ク

是月(十月)

藩庁医学学校兼病院内ニ於ケル職員ノ等級ヲ定メ、重ネテ
新ニ職員ヲ置ク、

明治3年(1870)

明治三年午十月

知政所

明治三年午十月

知政所

八五八 藩庁医学校並病院生徒取締及ヒ授読等ノ

規則ヲ定ム

是月(十月)

藩庁医学校並病院内ニ於ケル生徒取締、及ヒ授読等ノ規則ヲ定メ、尔今之ニ準拠セシム、
一 生徒取締助

右大凡翻訳書之文義訓詁致通達、且薬局諸器械之事業取馴候者江可被仰付候、

一等

一 授読

右翻訳書之講読致通達候者江、可被仰付候、

右は、医学校並病院翻訳書生進級之規則、此節右之通被相定候条、以来は右之職掌堪任之者ニ無之候ては、

処方薬局機械之職は不被仰付候、併是迄五等・六等之職ニ罷在候分は、御寛宥を以其俣被召置候条、往々勉強いたし、今一年を経、学業之精疎試験之上、等級黜陟可被仰付候条調役江申渡、可承向江も可申渡候、

〔稿本表紙〕

明治三年
閏十月 忠義公史料稿本(初稿)十一

〔稿本にて補正〕

英・佛・字三ヶ国へ被差遣候ニ付テハ、其国ニ交際ノ
事務及留学生等、管轄委任被 仰付候事、

〔太政官印〕

明治 三年 庚午閏十月

塩田権大記

鮫島少弁務使ニ差添、英・佛・字三ヶ国へ被差遣候ニ付
テハ、書記・翻訳等之事務取扱被 仰付候事、

〔太政官印〕

明治 三年 庚午閏十月

後藤権少記

八五九 鮫島尚信ヲ少弁務使ト為シ、英・佛・字へ

差遣ス

閏十月二日

鮫島尚信殿ヲ以テ少弁務使ト為シ、英吉利・佛蘭西・獨

逸北部連邦へ差遣セララル、
八五九ノ一

閏十月二日

御委任状写

鮫島少弁務使

鮫島少弁務使ニ差添、英・佛・字三ヶ国へ遣候ニ付テ

ハ、記録・会計等取扱申付候事、

〔太政官印〕

明治 三年 庚午閏十月

右三人へノ御委任状、御改正ニ付再録、

八五九ノ二

鹿兒島県士族

鮫島尚信

誠藏

○中略

同年明治閏十月二日

一 任少弁務使、

同日

一 英吉利・佛蘭西・獨逸北部連邦へ被差遣候ニ付テハ、

其国ニ交際ノ事務及留学生等、管轄委任被仰付候事、

同月五日

一 英国ニ於テ、各国公使在留諸用度向取調被仰付候事、

同月

一 佛国在勤被仰付候事、

○以下略ス

八五九ノ三

略

閏十月

二日、外務省ニ大中少弁務使・正権大少記大弁務使從三位
中弁務使正四位

少弁務使從四位、大記從五位、權大權大ヲ置キ、外務大丞鮫島尚信ヲ

記正六位少記正七位權少記從七位

以テ、少弁務使ト為シ、英・佛・李三国ニ差遣シ、佛

国ニ駐劄セシム○以下略

八六〇 鮫島武之助ノ自費佛国遊学ヲ聴ス

閏十月二日

鮫島武之助ノ自費佛国遊学ヲ聴ス、

鹿兒島藩士

鮫島武之助

自費ヲ以佛国遊学

右藩士願之通聞届相成候、為心得此段申入候也、

庚午閏十月二日

弁官

外務省

御中

八六一 外務省中大中少弁務使・正権大少記ヲ置

ク

閏十月二日

外務省中、大中少弁務使・正権大少記ヲ置ク、

〔第七百一十二〕閏十月二日（布）（太政官）

〔頭註〕四年太政官第四百ヲ以テ改訂

今般外務省中、大中少弁務使・正権大少記被置候事、

大弁務使

相当 從三位

中弁務使 同 正四位
 少弁務使 同 從四位
 大記 同 從五位
 權大記 同 正六位
 少記 同 正七位
 權少記 同 從七位

八六二 知藩事臨時出京ノ節ハ予メ稟候セシム

閏十月二日

知藩事臨時出京ノ節ハ、予メ稟候セシム、

〔第七百十一〕 閏十月二日 (布) (太政官)

〔頭註〕「四年太政官第三百五十三依り消滅」
 先般朝集割被 仰出候ニ付テハ、向後知藩事臨時出京

可致、事故有之節ハ前以可伺出事、

但近傍府藩県へ打合セ等ニテ罷越候節モ、本文同様

可伺出事、

八六三 旧垂水・宮之城屋敷ヲ練兵場トナス

閏十月二日

藩庁ニ於テハ、旧垂水・宮之城屋敷ヲ取払ヒ、茲ニ練兵

場ヲ新置ス、因テ練兵場通行人ヲシテ戒飭セシム、

一此節大砲局並旧垂水・宮之城屋敷迄取払、練兵場被召
 建候付ては、調練中通行人致遠慮、調練妨不相成様道
 脇可致往来、左候て川尻之節も、往来等一切妨不相成
 様是又被仰渡、万一取違之者有之候ハ、屹と可及迷
 惑旨、諸士末々ニ至迄、夫々支配向々又は地頭へも不
 洩様被仰渡置度候事、

午閏十月

軍務局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年閏十月二日

知政所

【参照】

道島正亮日記閏十月十六日

一御殿下調練場、御木屋ノ場・垂水・宮ノ城ヤシキ取毀
 チ、惣テ練兵場ニ相成候事、

庚午閏十月十六日方土場開、調練相始リ候事、

八六四 朝廷ニ於テ賞秩渡方ヲ定ム

閏十月三日

朝廷ニ於テ賞秩渡方ヲ定ム、

〔第七百十六〕 閏十月三日 (太政官)

〔頭註〕「五年大藏第十四号參看」

賞秩之儀、当年年分ヨリ半高十二月、半高来七月御渡

可相成段、先般相達置候処、昨年諸国不登御收納格別

相減、加之諸般御用途差湊、御收納之目途モ未相立事

ニ付、当年御渡可相成半高之分ハ、当十二月・来三月

兩度ニ割合御渡相成候条、此旨相達候事、

但昨巳年御渡殘並来七月渡之分ハ、最前相達候通ニ

候事、

八六五 森有禮ヲ少弁務使ト為シ米国駐劄ヲ命ス

閏十月三日

森有禮金之丞ヲ以テ少弁務使ト為シ、同日從五位ニ叙シ、

米国ニ駐劄セシム、
八六五ノ一

鹿兒島県士族

森 有禮

〔金之丞〕

弘化四年丁未八月生

○中略

同治三年庚午閏十月五日三方

一任少弁務使、

同日

一叙從五位、

同日

一米国在勤被仰付候事、

同日

一米利堅国へ被差遣候ニ付、交際事務及留學生管轄委任

被仰付候事、

○以下略ス

八六五ノ二

略○上

閏十月

○中略

三日、森有禮ヲ以テ少弁務使ト為シ、米国ニ駐劄セシ

ム以下略ス

八六六 松方正義ノ日田県知事ヲ罷メ民部大丞ト

為ス

閏十月三日

松方正義一ノ日田県知事ヲ罷メ、尋テ民部大丞ト為ス、

八六六ノ一

鹿児島県士族

松方正義

一郎

天保六年乙未二月生

○中略

同明治三庚午閏十月三日

一任民部大丞、

○以下略ス

八六六ノ二

略日田県知事松方正義ヲ罷ム民部大丞ニ転ス

○以下略ス

八六七 藩庁現米壹石ヲ以高壹石ト為ス

閏十月三日

藩庁ニテハ、粃九斗六升ヲ以テ高壹石詰トナシ来リタルモ、尔今檢地ノ上ハ、現米壹石トナシ、四斗上納ニテ内壹斗二升二合ヲ以テ軍役高出米トシ、二斗七升八合ヲ持主ノ所得ト定ム、

一是迄粃九斗六升ニテ高壹石ニ結被 仰付来候得共、此節大御支配御檢地之上は、現米壹石を以高壹石ニ被相

定、壹石ニ付四斗上納被 仰付候条、御軍役高出米之儀は、是迄之通壹石ニ付壹斗式升式合宛致上納、式斗七升八合は持主方江可致収納候、此旨向々江可致通達候、

明治三年午閏十月三日

知政所

八六八 藩庁夏作賦課ヲ免シ麦作培植方ヲ令ス

閏十月三日

藩庁夏作賦課ヲ免シ、麦作培植方ヲ令ス、

一御蔵入高並給地御軍役高之内、夏免上納被仰付来候株も有之候得共、以来右は不及上納候、全体御藩内麦作不充分、是迄他より買入致用弁来候得共、夷人開港以來、麦酒製造等相關ケ、大小麦消亡不少、依之追々不致精作候ては、不相濟時勢ニ付、夏免上納之儀は、被相除候得共、麦作ハ猶又精々致繁殖候様可申渡旨、被仰達候条、民事総裁江申渡、向々へ可申渡候、

明治三年午閏十月三日

知政所

八六九 貢進生学費ハ各藩適宜本人ニ交付セシム

閏十月四日

貢進生学費ハ、各藩ヲシテ適宜本人ニ交付セシム、

第七百十八 閏十月四日(大学南校)

(頭註)「四年文部省第三二依り消滅」
貢進生学費、毎月金拾兩之積リヲ以、一ケ年四度ニ纏

メ、当校へ御差出可有之旨、選挙心得書ニ認置候処、

右ハ不及其儀候間、藩々之適宜ニ応シ、当人へ御渡可
有之候也、

八七〇 大久保利通ノ民部省御用掛ヲ解ク

閏十月五日

大久保利通ノ民部省御用掛ヲ解ク、

鹿兒島県士族

大久保利通

一蔵

○中略

同年明治三年七月十日

一民部省御用掛被仰付候事、

同年閏十月五日

一民部省御用掛被免候事、

○以下略ス

八七一 藩庁紙札発行ニ付通融方ヲ令ス

閏十月五日

藩庁紙札発行ニ付、通融方ヲ令ス、

一木判摺紙札

柿色

金五両札

右は御吟味之訳有之、是迄御振出相成居候御藩内金

札同様、此節御振出相成候付、諸御蔵々は勿論、諸

人取遣之儀、金壹両ニ付錢拾貫文替ニて、通融被仰

付候条、此旨御藩内一統江被仰達度候事、

閏十月二日

会計局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年 閏十月五日

知政所

八七二 官省関係ノ事件ハ来ル十一月ヨリ弁官ニ

進達セシム

閏十月七日

諸願伺届等官省関係ノ事件ハ、十一月ヨリ総テ弁官ニ進達セシム、

〔第七百一十二〕 閏十月七日 (布) (太政官)

〔頭註〕「四年太政官第三百五十七ヲ以テ改ム」
諸願伺届等諸官省関係之事件ハ、其向々へ差出候様、

昨巳年四月御達ニ相成候処、来ル十一月ヨリ総テ弁官へ可差出事、

八七三 諸向願伺届等弁官ヨリ其官省ニ廻付シ、

官省查点後太政官ニ進致セシム

閏十月七日

諸向願伺届等、総テ弁官ヨリ其官省ニ廻付シ、官省之ヲ查点シ、後太政官ニ進致セシム、

〔第七百一十二〕 閏十月七日 (沙) (太政官)

〔頭註〕「同上」
諸官省

諸向願伺届等、是迄普通之事件ハ、諸官省見込ヲ以テ、取捌来候処、今般更ニ別紙之通被 仰出候ニ付テハ、来十一月ヨリ諸官省関係之事件、総テ弁官ヨリ相廻シ、其官省ニ於テ巨細取調へ、太政官へ差出候上、御沙汰

相成候間、此旨可相心得事 (別紙ハ第七百二十一ニ同シ)

八七四 藩庁練兵中国旗ヲ掲ケ通行人ヲ戒飭セシム

ム

閏十月十二日

藩庁ニ於テハ、練兵中国旗ヲ掲ケ、通行人ヲ戒飭セシム、一此節練兵場被召建、練兵中通行人致遠慮、調練妨不相成様被仰渡置、就ては調練之節は、時々国旗引揚候間、其節は屹と踏通候儀不相成段、御達相成度、末々之者は奉行頭人より夫々申渡候様、被仰渡置度候事、

午閏十月

軍務局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年午

閏十月十二日

知政所

八七五 新金引換期限ヲ藩内ニ伝達ス

閏十月十二日

新金引換期限ヲ令セラレタルニ依リ、更ニ藩内ニ之ヲ伝

達ス、

一 銀台式分金之儀、昨已年限百兩ニ付三拾兩ニテ、御引替可相成旨達置、以後猶早々差出候様、当三月中相達候処、今以引替残有之哉ニ付、追々差出際限無之候間、来る十二月十五日限引替、右期限後は引替不相成候条、各管轄内不洩様告示可致、此旨相達候事、

庚午九月

大藏省

新金引替向之儀、從

朝廷猶又別紙之通、被 仰達候条、其通可相心得候、此旨向々江不洩様可申渡候、

明治三年午閏十月十二日

知政所

八七六 海軍学寮生徒募集ニ付之ヲ藩内ニ伝達ス

閏十月十二日

先キニ東京ニ於テ、朝廷ヨリ海軍学寮創立ニ付、其生徒募集ヲ達セラレタルヲ以テ、藩庁吏ニ之ヲ藩内ニ伝達ス、一 海軍之儀、大ニ御興張之

御趣意ニ付、今般海軍学寮御創立、普く生徒御教育相成儀ニ候条、是迄海軍ヲ志シ、學術修業及其筋勤務致

候者、姓名・年齢・生国・住所・何学何科・何ヶ年修業之訳委鋪相記シ、在府は当月二十日限、藩県は無遲延至急可申出候事、

庚午十月

兵部省

別紙之通、於東京被仰渡候段申来候条、向々江可申渡候、

明治三年午閏十月十二日

知政所

八七七 新金引替方留守官管轄宮・華族以下ニ達

ス

閏十月十五日

銀台二分金引替方、留守官管轄ノ宮・華族以下ニ之ヲ令ス、

〔第七百四十〕 閏十月十五日（留守官）

銀台式分金百兩ニ付三拾兩ニテ、昨已年限リ御引替可相成旨御布告、以後格別之訳ヲ以、期限後レ之分猶御引替相成候ニ付、銀台之分早々差出可申旨、当三月中更ニ御達之所、今以引替残モ有之哉ニテ、追々差出シ、際限モ無之ニ付、当午十二月十五日迄ハ、從前之通引

替、其後差出候共引替不相成候段、今般大藏省ヨリ地方官へ達シニ及候ニ付テハ、当官管轄官・華族以下ノ内、若悪金所持有之候ハ、其員數書来ル二十五日迄ニ、当官へ可差出候事、

八七八 華族隱居願並元服及養子願ノ規程ヲ定ム

閏十月十七日

華族隱居願並ニ嫡子・嫡孫元服及養子願ノ規程ヲ定ム、

〔第七百四十一〕 閏十月十七日（布）（太政官）

〔頭註〕「十七年七月七日官内省華族令第七條ニ依リ消滅」
一 華族ノ輩、年五十歳ヨリ隱居願之儀可為勝手事、

但廢疾及事故ニ罹リ候輩ハ、此限ニアラス、

一 嫡子・嫡孫年十一歳ヨリ元服願之儀、可為勝手事、

〔頭註〕「五年太政官第八十七号ニ依リ消滅」
一 実子無之輩ハ、年齢ニ不拘、養子願之儀可為勝手事、

右之通、更ニ被 仰出候条、此旨相達候事、

八七九 士族隱居・養子兩願ノ規定ヲ定ム

閏十月十七日

士族隱居・養子兩願ノ規定ヲ定ム、

〔第七百四十二〕 閏十月十七日（太政官）

〔頭註〕「十二年太政官第八号達ニ依リ消滅」
一 士族之輩、年五十歳ヨリ隱居願之儀、可為勝手事、

一 実子無之候ハ、年齢ニ不拘養子願之儀、可為勝手事、

右之通、更ニ被 仰出候条、此旨相達候事、

八八〇 天社神道土御門家免許ヲ禁ス

閏十月十七日

天社神道土御門家免許ヲ禁シ、更ニ之ヲ府藩県ニ布告ス、

〔第七百四十五〕 閏十月十七日（布）（太政官）

從來天社神道ト唱へ、土御門家免許ヲ受ケ候者共、兩

刀ヲ帶シ、絵符ヲ建宿駅通行候由、甚以無謂事ニ付、

自今右等之所業被差止候間、嚴重可申達、尚今後門人

免許一切被禁候旨、今般土御門和丸へ 御沙汰相成候

条、府藩県ニ於テモ此旨相心得、管内取締可致事、

八八一 藩庁南方郷内鹿籠村ヲ分割ス

閏十月十七日

藩庁南方郷内鹿籠村ヲ分割ス、

一南方郷之内

別府村

右は南方之内鹿籠村一村にて、手広支配等行届兼候付、
右之通分村被 仰付候旨、被 仰達候条地頭江申渡、
向々へも可申渡候、

明治三年午閏十月十七日

知政所

八八二 諸藩ノ陸軍生徒ヲ大阪兵学寮ニ出サシム

閏十月二十日

諸藩ニ令シテ、陸軍生徒ヲ大阪兵学寮ニ出サシム、

〔第七百五十六〕 閏十月二十日 (布) (太政官)

〔頭註〕「第七百八十七參書」

諸藩

陸軍ハ、佛蘭西式ヲ斟酌御編成相成候旨、先般被

仰出候ニ付テハ、陸軍生徒大中小藩高ニ応シ、左之割

合ヲ以テ、来ル十二月十五日ヨリ二十五日迄ニ、大阪

兵学寮へ可差出候事、

大藩

九人

但現石拾五万石以上

中藩

六人

但現石五万石以上

小藩

三人

但現石壹万石以上

現石壹万石未滿之藩生徒差出方之儀ハ、追テ
御沙汰可有之事、

一生徒人選之儀ハ、兼テ御布令之兵学令ニ可相基事、

一入学手順並費用等之儀ハ、兵部省へ可相回事、

一四月来兵部省之達ニテ、生徒差出居候藩、藩高相当ノ
分ハ、是迄通り、不足之分ハ更ニ増員、過分之分ハ其

俾入学被差許候事、

八八三 岸良兼養小倉出張ニ付金ヲ賜フ

閏十月二十日

岸良兼養本之小倉出張御用勤ニ付、其賞トシテ金三千足

ヲ下賜セラル、

鹿兒島県士族

岸良兼養

〔七之丞〕

○中略

同年明治三年閏十月廿日

一小倉出張御用相勤候ニ付、目錄ノ通下賜候事、

金三千疋

○以下略ス

宣下候事、

庚午閏十月

太政官

八八四 川村純義ヲ兵学頭ニ兼任ス

閏十月廿三日

川村純義与十郎ヲ以テ、兵学頭ニ兼任ス、
八八四ノ一

鹿兒島県土族

川村純義

与十郎

天保十一年庚子正月生

○中略

同年明治三年閏十月廿三日

一兼任兵学頭、

○以下略ス

八八四ノ二
兼任兵学頭

河村兵部大丞

右

八八五 脱籍無産ノ輩復籍ノ節府藩県護送者等ノ
賄方ヲ定ム

閏十月廿三日

脱籍無産ノ輩復籍ノ節、府藩県護送者等ノ賄方ヲ定ム、

第七百六十五 閏十月二十三日 (布) (太政官)

(頭註)「四年太政官第二百三三依り消滅」

脱籍無産ノ輩復籍ニ付、府藩県送之節、賄方一人ニ付、

泊白米四合・銀五匁、昼白米二合・銀二匁五分宛ニテ

可取賄、尤入費ハ兼テ布告之通可相心得事、

八八六 官・華族並諸官員ノ家来等復籍シ難キ者

其旧籍・行状等ヲ録上セシム

閏十月廿四日

官・華族並諸官員ノ家来等復籍シ難キ者、其旧籍・行状
等ヲ録上セシム、

第七百七十一 閏十月二十四日 (布)

明治3年(1870)

宮・華族^{元堂} 並ニ諸官員之内、家來分或ハ食客厄介ニ致置候者ニテ、多年国事ニ奔走中、不得止情実有之、復籍不都合之輩有之候ハ、其旧籍・行状等委細取調早々可申出事、

八八七 海軍資金上納石代相場ヲ定ム

閏十月廿六日

海軍資金上納石代相場ヲ定ム、

〔第七百七十六〕 閏十月二十六日(大蔵省) 諸藩

海軍資金、來ル十二月ヨリ上納石代之儀ハ、当十月中

御蔵米平均相場一石ニ付、金八兩永百九十文之可為割

合事、

八八八 藩庁下馬札ヲ設ケ下乗札ヲ廢棄ス

閏十月廿七日

藩庁下馬札ヲ設ケ、下乗札ヲ廢棄シ、尚不敬ニ涉ラサル

コトヲ戒飭セシム、

一下馬札

右御樓門下練兵場境上涯並御軍神社下東脇江、右之通此節被相直、又は新ニ被召建、下乗札之儀は惣て被相除候付、以來下馬札内日傘等相用候儀は勿論、其外不敬之儀共無之様可相心得旨、向々江不洩様可申渡候、

閏十月廿七日

知政所

八八九 藩庁田中清之進ヲ伝事ト為ス

閏十月廿七日

藩庁田中清之進ヲ以テ、伝事ト為ス、

一伝事

田中清之進

右之通被仰付、当分之通東京江可相詰旨、去月廿八日於東京被仰付候段申來候条、可承向々江可申渡候、

明治三年午閏十月廿七日

知政所

八九〇 府藩県管内社祠ノ祭神・班次・領地及ヒ祠

官・職位等ヲ檢覈録上セシム

閏十月廿八日

府藩県ニ令シ、管内社祠ノ祭神・班次・領地、及ヒ祠官・職位等ヲ檢覈録上セシム、

閏十月廿八日庚寅

御布告写

今般国内大小神社之規則御定ニ相成候条、於府藩県左之箇条委詳取調、当十二月限可差出事、

某国某郡某村鎮座

某社但武内・式外或ハ府藩県別段崇敬之社等之別

一宮社間数並大小ノ建物

一祭神並勸請年記、附社号改替等之事

但神仏旧号区別書入之事

一神位

一祭日但年中数度有之候ハバ其中大祭ヲ書載スベシ

一社地間数、附地所古今沿革之事

一勅願所並ニ

宸翰

勅額之有無、御撫物・御玉串献上等ノ事

一社領現米高所在之國郡村或ハ廣米並神官家禄分配之別

一造営公私或ハ式年等之別

一撰社・末社之事

一社中職名・位階・家筋・世代、附近年社僧復飾等之別

別

一社中男女人員

一神官若シ他社兼勤有之ハ、本社ニテハ某職、他社ニ

テハ某職等之別

一一社管轄府藩県之内、数ヶ所ニ涉リ候別

一同管轄之庁迄距離里数

八九一 山口藩通逃ノ徒取締ヲ布告ス

閏十月廿八日

山口藩通逃ノ徒附近地方ニ出没ス、依テ是日府藩県ニ令シテ、之ヲ緝捕セシム、

閏十月廿八日

御布告写

先般山口藩隊卒沸騰ニ及候節、臨機之処置同藩へ御委任相成、万一脱走之者可有之モ難測ニ付、兼テ無油断取締可致旨相達置候処、今以近国各所ニ潜伏、時々暴行候趣ニ付、府藩県ニ於テ猶又嚴重取締可致候、尤同

明治3年(1870)

藩へモ追捕可致旨御達相成候間、此旨為心得相達候事、

八九二 藩庁庶民七拾九歳以上ノ者ヲ查点シ稟告

セシム

閏十月廿九日

藩庁庶民七拾九歳以上ノ高齢者ヲ查点シ、十一月中マデ

ニ稟告セシム、

一人家来・町人・百姓・浦浜人等、男女共当七拾九歳以

上之者、各名前・年齢無間違様取調、夫々一帳取仕建、

当十一月中可申出旨、民事局並諸郷地頭江申渡、向々

江も可申渡候、

明治三年午閏十月廿九日

知政所

八九三 藩庁新嘗祭ト併セ鶴嶺神社ノ祭祀ヲ行フ

閏十月廿九日

藩庁新嘗祭日ヲ遵奉シ、併セテ島津家累代ノ靈社タル鶴

嶺神社ノ祭祀ヲ、敬肅ニスルコトヲ令ス、

一朝廷新嘗御祭は、歴代之

天皇御親祭被為在、新穀之初穂を天神地祇ニ供祀せら

れ、上古天祖之詔を以、蒼生之為、稻穂を 天孫に被

為奉授候神恩を被為報候御重典にて、毎年十一月中之

卯日、右御祭日に相当り、且又鶴嶺神社御祭も、其明

日被為遂行候御定にて、右兩日は格別之御祭日ニ付、

御藩内一同穢不浄を避け、斎戒之心を存し、敬肅罷在

候様被 仰達候条、向々江不洩様可申渡候、

但当年は、来月廿四日中ノ卯之日に相当り候、

明治三年閏十月廿九日

知政所

八九四 藩庁附士分地別立許可ニ制限ヲ置ク

閏十月廿九日

附士分地別立許可ニ、制限ヲ置クコトヲ令ス、

一附士分地別立之儀は、高五石以上致附属、別立御免被

仰付来、本家残高不被定置候処、纒に拾石位所持之者

迄も別立願出、其通にては、本末共終ニ可及衰微事候

付、以来本家江拾五石以上残置、分地別立被 仰付候

条、向々江可申渡候、

明治三年午閏十月廿九日

知政所

八九五 藩庁島津家祖靈看守ノコトヲ達ス

是月(閏十月)

島津家祖靈看守ノコトヲ達ス、

一旧妙谷寺境内

大岳公御六男

桂山君御墓之事

伊邇色御墓

右之通奉称、草牟田御墓守より致兼帯、掃除旁之儀

は、同所人足より相勤候様被仰付候条、草牟田御墓

守江申渡、可承向江も可申渡候、

明治三年午閏十月

知政所

【参照】

〔米〕

「九代」

○忠國

略○上

守棟

桂山和尚福昌寺九代住持、母伊集院信濃守女

○以下略ス

八九六 藩庁書記並書記見習ヲ任命ス

是月(閏十月)

藩庁ニ於テハ、益山八右衛門外二人ニ書記ヲ、山本十次

郎ニ書記見習ヲ命ス、

一書記

益山八右衛門

時任清左衛門

種子島中輔

一書記見習

山本十次郎

右之通、先月十八日、於東京被 仰付候条、可承向江

可申渡候、

閏十月

知政所

八九七 民事局居宅検地ノ手續ヲ令ス

是月(閏十月)

民事局居宅検地ノ手續ヲ令ス、

一掛屋敷停止之事、

八九八 新金引換手續ヲ定メ其取扱方ヲ令ス

是月(十二月)

新金引換手續ヲ定メ、其取扱方ヲ令ス、

一 銀台式歩金之儀、来ル十五日限御引替被 仰付候、

差出候様被 仰達置、其段は御藩内中江御布告相成居、

既ニ右日限も差掛候付、御藩内之儀は、遠海相隔居候

場所も有之候付、期限延之儀は、御届ニも相成居候得

共、御城下並諸郷持合之向は、別段国鈔を以被相渡、

引替之上大蔵省江被差出引替相成、右代金を以、此節

国鈔御引替相成答候、

一 当月六日より廿五日迄之間、新金持合之向は、下松原

通兩替屋理右衛門方江持越、御定之包料差出、包方之

上国鈔方江差出候ハ、引替札可被相渡候、

但

差出候向は、朝五ツ時より七ツ時迄之間可差出候、

一 五兩以下ニて、兩替屋包方又は国鈔方江差出方難涉之

向は、上町人柿本彦左衛門、下町人濱崎太平次・林甚

左衛門江引替人被 仰付置候間、一切ニ付包料、手間

料トシテ、錢三十拾式文ツ、相添、右三人之者所江為持

遣候ハ、早速国鈔方より引替可遣候、

一 右引替人之儀は、前以国鈔被相下置、引替之面付帳取

仕立、無滞引替可遣候、就ては不正金は勿論、からと

唱候贖金は、一切引替不相成候、

一 諸郷之儀は、此書付相達候日より一七日中地頭方江引

揚置、面付帳相添、追々国鈔方江差出候ハ、引替札

可被相渡候間、円方之上は早々国鈔方江可差出候、

但 改方之上、からと唱候贖金は引替不被仰付候、

一 右引替ニ付、自然心得違、他領等より持入引替願出候

儀、屹度不相成候条、他領境郷々は、地頭副役等より

早々手を付、他領より持入候儀、手堅く取締可致候、

一 新金御蔵入払之儀は、来ル十八日限ニて可差留候、

一 此節引替に付ては、兩替屋并右町人方ニて引替之外は、

国鈔方等江掛錢差出ニ不及候、

一 節季之事情間、右式歩判引替迄之間、御当地は勿論、

諸郷々ニ至りては、諸人通弁互ニ可致用捨候、

右之通被仰付度候事、

十二月四日

會計局

右之通被仰付候条、向々江不洩様可申渡候、

十二月十七日

知政所

〔稿本表紙〕

明治三年
十一月 忠義公史料稿本(初稿)十二

〔稿本にて補正〕

八九九 府藩県ニ令シテ斗南藩貨幣偽造ノ徒ヲ緝
捕シ、律ニ照シテ処断セシム

十一月三日

斗南藩貨幣偽造ノ徒逃逸ス、此日府藩県ニ令シテ、嚴ニ
之ヲ緝捕シ、律ニ照シテ処断セシム、

十一月三日

御布告写

斗南藩中貨幣偽造之者不少、今般御取締相成候得共、

偽造之徒多人數脱走ニ及ヒ候ニ付テハ、此後何レノ地
へ潜匿、再ヒ偽造相企候モ難計、国之大禁ヲ犯シ不屈
ニ付、向後贖金・贖札等ヲ企候者及見聞、事実無相違
ニ於テハ、速ニ召捕、兼テ御布令之偽造宝貨律ニ照準
シ処置可致、万一手向候者ハ、打取候テモ不苦候条、
各地方官ニ於テ、此旨相心得嚴密取締可致事、

九〇〇 華・士族ノ縁組規則ヲ定ム

十一月四日

華・士族ノ縁組規則ヲ定ム、

十一月四日

縁組規則

一華族ハ太政官へ願出、士族以下ハ其管轄府藩県へ可願
出事、

一華族・士族取結候節ハ、華族ハ太政官へ願出、士族ハ
其管轄官庁ヨリ太政官へ伺濟之上可差許事、

一府藩県管轄違ニテ取結候節ハ、士族・卒・平民タリト
モ、双方之官ニテ聞濟、互ニ送り状取替シ可申事、

九〇一 特旨ヲ以公現王ノ宮号復活並改名ト、普

国留学ノ請ヲ聴ス

十一月四日

特旨ヲ以テ、公現王ノ宮号ヲ復シ、満宮ト称シ、名ヲ能

久ト改メ、其普国留学ノ請ヲ聴ス、

九〇二ノ一
十一月四日

伏見宮四男公現上表写

臣公現、曾テ昏愚ニシテ、事情ニ疎ク、一旦誤テ賊徒
ニ構陷セラル、不敬ノ罪固ヨリ以テ謝スヘキナシ、然
ルニ何ノ幸カ、再造ノ 天恩ヲ蒙リ、且厚祿ヲ忝フス、
実ニ何ヲ以テ之レニ報セン、且暮苦慮ニ堪ヘス、窃ニ
惟ルニ、方今ノ時勢海外各国ノ情実ニ通シ、其長技ヲ
学フニ非レハ、以テ 天恩ノ万分一ニ報スルニ足ル事
ナシ、伏テ冀クハ、迅速英国ニ赴キ、以テ勤学スルヲ
得ン、是臣公現ノ微衷也、故ニ謹テ航海ノ 天許ヲ蒙
ラン事ヲ泣血歎願シ奉ル、臣公現誠恐誠惶、頓首再拜、
庚午閏十月廿八日 公現

弁官

御中

九〇二ノ一

御沙汰書写

伏見宮四男公現

改名能久、願之通被

聞食候事、

能久

依 思食、自今宮ト可称旨 御沙汰候事、

伏見満宮

李国勤学被 仰付候事、

【参照一】

十一月十二日

御沙汰書写

鹿児島藩

寺田平之進

山口藩

井上省三

各通

廣島藩

田坂虎之助

伏見満宮李国勤学被 仰付候ニ付、随従申付候事、

【参照一】

十一月十二日

東京府

其府士族岡田鑄助・山崎橘馬儀、今般伏見満宮宇国勤
学被 仰付候ニ付、随従勤学申付候、此旨可相達候事、

十一月十四日

御沙汰書写

伏見満宮

今般宇国留学被 仰付候ニ付テハ、惣テ書生之心得ヲ
以テ勤学致シ、弁務使之指揮可相受旨 御沙汰候事、

藩士寺田平之進、伏見満宮ニ随従宇国留学被 仰付、
来月二日横濱出港ノ筈御座候処、此内ヨリ病氣有之、
辻モ其節迄ニハ出立難相調段申出候ニ付、後便ヨリ出
立為仕候テ不苦候哉、此段奉伺候、以上、

庚午十一月廿七日

鹿兒島藩

弁官

御中

〔朱〕
「伺之通」

別紙写之通鹿兒島藩ヨリ伺出候ニ付、朱書之通御附紙
相成候間、為御心得御廻シ申入候、就テハ便船ノ節、
万端御世話可有之様、兼テ申入置候、

庚午十一月廿七日

弁官

外務省

御中

九〇二 太政官制服ヲ定ム

十一月五日

官吏ノ制服ヲ定メ、行旅及ヒ非常ノ際ニ之ヲ用キ、旅行
中ハ之ヲ以テ衣冠ニ代フ、

十一月五日

御布告写

今般制服雛形凶面之通御定被 仰出候条、非常並ニ旅
行等可相用、且旅行中礼儀ニ関シ候節ハ、衣冠ノ代リ
ニ可相用事、

但シ冠ハ脱セザルヲ以テ礼トナシ候得ドモ、帽ハ脱
スルヲ以テ礼ト定ムベシ、尤従来相用候陣笠モ同

様ニ可相心得事、

庚午十一月

太政官

(別紙)

制服雛形図面ハ略ス、

十一月五日

中村博愛宗見ヲ以テ、兵部省出仕並ニ大坂出張ヲ命ス、

鹿兒島県土族

中村博愛

九〇三 正租雑税不当ノ仕来取調ノ事ヲ布告ス

十一月五日

正租雑税中石代金納、其他不相当ノ因襲改正ノ予図ヲ開申セシム、

十一月五日

御布告写

府県支配地並諸藩御預リ所之内、旧来之因襲ヲ以、正租雑税等之内種々名目ヲ設ケ、石代金納其他不相当之仕来有之候処、向後実地相当候様改正之見込相立、早々可申出事、

但従前取扱振並原由等巨細取調可申出事、

九〇四 中村博愛ニ兵部省出仕並大坂出張ヲ命ス

○中略

同治三年庚午十一月五日

宗見
天保十四年癸卯十一月生

一出仕申付候事、

兵部省

同日

一大坂出張申付候事、

兵部省

○以下略ス

九〇五 諸藩雇ノ外国船乗組官員旅費ノコトヲ達

ス

十一月九日

諸藩外国船ヲ雇ヒ、不開港場ニ廻致ノ節、乗組官員旅費ハ開港場県庁公費トス、

〔第八百七〕十一月九日(布) (太政官)

〔頭註〕四年太政官第三百五十三ヲ以テ諸藩一諸藩ニ於テ願濟之上、開港場ニ於テ外国船相雇、不開

明治3年(1870)

港場へ差廻候節、取締之為メ乗組之官員旅費、其外諸

入用等は迄雇主ヨリ差出来候処、自今開港場県庁公費

ニ被 仰付候条、此旨相達候事、

黒岡帯刀

英国勤学申付候事、

庚午十一月九日

九〇六 諸藩支配所瀆地代米永ヲ廢シ、高内引ト

為サシム

九〇八 府藩県他貫属士族借受ノ節、双方ヨリ開

申セシム

十一月九日

十一月十日

諸藩支配所瀆地代米永ヲ廢シ、高内引ト為サシム、

府藩県他貫士族借受ノ節、願ヲ要セス、双方ヨリ開申セ

〔第八百八〕 十一月九日(布) (太政官)

シム、

〔頭註〕「四年民部省第六參書」

十一月十日

御布告写

諸藩支配所之内、瀆地代米永之儀、是迄依旧貫相渡候

処、自今被止候条、高内引ニ可致事、

但地主共へハ相当之御手当可被下、尤他村之地所ヲ

借地イタシ、下方相對ヲ以地代差出来候分ハ、從

府藩県ニ於テ他貫属士族借受候儀、自今不及願、双方官庁掛合致シ、故障無之候ハ、借受候上、双方ヨリ可届出事、

九〇七 黒岡帯刀ニ英国勤学ヲ命ス

九〇九 銀台二步金ノ引替方ヲ申ネテ十二月十五

十一月九日

日迄延期ス

黒岡帯刀、英国へ勤学ヲ命セラレ、

鹿兒島藩士族

十一月十日

銀台二分金ノ引替方ヲ、申ネテ十二月十五日迄延期セラレタルヲ達シ、尋テ同金ノ藩外輸出ハ之ヲ許シ、輸入ハ之ヲ停止ス、

銀台式歩金之儀、先般百兩ニ付三拾兩ニテ御曳替可相成旨、追々期限被相定、

朝廷御布令之趣有之候処、猶又此節、来ル十二月十五日限引替、右期限後は引替不相成旨、又々被仰渡趣有之、右ニ付御藩内商人其外何そニ付、他邦江持出候儀は勝手次第ニテ、尔後右式歩金御藩内ニ持入候儀、屹と不相成旨御城下並外城江被仰渡度事、

明治三年十一月

會計局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

十一月十日

知政所

九一〇 徴兵規則ヲ頒ツ

十一月十三日

徴兵規則ヲ頒チ、府藩県ニ令シテ之ヲ大阪兵部省支局ニ致サシム、每一万石ニ五人、士卒・平民ヲ論セス合格ノ者ヲ選ヒ、服役四年ヲ限り、再役ヲ請フ者ハ之ヲ許シ、

明年正月ヨリ徴募ヲ行フ、

十一月十三日

御沙汰書

府藩県

徴兵之儀、別紙之通被仰出候間、此旨相達候事、

別紙

兵制之儀、先般先ツ石高二応シ定員被仰出候処、兵事ハ護国之急務、皇威ヲ發揮スル之基礎ニ付、宇内古今ノ沿革得失ヲ御洞察被為在、前途兵制一変、全国募兵之御目的ニ候処、即今先ツ左之規則ヲ以テ徴募被仰出候間、来ル未ノ正月ヨリ順次ヲ以テ、各道府藩県士族・卒・庶人ニ不拘、身体強壯ニシテ、兵卒ノ任ニ堪ベキ者ヲ撰ミ、一万石ニ五人ツ、大阪出張兵部省へ可差出候事、

但從來之常備ハ勿論、各地方緩急応變之守備ト可相心得事、

庚午十一月

太政官

徴兵規則

第一条

兵卒年齢二十ヨリ三十ヲ限り、身材強幹、筋骨壯健、

長ケ五尺以上ニシテ、兵役ニ堪ユヘキ者ヲ撰挙スベキ事、

但医官ノ検査ヲ受ケ合格セサル者、兵役ニ服スルヲ許サス、

第二条

一家ノ主人又ハ一子ニシテ、老父母アル者、或ハ不具ノ父母アル者等撰挙ス可カラサル事、

第三条

服役、先ツ四年ヲ以テ期限トス、役ヲ終ヘ帰郷スル者ニハ、在役中ノ級階ニ応シ、賑恤金ヲ賜与スヘシ、期限内私ノ故ヲ以テ、帰郷願フベカラサル事、

但四年ノ服役終ル後、帰郷ヲ欲セス、再役ヲ乞フ者ハ之ヲ許ス、

第四条

在役中役仕ノ故ヲ以テ、傷痍等ニテ終身不具ト相成候者ニハ、扶助金ヲ賜フ可キ事、

第五条

衣食給料等總テ省ヨリ賜与スベシ、各地方ヨリ大阪迄差出候費用ハ、其地方官ヨリ相弁スヘシ、免役ノ節、路費ハ省ヨリ可差遣事、

第六条

検査ニ依リ、服役相成難キ者有之節ハ、再選代人差出スヘキ事、

但此往復ノ路費ハ、地方官ヨリ弁ス可キ事、

第七条

始テ営所ニ来ル費用ノ外ハ、一切地方官ヨリ給与ス可カラザル事、

第八条

地方官庁ニテ選挙之上、左之通送り状ヲ本人ニ附シ、大阪出張兵部省ヘ可差出事、

但シ地方官員召連レ罷出候儀、其便宜ニ従ス、

里
町
村
庄

記
辛未年徴兵何人之内

何国何郡何村
庄

士族或卒農工商

第何号

何某
当何幾歳

月 日

府 藩 県
何藩 何某
印

長サ九寸
尺曲

右每人ニ可附事、

別紙

辛未年徴兵何人

士族卒或農工商

第老号

何某

当何幾歳

士族卒或農工商

第式号

何某

当何幾歳

合何人

当^府藩^支配地何万何千石、当年之徴兵前書之通り差出申

候間、御検査可被成下候也、

月日

何^府藩^印

兵部省

徴兵方

御中

右界紙ニ書スヘシ、

五畿内 山陰道 南海道 府藩県

右来辛未ノ正月廿五日ヨリ二月朔日迄ノ内、大阪徴兵

方へ御規則ノ人員可差出事、

東海道 北陸道

府藩県

右辛未ノ四月廿五日ヨリ五月朔日迄同断、

西海道

藩県

右辛未ノ八月廿五日ヨリ九月朔日迄同断、

東山道 山陽道

藩県

右辛未ノ十二月廿五日ヨリ壬申正月元日迄同断、

九一 帯刀ノ者横濱其他外国居留地関門通行ニ

印鑑ヲ使用セシム

十一月十四日

帯刀ノ者、横濱其他外国居留地関門ハ、自今其管轄所ノ

印鑑ヲ以テ通行セシム、

〔第八百五十八〕十一月十四日（布）（太政官）

〔頭書〕「制度變革ニ依リ消滅」
帯刀之者、横濱・神戸・大阪並東京築地等、外国人居

留地関門通行ニハ、政府外務省・東京府ヨリ印鑑相渡

来候処、自今諸官員ヨリ府藩県士卒ニ至ル迄、其管轄

所ノ印鑑ニテ通行相成候ニ付、諸官省・府藩県トモ照

準之為メ、右関門へ兼テ印鑑差出置可申候事、

九二二 官員外ノ者ニ宣教掛ヲ命スルトキハ、参事或ハ属准席タラシム

十一月十四日

府藩県ニ令シ、官吏ニ非スシテ宣教ノ事務ニ任スル者ハ、参事若シクハ属ニ准ス、奏任ニ准スル者ハ、奏請セシム、又諸藩ノ宣教使ニ命シテ、明年正月ヲ期シテ東京ニ至ラシム、

九二二ノ一
〔第八百十九〕十一月十四日(布) (太政官)

〔頭註〕「五年太政官第八十号ニ依リ消滅」
大教ヲ宣布スルハ、固ヨリ知事・参事職掌中之事ニ候

得共、官員外之者へ宣教掛リ申付、其事ヲ専務為致候

ハ、其人材ニ応シ参事或ハ属准席可申付事、

但奏任官以上相当准席之者ハ可伺出事、

九二二ノ二
〔第八百二十〕十一月十四日(布) (太政官)

〔頭註〕「四年太政官第三百五十三号ニ依リ消滅」
諸藩宣教使来未正月ヨリ月割之通出京可致事、

但前月中ニ着京可致事、

宣教使来月割

西海道

福岡藩 秋月藩 柳川藩 豊津藩

千束藩	中津藩	岡藩	佐伯藩
杵築藩	森藩	府内藩	日出藩
蓮池藩	小城藩	唐津藩	鹿島藩
福江藩	熊本藩	人吉藩	佐賀藩
島原藩	平戸藩	肥前藩	高鍋藩
佐土原藩	鹿兒島藩	嚴原藩	

南海道

和歌山藩	田邊藩	新宮藩	徳島藩
多度津藩	丸亀藩	今治藩	新谷藩
大洲藩	吉田藩	宇和島藩	松山藩
小松藩	高知藩		

山陽道

三草藩	林田藩	小野藩	山崎藩
福本藩	赤穂藩	安志藩	三日月藩
明石藩	鶴田藩	津山藩	真島藩
岡山藩	生坂藩	庭瀬藩	新見藩
岡田藩	高梁藩	成羽藩	鴨方藩
福山藩	廣島藩	岩國藩	徳山藩

山口藩 清末藩

二十六藩

三合六十七藩

右正月

山陰道

龜岡藩 園部藩

篠山藩 峰山藩

村岡藩 鳥取藩

母里藩 十三藩

畿内

淀藩 高取藩

柳生藩 郡山藩

伯太藩 小泉藩

三田藩 十三藩

東山道ノ上

西大路藩 大溝藩

吉見藩 彦根藩

岩村藩 今尾藩

山家藩

宮津藩

松江藩

綾部藩

出石藩

廣瀬藩

田原本藩

芝村藩

岸和田藩

柳本藩

丹南藩

高槻藩

山上藩

膳所藩

大垣藩

宮川藩

元山形

永野從五位

加納藩

高須藩 苗木藩 野村藩 郡上藩

水口藩

十七藩

三合四十三藩

右二月

東山道ノ下

小諸藩

高遠藩

上田藩

沼田藩

七日市藩

鳥山藩

吹上藩

泉藩

三春藩

八戸藩

大泉藩

新莊藩

飯山藩

高島藩

松代藩

小幡藩

前橋藩

壬生藩

足利藩

榎倉藩

守山藩

斗南藩

上ノ山藩

本莊藩

飯田藩

龍岡藩

松本藩

高崎藩

安中藩

宇都宮藩

佐野藩

中村藩

二本松藩

黒石藩

米澤藩

久保田藩

岩村田藩

須坂藩

伊勢崎藩

館林藩

大田原藩

黒羽藩

磐城平藩

湯長谷藩

一ノ關藩

七戸藩

天童藩

矢島藩

北陸道北海道

四十八藩

北海道流所規程未タ成立セサルヲ以テ、姑ク流刑ヲ停メ
准流法ヲ定ム、

十一月十七日

府藩県へ御布告写

准流法

一等徒役 五年

二等徒役 七年

三等徒役 十年

北海道流所御規則追テ被相定候迄、暫ク流刑ヲ停メ、

役限ヲ五徒之上ニ加ヘ、准流法被相設候条、流刑ヲ犯

シ候者ハ、右ニ照準シ処置可致候事、

今般准流法被相設候ニ付、今後流罪ヲ犯シ候者有之節

ハ、従前府藩県ニ於テ設ケ置候徒場ニ入、尋常徒人ト

區別致シ、嚴重驅役可致候、小藩ニ於テ各自一徒場ヲ

設ケ候儀、不便之向ハ府県大中藩ニ合併、或ハ四五藩

中ニ一場ヲ設ケ、費用ハ現石高ニ割付、便宜合併可被

差許候間、各藩申談之上可伺出候事、

但徒場規則之儀ハ、追テ御達可有之事、

九一五 開拓次官黒田清隆ヲ欧州並清國ニ差遣ス

十一月十七日

開拓次官黒田清隆介ヲ欧州及ヒ清國ニ差遣ス、

九一五ノ一

開拓使士族元鹿見島

黒田源清隆

了介

中略

同年明治三年十一月十七日

一御用有之、歐羅巴並支那江被差遣候事同四年未六
月七日癸卯

九一五ノ二
十一月十七日

御沙汰書写

黒田開拓次官

御用有之、歐羅巴並ニ支那へ被差遣候事、

九一六 元武家華族東京住居仰付ラル

十一月二十日

旧武家華族ニ令シテ、悉ク東京ニ移住セシム、但シ其任

ニ赴ク者ハ妻子ヲ携帯スルヲ許ス、明年二月ニ至リ華族

ハ悉ク東ニ貫族ス、

明治3年(1870)

十一月廿日

御布告写

華族元武家之輩、自今東京住居被 仰付候、尤知事トシテ、地方官赴任ノ向、願之上妻子召連候儀ハ不苦候事、但無拋事故有之、即今移住難相成向ハ可願出候事、

九一七 京都府ニ李魯西人ヲ雇入、語学ヲ教授シ

伝習ヲ欲スル者ハ出願セシム

十一月二十日

京都府ニ李魯西人ヲ雇入、語学ヲ教授シ、伝習ヲ欲スル者ハ出願セシム、但シ諸藩士族モ望ノ者ハ、詮議ノ上之ヲ許ス、

〔第八百五十三〕十一月二十日(留守官)

〔頭註〕「五年太政官第二百十四号ニ依リ消滅」

各国御交際貿易ノ道相開ケ、広ク世界ノ知識ヲ被為求

候ニ就テハ、西洋諸種ノ学追々伝播可相成、其内第一

言語・算数等海外諸国ニ通スルコト、即今急務ニ付、

今般李魯西人リユウドルフ・レーマン京都府へ雇入、

佛・英・蘭・獨等ノ語学並数学令教授候条、当官管轄

華族以下致伝習度望ノ者ハ、当官へ可願出事、

但諸藩士族等モ当地詰合ノ向、伝習望ノ者ハ、其藩

邸ヨリ同府へ願出候得ハ、詮議ノ上可許事、

九一八 露国軍艦アルマ号鹿兒島ニ入港ス

十一月廿二日

露国軍艦アルマ号鹿兒島港ニ入ル、此日忠義病アリ、島津備後ヲシテ代ツテ訪問セシム、仍テ艦将等上陸シテ、製鉄所並火薬局ヲ巡覽ス、同廿八日ニ至リ拔錨ス、
九一八ノ 道島正亮日記十一月二十一日

魯西亞船入津、八拾間計ノ軍艦ニテ候ヨシ、鉄砲打方

有之、是非知事公へ可逢トノ事ニテ候ヨシ、御不例ニ

付キ、名代ニ重富(忠艦)殿備後被差越、礮器械所杯へ差越候

処、目ヲ驚カシ、是レ程ハアルマシク存居候段申タル

ヨシ、兵隊式百人位少モ立派ニハ無之、戎服杯モ別テ

魚末ニ有之候由、牛式疋其外被下候処、不足ノヤウニ

テ、又相望ミ候段モ風説有之候、

十一月廿八日ニ出帆イタシ候、

九一八ノ二 寺師宗道日記

十一月廿二日 晴

出席ス、今朝魯西亞軍艦入港ス、祝砲之式あり、

同 廿三日 晴

出席ス、今日十二時比重富公子乗付相成り、祝砲あり、今日魯人共集成館より火薬局拜見として参局之賦候処、遅方ニ相成り直ニ帰り候由にて、明日十時ニ可参入掛合相違候、暮時退出ス、

同 廿四日 晴

今朝魯人参局之筈にて早出席ス、四ツ時分入来ス、海軍總督・アトミラール・船將其外都合十二人也、此方ニは、權大参事大迫喜右衛門、書記伊地知喜次郎・郷田正之丞、大隊長野津七左衛門・篠原冬一郎・種子田左門・中村半次郎、其外三四人来ル、トンマシネ其外無残見ル、又火薬杯惣て見ル、無異論良品ヲ賞ス、今日同席中軍艦之見物ヲ願、ハツ後より一同差越候、艦名アルマ、總督之名ピルキンと云、百拇三門・十二拇四門あり、彼之士官按内にて船内ヲ見ル、馳走として水雷ヲ仕懸ケ為見候、火薬二斤入候由、又彼如火薬火具ヲ贈ル、大砲菓殊ニ奇也、夕時帰ル、艦は器械ヲ損シ修覆之為ト云、英より支那之香港江到由也、

九一九 南校外国教師ヲ傷ツケシ者ノ搜索ヲ達ス

十一月廿三日

大学南校外国教師リンケ及ヒタラスヲ、東京府神田街上ニ傷ツクル者アリ、府下並近傍地方等ニ令シテ、嚴ニ之ヲ搜索セシム、

九一九ノ一
第九百六十三 十一月二十四日(達) 東京府並近傍諸県

〔頭註〕四年太政官第六十一ヲ以テ知刑
昨廿三日夜於神田鍋町、南校御雇入之英国人二名及傷

害候者有之、府下嚴密御吟味相成候ニ付、其管内同様取締可致、猶府下遁逃之者等無油断可遂搜索候事、

九一九ノ二
第九百六十四 十一月廿四日(達) 官・華族

〔頭註〕同上
昨廿三日夜於神田鍋町、南校御雇入之英国人二名及傷

害候者有之候ニ付テハ、官・華族並ニ諸官員家人陪從之者等一々遂吟味、昨夜外出之者ハ行先等委詳取糺、疑敷儀有之候ヘハ、早々可申出、万一隱匿シ、後日発覚候ニ於テハ、主宰之越度急度可被及 御沙汰候条、此旨可相心得事、

九一九ノ三
第九百六十五 十一月二十四日(達) 諸藩

〔頭註〕同上

昨廿三日夜於神田鍋町、南校御雇入之英國人二名及傷害候者有之候ニ付テハ、諸藩士卒一々遂吟味、昨夜外出之者ハ行先等委詳取糺、疑敷儀有之候ヘハ、早々可申出、万一隱匿シ、後日發覺候ニ於テハ、長官之越度急度可被及 御沙汰候条、此旨可相心得事、

九一九/四

大久保利通日記

廿四日十一月

一新嘗祭ニ付休日、今朝副島入来、昨夜英國人開成所雇之教師逢暗殺、條公方江余昇殿、何者共不相分、不取敢公使江為挨拶條公・副島同行參ル、六字帰ル、

九一九/五

〔第八百七十五〕十一月二十六日(太政官)

諸藩

去廿三日夜、士族卒外出人名並行先・帰程刻限、一々取調、至急可申出候事、

九一九/六

〔第八百七十五〕十一月二十七日(太政官)

〔頭註〕四年太政官第百六十一ヲ以テ処刑

去廿三日夜、英國人ヲ刃傷候者有之、就テハ諸藩士族卒之内、藩邸内外ニ不拘、家塾取設居候者、塾生一々

遂吟味、同夜外出人名並行先・帰来刻限等、一々取調、至急可申出、万一不吟味ニテ他日發覺候ニ於テハ、師家之越度屹度可被及 御沙汰間、猶此旨モ嚴重可相達事、

【参照】

〔第百六十一〕三月二十九日(布)

去冬十一月廿三日夜、東京神田鍋町ニ於テ、英人ニ傷ケ候者有之、嚴密御搜索御召捕、今般別紙之通御処分ニ相成候、元来外国御交際ハ重大ノ儀ニ付、屢御布令相成候処、右様ノ次第有之候テハ、御政体ニ關係シ、御国辱ニモ相成候条、尚又府藩県管内末々迄心得違無之様取締可致事、

(別紙)

刑部省申渡

杵築藩卒

喜兵衛倅ニテ脱走致シ

山口幸太郎ト申立候

加藤龍吉

其方儀、關宿藩黒川友次郎同道日本橋辺通行ノ砌、大南校御雇教師英人リング外一人、婦人ヲ携士体ノ者

附添相越候ヲ見請、彼ヲ可打果旨及發言候ヨリ、友次郎致同意、同人俱々跡ヲ附參リ、神田鍋町ニ於テ、抜刀リングヘ為疵負候段、御国辱ニ相成候ヲモ不顧仕業、右始末不届ニ付、庶人ニ下シ絞罪申付ル、

鹿兒島藩士族

肥後壯七

其方儀、佐土原藩永田彌太郎外一人、一同神田鍋町通行之砌、杵築藩加藤龍吉外一人ニテ、大学南校御雇教師英人リング、ダラスヲ及刃傷候儀ニハ不心附、右英人狼狽ノ体ニテ逃參候機ニスレ合候ヨリ、俄ニ怒氣相発シ、追駈リングヲ及刃傷候事実ニ候ハ、其段有体可申立処、都テ一己ノ仕業ニ一旦申成罷在、追テ龍吉外一人、右ヲ白状ニ及ヒ候由承リ候節ニ至リ、右ニ携候儀ハ勿論、鍋町通行ノ覚無之杯、彼是言紛シ候段、御国辱ニ相成候ヲモ不顧仕業、右始末不届ニ付、庶人ニ下シ絞罪申付ル、

關宿藩士族

如虹倅ニテ脱走致シ候

黒川友次郎

其方儀、杵築藩加藤龍吉同道、日本橋辺通行ノ砌、大

学南校御雇教師英人ダラス外一人、婦人ヲ携士体ノ者附添相越候ヲ見請、彼ヲ可打果旨龍吉及發言候ニ付、致同意俱々跡ヲ附參リ、神田鍋町ニ於テ抜刀ダラスヘ為疵負候段、御国辱ニ相成候ヲモ不顧仕業、右始末不届ニ付、庶人ニ下シ准流十年申付ル、

【参照二】

三條實美公年譜

十一月二十三日、人アリ、南校教師ヲ神田街ニ傷ツク、英国教師リンク、タラスノ二人ヲ神田街上ニ傷ツクル者アリ、公三大久保利通・副島種臣ヲ従ヘ、英国公使館ニ抵リ之ヲ慰問シ、且ツ東京府下及ヒ傍近地方ニ令シ、嚴ニ犯人ヲ搜索セシム、

九二〇 吉井友實ヲ民部大丞ト為ス

十一月廿五日

吉井友實幸ヲ以テ、民部大丞ト為ス、
九二〇ノ一

鹿兒島県士族

吉井藤原友實

幸輔
徳春

明治 3 年(1870)

中略

同年^{明治三年}十一月廿三日

一願之趣被聞食、一等逆退被仰付候事、

同十一月廿五日

一依願任民部大丞、

以下略ス

九二〇ノ二

吉井三峰日記
友実

十一月廿五日

願ニ依テ民部大丞ニ転任ス、

九二一 伊東祐磨ヲ海軍少佐・龍驤艦副長ト為ス

十一月廿五日

伊東祐磨^郎ヲ以テ海軍少佐ト為シ、正七位ニ叙シ、龍驤

艦副長ト為ス、

鹿兒島県士族

伊東祐磨

二一郎

天保五年甲午八月生

中略

同年^{明治三年}庚午十一月廿五日

一任海軍少佐、

同日

一叙正七位、

同日

一龍驤艦副艦長被仰付候事、

以下略ス

九二二 勅使岩倉具視ヲ薩長ニ藩ニ遣シ、参議木

戸・大久保ヲ各其藩ニ遣ス

十一月廿五日

勅シテ、大納言岩倉具視ヲ鹿兒島・山口ニ藩ニ遣シ、手

詔シテ、島津久光・毛利敬親ヲ召シ、大政ヲ翼賛セシム

具視時ニ大坂ニ在リ、十二、月三日京都ニ在テ勅ヲ奉ス、又参議木戸孝允ヲ山口藩ニ、大久保

利通ヲ鹿兒島藩ニ遣シ、各其藩知事ニ説カシムル所アリ

明年慶藩ノ事蓋シ此ニ基ス

九二二ノ一

大久保利通日記

略〇上

廿三日〇十月

一九字參朝、二字退出、今日於 御前右大臣殿御伝ヲ以、

木戸ト共ニ各帰藩之 命ヲ奉ス、老公○久光被為召候

勅諭ニテ候、即今不容易形勢、内外御大事ニ付、厚

御依頼被為遊候ニ付、是非上京云々、

略○中

廿八日

一不參、今朝條公江參上、万事相伺帰ル、得能・吉井・

松方・黒田同断、其外来客多シ、

廿九日

一今晚木戸同行、九字馬車ヲ發シ、二字横濱着、四字ア

ルコニヤ乗船、五字開帆、

三十日

一航海、

十二月朔日

一十二字兵庫着、直様川蒸汽ニ乗込、七字頃着阪、伊丹

七へ旅宿、

二日

一今朝石原直子入来、六字川蒸汽乗船、九字出帆、七字

伏見着、大山子入来、登川ノ風景依々交有感、

寒氣徹衣雨乱飛 天王山色望依々 誰知一夜筵窓夢

指川流語是非

三日

一 九字發伏見、十一字京着、見東山有感、

晝發伏城入洛陽 孤筇踏破滿塘霜 水間有歎君知否

重見東山黛色蒼

晝後岩公江參上、新納子入来、三本樹吉田屋へ旅宿、

四日

一 村田新八子入来、木戸子入来、今夕平田子・西郷子・

小子等入来、

五日

一 二字木戸子入来、同行岩公江參昇、宮内ノ一事件御談

有之、

六日

一 十字新納子入来、訪木戸子、

七日

一 今日辞京、八字發途、十字頃伏見着、大山子入来、十

一字小蒸汽ニ乗ル、解帆五字、大坂へ着、三幸庵旅宿、

今夕税所子入来、

八日

一今朝吉井民部権大丞入来ニ付、御雇船ノ事ヲ談ス、今日碁打、國分子入来、欺テ謙蔵ト碁ヲ打シトキ誠ニ一興ナリ、

九日

一今日坂府へ出席、船ノ事ヲ談ス、知府事ヨリ云々示談有之、泉屋與兵衛・中村某之碁客入来、今日ハ一新ノ祝日ニテ、大平ニテ祝酒ヲ催ス、

十日

一今日府ヨリ重野子江訪、囲碁ノ約有ルナリ、囲碁客臨席、税所子入来、同行本船ニテ大平所へ參ル、

十一日

一今朝木戸子・川村子・松方子入来、木戸子・松方同行、岩公江參上、種々御用有之、帰ニ木戸子・松方同行、造幣寮ヲ見分ス、精巧驚目、同道帰ル、旅宿ニ伴フ、
一囲碁、税所子入来ニテ、木戸帰テ後、松方相共ニ大平へ行、

十二日

一十字ヨリ岩公へ參上、兵部省へ出席、練兵ノ見分有之、城内病院・兵学寮等巡覽、二字引取り、今日碁客吉原・原等入来、五代・重野等入来、

十三日

一二字ヨリ小松君、夕日岡墓參、大平所へ參ル、國女參ル、
一囲碁、

十四日

一今朝外務省へ參ル、岩公其外相会ス、今日乗船ノ筈ニ候処、風波悪敷不相調、大平所迄歸、

十五日

一今五時相供シ運上所へ至ル、川村・山縣両士相揃、岩公共ニ小蒸汽ヨリ川口本船へ乗組、十字頃相發ス、今夕三字頃ヨリ多都津へ碇泊、

十六日

一^欠字多都津ヲ發ス、海上平穩、

十七日

一東洋ニ入、終日航海、

十八日

一鹿兒島着船、直ニ
一勅使御揚陸、御旅館客屋、上陸後藩庁ニ出頭、知事公ニ謁ス、次ニ二丸公江謁ス、川村同行帰宿、今夕類家客来多シ、

九三ノ二

鹿兒島具士族

大久保利通

一蔵

中略

同年^{明治三年}十一月廿五日

一御用有之、鹿兒島藩へ被差遣候事、

同月三十日

一日田県騒擾ニ付、鎮撫筋之儀岩倉大納言申談、指揮可

有之事、

以下略ス

九三ノ三

十一月廿五日

御沙汰書写

大久保参議

御用有之、鹿兒島藩へ被差遣候事、

九三ノ四

三條實美公年譜

略○上

十一月二十五日、大納言岩倉具視ヲ鹿兒島・山口二藩

ニ遣シ、勅シテ、毛利敬親・島津久光ヲ召ス、

是ヨリ先キ、諸藩主既ニ版籍ヲ還納シ、華族ト称シ

東京府ニ貫属スト雖モ、皆知藩事ノ職ニ居リ、旧封

土ヲ管シ、旧臣民ニ臨ム、其実依然タル封建ニシテ、

唯名義ノ異ナルノミ、因襲ノ久シキ、其士民亦多ク

ハ、知藩事アルヲ知テ朝廷アルヲ知ラス、以テ尾大

掉ハサルノ弊ナキ能ハス、

朝廷屢毛利敬親・島津久光ヲ召シ、大政ヲ翊賛セシ

メ、基本ヲ鞏定シ、其弊ヲ矯正セント欲スレトモ、

機会未タ至ラス、公深ク之ヲ憂虞シ、常ニ岩倉具視

ト謀リ、救済ノ策ヲ講ス、会大久保利通吉井友實等

ト相謀リ、鹿兒島藩ノ全力ヲ拏ケ、一層根本ニ尽ス

ヘキノ議ヲ建テ、之ヲ具視ニ白ス、具視曰 朝権ノ

振張此一举ニ在リ、願フニ事誠ニ重大、容易ニ行ハ

レ難キヲ恐ル、ト雖トモ、方今海外各国虎視狼顧ノ

間ニ対峙スルノ際、茲ニ出ルノ外復タ他策アルコト

ナシ、此事ニシテ成ラハ、則チ絶世ノ大勲偉蹟、独

リ鹿兒島藩ノ芳名ヲ千載ニ赫耀スルノミナラス、

皇国ノ慶祥孰レカ此ヨリ大ナラン、請フ、卿畢生ノ

力ヲ致セヨ、余亦鞠躬事ニ従ハント、利通悦ヒ公ニ

稟ス、公亦大ニ之ヲ善トシ、木戸孝允ニ告ク、孝允ノ素志亦茲ニ在リ、因テ此機ニ投シ、山口藩ノ全力ヲ致サシメント答フ、是ニ於テ議略定マリ、將ニ上奏シ、具視内旨ヲ奉シ、孝允・利通ト共ニ鹿兒島・山口二藩ニ赴カントス、（マツ）会、鹿兒島藩不穩ノ説アリ、遂ニ果サス、十一月具視暇ヲ乞ヒ疾ヲ洛北岩倉村ノ別業ニ養フ、彈正少弼黒田清綱鹿兒島ヨリ来リ、藩情一定ノ状ヲ陳ス、具視大ニ喜ヒ、公ニ移書シテ事情ヲ報シ、且歸東ノ命ヲ請ヒ、更ニ侍臣原保太郎ヲ遣シ、公ニ就テ具申セシム、清綱又具視ノ旨ヲ承ケ、書ヲ馳セ大久保利通ニ告ク、公利通ニ命シ、復書シテ具視ヲシテ京師ニ駐マリ、再報ヲ待タシム、利通ノ書ニ曰ク、

謹啓仕候、寒氣相増候処、乍恐
聖上益御機嫌能被為渡、御同慶奉存候、
殿下弥御安康被遊御座、奉大賀候、

一黒田少弼ヨリ一封昨日到来仕一覽候処、国元情実モ相分、兼テ信吾一封モ参リ、先々宜敷模様之由、大幸之至ニ御座候、就テハ殿下へ拜謁事情申上候処、早々御帰府被為在候様御沙汰有之候様御托之

趣ニテ、黒田ヨリ細々申越候間、則今朝條公へ篤ト御内談仕候処、別テ御安心被為遊候、右之運ニ候得ハ、御東上之上ト申候テハ、大ニ時日モ遷延可致候ニ付、大体ハ兼テ御評議モ相成通、殿下段々御趣意モ被為在、是非御東上御評議可被成ホトノ事モ、有之間敷ト思召候ニ付、兵庫ヨリ御雇船ニテ御西下被下候様有之可然、左候得ハ、小生モ西上被仰付、不日発船仕候様、可被成下トノ御事ニ御座候、乍去黒田少弼明日迄ニ着船可仕候ニ付、猶巨細之情実、且殿下御談之次第御聞取、其上是非御東上ナクテ不叶御都合モ候ハ、其節御東上之御沙汰相成可然、夫迄文ケノ処ニテ、先條公文前条通御決定被成置、小臣進退ハ、黒田着スルト直ニ御沙汰可被成下トノ御事ニ御座候、小臣ニモ熟考仕候処、御東上之上、又々殿下御進退被為在候様ニテハ、大ニ宜有之間敷ト奉存候、外ニ御高慮被為在候哉、折角黒田相待居候、若別段相替候御談之次第無御座、何分ニモ一応御東上旁御談之上ト申文之御事ニ候ハ、必小臣西上可仕候ニ付、左様御含置可被下候、幸廿日頃飛脚船出帆之由、

右ヨリ乗船仕候得ハ、廿三四日迄ニハ着京可仕候、
兎角機會ヲ不失処肝要ニ奉存候ニ付、何卒此度ハ、
御煩勞被成下候様奉拜願候次第ニ御座候、

右要用ノミ奉申上度如此御座候、何モ不遠拜謁、委
キ事可奉申上候、恐惶々々、

十一月十五日

利通

岩倉公

尚々委細ハ條公ヨリ被仰越候段承候ニ付、大略
文奉申上候、廣澤モ禄制之方ニテ弥被仰附候筋
ニ御座候、必同時頃発船可仕ト奉存候、

既ニシテ保太郎・清綱相踵テ東京ニ来リ、共ニ公ニ
謁シ、詳カニ事情ヲ具ス、公乃チ議ヲ定メ、具状シ
テ大納言岩倉具視ヲシテ、鹿兒島・山口ニ藩ニ使セ
シメンコトヲ奏ス、

天皇之ヲ制可シ、二十五日、侍従高辻修長ヲ京師ニ
差遣シ、勅旨ヲ具視ニ伝ヘシメ、又參議木戸孝允・
大久保利通ヲ御前ニ召ス、公内旨ヲ伝テ曰ク、
方今形勢甚容易ナラス、敬親・久光ニ深く依頼セラ
ル、所ナリ、今之ヲシテ上京、大政ヲ贊翊セント

ス、汝二人此旨ヲ体シ、各為メニ尽セヨト、即チ孝
允ヲ山口藩ニ、利通ヲ鹿兒島藩ニ差遣ス、此間ノ事
情、具視利通ト往復書中ニ具スルヲ以テ、概要ヲ左
ニ掲ク、其利通ニ贈ル書ニ曰ク、

閏月十九日・十一月四日等之御書正ニ落手、令披
見候、

皇上益御機嫌能被為渡、

中宮御同様恭悦此事ニ奉存候、各位始百官無異御
奉職之事欣然、小生ニも同容体無事消光、御安心
可給候、御用繁折柄、実ニ令恐怖候得共、今暫時
御憐愍願上候事ニ候、

一 吉井ヨリ申入、兵庫臬之事、

一 木場之事、

一 耶蘇復土之事、

一 兩度愚書御一見之旨忝存候、

一 官禄減削一件云々、

一 工部省ニ御評議改リ之事、

一 井上造幣正云々之事此人與ニ可
被任候事

一 西京改革、廣澤西上ノ由、小生滞在中ニ候ハ、

急渡談し可申存候、

一新納人体云々忝存候、

右御報書之旨夫々令承知候、巨細御請可申入候処、
外事ハ扱置、左之事件一途ニ御内談申入候、

一京攝間民情、関西風評在官取沙汰種々有之候得共、
万事差置速ニ御内決有之度、巨細書取、態々家来
差立條公江及懇談ニ候、別事ニも無之、黒田小弼態

と西上小生出会、薩国情内外色々承り候所、一時
分凡世評ノ如キ勢ニも有之シカ、固陋諸藩士も頻
リニ讒ヲ入候カ、兎角平常ナラヌ勢ヒニ御座候所、
当節追々氷解、当節ニテハ詰リ有名人々輩下參着、
為 朝家憤発、報國ノ正論ニ到リ候旨、全クハ西
郷新吾・黒田小弼帰國、兵隊長等之尽力、其元悉皆
足下ノ肺肝ニ出ル所ト、為天下欣然此事ニ候、附
てハ黒田口氣愚考候所、右ハ内情ニテ、今自ラ進
ンテ出ルト申次第ニハ立至リ難クカノ由、是ハ今
日迄ノ次第ト、大隅守殿西郷吉之助ノ間聊都合有
之カノ趣ニテ、條公小生ノ中 勅使タラハ可然云
々アリ、定て黒田より何も御承知と存候、右ニ付
小生見込元々一昨年来隅州・大膳両老卿、西郷・
大久保・木戸・廣澤等、今四五年ハ、真ニ

朝廷柱石兩輪タランコト、頻リニ申立候得共、東
西藩各功罪共夫々御所置之事、何ツ迄も薩長ト云
ナカレト、公論不得止今日ニ立到リ候所、今度黒
田ニ中外事実承り、実ニ

皇國ノ大幸不可言事と存候、兩國老卿・西郷等同
シク

朝廷ニ立チ、同心合力補助シ奉り候へハ、何事カ
行レザラン、真ニ内國一致、是ヨリ海外ニ当ラセ
ラルヘク、依之速ニ條公西下ノ事及密談候タメ、
家来一人同公江差出し候、若シ公如何ナラハ、小
生病中候得共、此事ニ至てハ、死ス共海陸速ニ發
途、兩國江発向誓て成功セントス、ナラズンハ再
ヒ歸来セサル決心迄ナリ、実ニ此機会ヲ失フ可ラ
ズト細々懇々條公江談シ申候、小生帰東も、廣澤・
香川等西上都合も有之、二十日三十日延引ニても、
御命次第候得とも前案事天下ノ大事ニシテ、今後
ノ義此一举ニ可有之カ、今度ハ秘中ノ秘ニシテ、
真ニ條公小生兩人限リ位ニテ、小生帰東翌日位ニ、
條公奉命發途カ、小生同断カ被

仰付候扱有之度、実ニ意外ニ可出事と存候、左候

へハ御改革向もソコノニテ、何分ニモ大事ハ各朝廷ニ立チ候上、同心戮力大ニナス物有ソカ、諸両国人々奉命、仮令ハ

両老公・西郷顧問、尾州・越前・鍋嶋・土州等麿香間国事云々等ニテ、政令出ル時ハ、亦憂フル所ナク存候、其上合議ニ不至ル時ハ、天卜言迄ナリ、何カハ扱置、此一事貫通セズンハ、小生帰東ノ義も詮ナク、寛々保養と存候、若シ條公御内談候ハ、御尽力可給候、尤先日御承知之通り、木戸丈ハ小生内々云々も可然と申居候事、旁極秘ニシテ本条速ニ被決候様、條公へ申入候事ニ候、能々御心得置可給候、

右極内々申入置候、小生進退ハ條公御答次第ニ可仕存候、家来事引返シ候筈ニ付、小事ハケ条書ヲ以て、家来江御申聞被下候テよろしく候、決て漏洩等有之事ハ無之候、仍早々如此候也、

十一月十三日

具視

大久保参議殿

尚々、本文之次第、吳々も速ニ被行度存候事ニ候得とも、御見込も有之、来春之方ト申事ニ候

ハ、又其心得候間、内々御示シ可給候也、

大久保利謙氏所藏本にて校訂

利通ノ復書ニ曰ク、

謹啓仕候、益御機嫌克被為遊御座奉大慶候、

一御家来原保太郎子便ヨリ御懇書並御伝言之趣、

巨細拝承仕候、然処黒田少弼到着、猶委曲之情実

モ相分、且殿下拜謁御談之趣モ相分、去ル十五日、

急飛ヲ以申上候通、條公御内決東京へ御往復ナシ

ニ、殿下御発程御西下候処ニ、凡御治定候処、猶

原氏ヨリ細々御旨趣被仰越候ニ付、尚又條公モ御

勘考被為在、木戸兩人ニテ遂細議、弥前条通御決

定ニ相願候次第ニ御座候、委事ハ條公御回答可被

為在ト奉存候、定テ彼是当地之事モ御案ニテ、是

非一応御帰東之上、委曲御談有之、然シテ御発程

ノ御運相成候方、可然トノ思召ニテ候半ト奉察候

得共、猶此方別議モ無之、且御帰東直ニ御動キ候

得ハ、必余計之物議モ来シ候ハ案中故、旁之処ヲ

以右相願候ニ付、左様御承知可被下候、

一御出張先ヨリ御下向有之候得ハ、兩藩へ御達命、名義之処ハ

宸翰ヲ以テ、殿下へ侍從刃御使ニテ被仰付候御運、
且又條公ヨリ委曲之事、御添書ニテ御伝言有之、
此一條ト申ハ、今日ニ起リ候事ニ無之、全体
叡慮此ニ被為

在、兼テ御内評モ有之、

殿下御持論ハ勿論之事ニ候間、別段御帰東御拜命
ニテ御発シ無之候テハ、相濟ヌト申筋ニ無之、大
体之御旨趣ヲ以、御達之名義サへ相立候得ハ、其
余臨機応変之取捨、御委任ニテ可然トノ御事ニ御
座候、

一木戸ニモ粗條公ヨリ御咄有之、同人ニモ是非一応
帰藩、内輪尽力、昨年ノ旨趣ヲ貫キ、旧藩へ合体
共力之辺尽力可致旨相談有之、大ニ可然ト存候ニ
付、同人へ万端談合仕候次第ニ御座候、仍テ小子
同様被仰付、発程ハ少々オクレ候積リニ御座候、
且又山縣少輔兼テ西郷へ面会、是非同人出京ヲ進
メ候内存有之、河村ナトへ屢談モ有之由、就テハ
同人参リクレ候得ハ、信吾トハ別魂ニモ有之、内
外之懇談モ相調、薩長之事ニオイテモ、大ニ都合
ヨロシクト存候ニ付、河村ヨリ内談ニテ、今般同

時ニ参リクレ候様相咄、且今朝木戸へモ小臣ヨリ
相談仕候処、兼テ其事ハ木戸モ談合置候事ニテ、
大ニ可然ト申事ニ御座候、仍テ河村・山縣兩人ハ
兵部省ノ御用ヲ以テ、大坂出張被仰付候テ、夫ヨ
リ下向之筋ニ取計候方、可然ト談合仕候、暫時之
処、兵部之事ハ差支無御座候、

一小臣ニハ、来二十四五日頃、船便ヨリ西上之心得
ニ御座候、廣澤モ凡同時ニ可相成欵ト奉存候、左
候得ハ山縣・河村モ同時ニ可相成、兼テ條公ニモ、
兵庫ヨリ御雇船ニテ御発シ之方、可然ト之御沙汰
ニ御座候ニ付、左様御含被成下度、期限ハ直ニト
申訳ニハ至リ申マシク、廣澤モ着ニ候得ハ、禄制
之事モ大抵ハ御談置無之テハ相濟申マシク、其辺
ハ預メ御定算被成下置候様奉願候、可成早目之方
ニ至願仕候、

右尊酬奉申上度、荒増行奉申上候、條公ヨリ委曲
可被仰越候ニ付、余ハ略筆仕候、何モ不日拜謁可奉
伺候、恐惶百拜、

十一月十九日認

利通

岩倉公閣下

具視勅命ヲ奉シ鹿兒島藩ニ下向ノ事

是ヨリ先キ、藩制ヲ頒布シ、郡県ノ体ヲ成スト雖、知藩事ハ旧藩主ヲ以テ之ニ任シ、旧封土ヲ管轄シ、旧士民ヲ撫安シ、藩名モ亦依然トシテ旧ノ如ク、其実封建ニ異ナルコト無シ、是ヲ以テ、諸藩管轄ノ士民ハ猶兩端ヲ持シ、尾大不掉ノ患アリ、具視大ニ之ヲ憂ヒ、三條實美ト相議シ、漸次郡県ノ実蹟ヲ挙げ、兵刑租税ノ權ヲ朝廷ニ収メ、以テ全国人心ノ帰嚮ヲ一定センコトヲ計画ス、会マ大久保利通鹿兒島藩ノ全力ヲ挙げテ、朝權確立ノ根本ニ尽サントノ議ヲ建テ、之ヲ具視ニ白ス、具視曰ク、朝權ヲ確立スルハ此計ヨリ善キハ莫シ、事誠ニ重大ニシテ、容易ニ行ハレ難キノ恐アリ、然レトモ欧米列國虎視眈々ノ間ニ峙立シ、皇國ノ富強ヲ謀ラント欲セハ、此ニ出ツルノ外復他策ナシ、此計ニシテ果シテ行フコトヲ得ハ、誠ニ皇國ノ大幸ナリ、請フ、御畢生ノ力ヲ輸セ、予モ亦尽瘁従事セント欲ス、而ルニ頃日流言アリ、三條ハ長藩ニ依頼シテ、其位ヲ固ムルコトヲ謀リ、岩倉ハ薩藩ニ阿從シテ、専ラ其權ヲ弄スト、又大久保木戸ト隙アリ、各党ヲ樹テ類ヲ援キ、

互ニ藩力ヲ恃ンテ朝議ヲ左右スト、此ノ如ク朝野ノ人心、猜疑ヲ懷クノ時ニ方リ、非常ノ事ヲ行ハント欲スルニハ、卿ト木戸ト其意見ヲ合シ、其議論ヲ一ニスルニ非ラサレハ、恐ラクハ不平ノ徒倍ス、離間ヲ行フコトヲ謀ラン、是レ予カ杞憂ニ堪ヘサル所ナリ、利通乃チ之ヲ木戸孝允ニ商ルニ、前事ヲ以テス、孝允ノ素志モ亦此ニ在ルヲ以テ、山口藩ヲシテ其全力ヲ輸サシメシコトヲ誓フ、是ニ於テ、具視・實美・利通・孝允協商密議シ、計画略ホ定マル、会マ鹿兒島藩物情不穩ノ説アリ、故ヲ以テ事姑ク寝ム、十一月具視病ヲ養テ京都ニ在リ、黒田清綱鹿兒島ヨリ至リ、具視ニ謁シテ曰ク、鹿兒島ニ在ル有志ノ士ハ、窃ニ力ヲ朝權確立ニ尽サンコトヲ願ヘリ、具視大ニ悦ヒ、從土原保太郎ヲ東京ニ遣リ、實美ニ謀ルニ、勅使ヲ鹿兒島・山口二藩ニ差遣セシメンコトヲ以テス、此時實美已ニ清綱ノ書ヲ獲テ、鹿兒島藩情ヲ知ルヲ以テ、手書ヲ具視ニ寄セテ、具視カ勅命ヲ奉シ、鹿兒島ニ下向センコトヲ乞フ、其文ニ曰ク、

嚴寒之節、主上・皇后益御機嫌能被為渡、恭悅奉存候、尊公弥御清康大賀候、御容体如何御自愛專祈候、

然ハ黒田少弼・西郷信吾ヨリ書状到来、鹿兒島藩情
委細申越候、定テ少弼ヨリ御聞ニ有之候間不贅、兼
テ御内談モ有之候通、甚御苦勞御儀ニ候得共、鹿兒
島藩へ御出張御尽力給候様希入候、何レ大久保參議
不日上京可仕候間、夫迄之処ハ西京ニ御滞在、都合
次第大坂ヨリ御上船、直ニ御西下有之度候、自然行
違御東下ニ相成候テハ如何ト、一筆御報知迄如此候、
何レ委細ハ大久保へ相託シ可申ト閣筆候、西京改革
之儀ハ矢張廣澤へ被仰付、是亦十八日之便船ニテ上
京可致候、此段御承知可被下候、先ハ勿々要用而已
如此候、当地相替候儀無之、総テ静謐御安心可給候
也、

十一月十五日

二伸、鹿兒島藩之儀、大久保帰藩之儀モ木戸へ談
合、夫々異存無之候、是亦御安慮可給候、大乱書
高免可給候、

實美

岩倉大納言殿

内用親披

實美又手書ヲ保太郎ニ託シテ、之ヲ具視ニ致サシム、

其文ニ曰ク、

嚴寒相募候処、至尊・皇后益御機嫌能被為涉、奉万
賀候、尊公弥御清康大賀存候、御不例如何、猶御保護
專祈候、然ハ此般御家扶原氏上京、御伝言之趣縷々
拝承、御附与之尊翰薰誦仕候、段々御念示謹承仕候、
一々御答不申上粗漏失敬之段、偏御容赦奉願候、扱
鹿兒島藩之儀御家扶ヨリ委細拝承、御高論御尤之御
儀敬服御同意仕候、実ニ彼藩之情実頗不堪杞憂候処、
稍好機會ニ赴キ候段、誠國家之大幸ト存候、猶委細
原氏へ申陳候間、御直聴可給候、就テハ尊公別テ御
苦勞奉存候得共、両藩へ御下向被仰付候間、何卒為
皇国御尽力之程偏奉依頼候、此節之事尤機密、国家
安危之処ニモ関係ト存候、別テ御丹誠偏奉祈候、何
レ大久保參議不日上京可仕候間、其上至急御下坂御
発向被成、年内ニハ御帰東相成候様仕度存候、当地
先々相替リ候儀無之、御安心可給候、先ハ原氏へ委
細口頭相託可申ト閣筆、粗札乱書偏御海怨奉願候、
謹言、

十一月廿日

實美

岩倉殿

二伸、時下嚴寒御自愛專要存候、縷々尊答可申上之処、殊之外多忙、其上懶惰執筆不行届、失敬之段、御断申上候也、

猶以兼テ御心配有之候御種痘之儀、漸御許容、不日御試可被遊旨被仰出、大ニ安心仕候間、御休慮可被下候、従来御配慮之事ニ付、一寸此段申上候、三白、山中幽間之地御保養頗ル御浦山敷存候、暫之御事ナカラ精々御加養專祈候、

「附註」勅使ヲ鹿兒島藩ニ下向セシムルノ事情ハ、具視力大久保利通ト往復ノ書ニ於テ、其概要ヲ見ルニ足ルヲ以テ、茲ニ之ヲ附載ス、具視ノ手翰ニ曰ク、

〔番号九二二ノ四（八一八頁）と同文により削除〕

又一通ニ曰ク、

兩京御静謐恭悦、各位御安全御奉職欣然候、扱十四日便船家米原保太郎差立、十二日附書状持參、先貴所江出会云々段々申合候件々、今程ハ定テ御承知被下候事と存候、少々申落シ候義有之、更ニ早便條公迄呈書候序一筆申入候、黒田ニも御出会、何も御承知と存候、抑兩老卿召之事、小生ニハ実ニ天下ノ大事此等と存候間、是非々々速ニ被行度懇禱此事ニ候、全ク新吾

等始メよほと尽力ト存候ニ付、此機ニ投シ一日も早く御発シ有之度、條公返事次第帰東心得也、若シ臣ニ命ラレ候ハ、水火も不避所ニシテ帰府、翌日ニても可令航海存候事ニ候、廣澤西上、香川始メ禄制之事ニテ西下、夫々小生可及内談、三卿来示も候間、此一件他人ニ被命力、又来春ト申様之事ニ候ヘハ、元より今暫時可令滞在候得共、此一事ハ速ニ御運ヒ有之、世人絶て不知所ニテ、意表ニ御発シ有之度、只管懇願之事ニ候、右ニ付足下ハ勿論、木戸丈ハ御談シ無之候てハ、所詮被行間敷と、更ニ條公へ申入候事ニ候、其上誰ニもセヨ、

勅使として参向候砌ハ、長ニテ木戸或ハ廣澤、薩ニテハ足下或ハ黒田判官被差添候方、可然と存候事ニ候、是も申入試候事ニ候、附てハ兎角嘉右衛門帰東之事也、足下條公江万御内談御扶ケ無之テハ、此事不行ンカト苦慮候、何カハ扱置、此事速ニ被行候ハ、天下ノ事憂ルニ不足と存候条、吳々宜敷御配慮可給候、仍早々如此候也、

十一月十五日

具視

大久保殿

尚々、カカル重事若年家来原差出候事、定て卒ル
ト御不審之程令恐怖候得共、如何とも天下ノ幸不

幸ニ係り候義黒田話、此上ナキ機会と存候上、愚
考候得は、小生帰東ノ上示談候時ハ、只々貴所と
申合候様而已ニ相成り、小生本意も不貫通、旁右
取計り候事ニ候、乍去漏洩ノ憂ハ誓て無之、右ハ

御安心可給候、

須坂藩丸山之事杯、大史亦小史カニ定て被召出候事と存候、
得と田中迄申置、足下江示談ノ筈ニ候也、

十一月十五日

従北山

大久保参議殿

具視

平安至急

大久保利通ノ手翰ニ曰ク、

〔番号九二二ノ四(八一七頁)と同文により削除〕

又利通カ手翰ニ曰ク、

〔番号九二二ノ四(八二〇頁)と同文により削除〕

九二二ノ六

岩倉公實記

略上

此^{〇庚午}日利通東京ヨリ至り、具視ニ謁シテ實美ノ手
書ヲ伝フ、其文ニ曰ク、

嚴寒之節、主上・皇后益御機嫌克被為渡、恐悦奉存
候、尊台倍御勝常大賀候、然ハ此般鹿兒島・山口兩
藩へ、御内使トシテ御発向被仰付候条、誠御重任御
苦勞奉存候得共、国家之大事ニモ關係係仕候儀ニ付、
御精誠被為尽、御旨趣貫徹候様御尽力奉祈候、誠此般
之儀ハ、是非貫徹不仕候テハ、御威令も不相立而已
ナラス、兩藩之臣分も不相濟儀ニ付、成否頗皇權ニ関
係仕候儀ニ付、申も愚ニ候得共、尤上京之上ハ、麝
香間ニ数々出勤、大政ニ参預、納言同様之心得タル
可ク旨、被仰附候方ト存候、唯虚飾ニ名聞ニ上京被
仰附御実意不貫徹候てハ、必ス失望之事ニモ可相成
ト憂慮仕候間、上京之上ハ屹度大任を負はせられ候
様無之てハ、不可然ト存候、猶又薩藩も上京之上、
矢張廟堂之國論、世間之公論ニ齟齬、怏々不楽シテ、
帰国之様ナル事ニ立至り候てハ、一層之大事ニも相
成候間、今般上京候へハ必ラス兩藩一致之論ニ合シ、
朝廷ト同体之論ニ帰着候様、屹度國論ヲ定メ上京候
様、御尽力肝要之事ト奉存候、此辺ハ木戸ニも深心

配仕、尽力致候合ト察申候間、同人とも篤ク御謀リ

被遊候へハ、可然ト愚考仕候、実ニ此度ハ臣相之大

臣御下向ニテ、尚貫徹之場ニ至リ不申てハ、実ニ不

安次第ニ付、是非奉命出府、從來紛紜之情も氷積、

天下之疑団を解き、全国之方向一定不動モノニ至リ

候様、為皇国祈望只此事ニ御座候、書不尽意、加之

鈍筆不任意遺憾之至ニ候得共、如此事ハ両士へも申

合候事不相成、從來御相談申候末之儀ニ付、万御諒

察可給候、先は要用拜啓如此御座候、

一 外國人暗殺一件頗困難、心痛此事ニ御座候、委細大

久保・木戸より御直聽可相成、贅言不仕候、

一 楠廟へ御奉劍之儀ハ、何れ来春にても勅使被差遣候

ハ、可然ト存候間、先此度ハ御見合之方ニ仕候、

此段御承知可給候、

一 兩藩祖先へ賜候御劍ハ、新刀ニテ頗粗相、却て御不

外聞とも存候得共、先御廻申候、猶御考之上兎も角

も時宜次第御取計可給候、此事大久保・木戸へハ、

未何トモ不申入候事、

前文匆卒相認、頗乱雑之書体失敬御海恕奉仰候、謹

言、

十一月廿七日

實美

岩倉大納言殿

二 伸、時下嚴寒御自愛專祈候也、

三 白、木戸ハ直様山口藩へ立越候欵、薩州へ御同

行仕候欵、兎も角可然御談可給候也、

別翰ニ曰ク、

副啓、兩藩へ御内使、誠ニ御大任御苦勞ハ勿論候、

御配慮不少儀ト恐察存候、偏御尽力企望仕候、実ニ

此度之一件、成否頗關係スル所不輕候間、申も愚ニ

候得共、大久保とも厚御談合、是非奉命出府ハ勿論、

出府之上朝論ニ合シ、世間之公論ニ齟齬不仕、真ニ

合一ニ帰着候様無之てハ、実ニ今般被召候御趣意も

不相立、却て多少之疑惑ヲ醸シ候間、予メ其辺御極

論之上、速ニ上京有之候様致度、自然先々出府之上

ハ、兎も角も可成ト云ふ様ナル事ニテ、出府之上、

矢張依然タル旧之如き国論ニテハ、実ニ一層之事ト

存候、此度御内使之儀、異論之者ハ無之候得共、成

否如何頗懸念之人も有之候間、必成功無之てハ、天

下之向背ニも關係候事と苦心仕候、御諒知可被下候、

一 官祿之事、段々議論紛出、遂ニ変して祿税ノ論ニ

明治3年(1870)

帰着仕候、即書類御覽ニ入候、御賢慮御答示希入候、於下官も異論ハ無之候、併稅歛之義ハ物議も不少事ニ付、唯緩急如何ト存候計ニ御座候、猶大久保・木戸より御聴可給候、

十一月二十七日

實美

岩倉殿

略ス

九二三 川村純義ニ大坂出張ヲ命セラル

十一月廿七日

川村純義ニ大坂出張ヲ命セラル、

鹿兒島県士族

川村純義

与十郎

天保十一年庚子正月生

中略

同年^{明治}十一月廿五日

一御用有之、大坂出張被仰付候事、

以下略ス

^采「内閣公文録ニハ、任命同廿七日ニ載ス」

【参照一】

御用有之、大坂出張被仰付候事、

各通

山縣兵部少輔
河村兵部大丞

庚午十一月廿七日

太政官

【参照二】

河村兵部大丞御用御座候ニ付、大坂表出張被仰付候處、海軍創業之儀ニ付、来月八日頃迄、横濱滞在ヨリ大坂表江罷越候間、此段御届申上置候也、

庚午十一月廿八日

兵部省

弁官

御中

【参照三】

山縣少輔・河村大丞大坂出張被仰付候處、昨夕出発仕候間、此段御届申出候、依て別て御人少に相成、今日も已ニ参朝可仕筈之処、前文ニ從ひ卿輔とも御用留ニ付、出頭相成かね候間、是又御届申出候也、

庚午十一月廿九日

兵部省

弁官

御中

九二四 中島四郎ヲ龍驤艦艦長ニ、伊東祐磨ヲ同

副艦長ニ任ス

十一月廿七日

中島四郎ヲ海軍中佐ニ任シ、從六位ニ叙シ、龍驤艦艦長ニ、伊東祐磨^二ヲ海軍少佐ニ任シ、正七位ニ叙シ、同上

副艦長ヲ命ゼラル、

九二四^一

先般山口藩川野又十郎義、龍驤艦艦長ニ御登庸相成候様申出仕置候処、評議之筋有之、一先御取消被下度、

就テハ左之人名江右艦長被仰付候様、早々其御沙汰被

下度、此段更ニ申出仕候也、

庚午十一月十八日

兵部省

弁官

御中

甲鉄艦艦長

中島四郎

別紙ニ致ス

九二四^二

中島四郎・赤塚太郎儀被

任海軍中佐、伊東二郎儀被任海軍少佐、龍驤艦副艦長

被 仰付候間、為心得此段申入候也、

庚午十一月廿七日

弁官

兵部省

御中

九二四^三

任海軍中佐

中島四郎

右

宣下候事、

庚午十一月廿七日

大政官

九二四^四

叙從六位

中島海軍中佐

右

宣下候事、

庚午十一月廿七日

大政官

九二四^五

任海軍中佐

赤塚太郎

右

明治3年(1870)

宣下候事、

庚午十一月廿七日

太政官

九二四ノ九

九二四ノ六

赤塚海軍中佐

龍驤艦副艦長被

伊東海軍少佐

叙從六位

右

庚午十一月廿七日

太政官

宣下候事、

庚午十一月廿七日

太政官

九二四ノ一〇

伊東二郎儀

九二四ノ七

任海軍少佐

右

伊東二郎

被任海軍少佐、龍驤艦副長被 仰付候、叙正七位宣旨
之通、昨日御廻シ相成候ニ付、今日同人へ相達候条、
此段御届申候也、

九二四ノ一一

中島海軍中佐

宣下候事、

庚午十一月廿七日

太政官

龍驤艦艦長被 仰付候、

宣旨是亦同人へ相達候条、此段御届申候也、

九二四ノ八

伊東海軍少佐

十一月廿八日

有栖川兵部卿

叙正七位

右

弁官

御中

九二四ノ一二

中島海軍中佐

宣下候事、

庚午十一月廿七日

太政官

龍驤艦長被

仰付候事、

庚午十一月廿八日

太政官

九二五 鹿兒島藩献上ノ春日艦ニ付兵部省稟申ス

十一月廿七日

先キニ鹿兒島藩ヨリ献上ノ春日艦受領ノ上、祝砲発射等
ニ付、兵部省ヨリノ稟申、

鹿兒島藩より獻艦仕候春日艦、明後廿七日第十一字受
取申候、依ては祝砲等之義も御座候ニ付、為御心得此
旨申進候也、

庚午十一月廿五日

兵部省

弁官

御中

追て風雨之節は、順延受取之手仕候也、
一字脱カ

【参照一】

臣忠義頓首再拝謹

案するに、文武相須ち恩威兼行るゝハ、治國之要務な
り、苟も

朝廷天下を鎮服するの威なくんハ、深仁厚沢何を以て、

下黎庶に覃及せんや、今や大政維新、号令帰一大に國
礎を被為立之時に当り、兵戎備虞之制、今日の急務に
して、

皇基隆替の係る処と奉存候、況や海軍之忽にすへから
ざる不待論儀ニ御座候、当藩從來所持之軍艦春日丸・
乾行丸謹て奉献仕候、脆小の制万一の裨助に相成申間
敷奉存候得共、兼て版図奉還も奉願置候儀にて、固より
一藩の私有する訳ニ無之候間、臣の微誠照鑒を賜ひ、
御垂納被成下度伏て奉懇願候、臣忠義誠恐再拜以聞、

六月五日

島津少将忠義

右封之俣田中清之進より、御国元より到来之旨演

説之上、官掌へ差出候処、権弁事土方五位受取相

成候段承届候事、

巳七月五日

【参照二】

鹿兒島藩知事

軍艦献上願出之趣、神妙之至

御満足被

思食候、然ル処海軍之御規則御取調中ニ付、追テ

何分之御沙汰可有之候事、

七月

太政官

右御呼出之上多久少弁ヨリ、七月廿一日相渡候事、
一献艦願之通被仰付候趣ハ、次ノ御用帳ニ有之候事、

九二六 府藩県寺院廃合ノ分、寺号・宗派等ヲ檢覈

録上セシム

十一月廿八日

府藩県ニ令シ、凡ソ寺院ヲ廢シ、若クハ合併スルモノハ、
其寺号・宗派・本末及ヒ免税地・山林等ヲ檢覈録上セシ
ム、

〔第八百七十七〕十一月二十八日(布) (太政官)

府藩県ニ於テ、管内寺院廢止或ハ合併致候分、寺号・
宗派・本末等取調、早々可届出、尤境内除地、山林等
所置方之儀ハ、見込相立、反別其外詳細取調可何出事、

九二七 府藩県交渉訴訟准判規程ヲ頒ツ

十一月廿八日

府藩県交渉訴訟准判規程ヲ頒チ、地方官ヲシテ直ニ訴訟

ヲ裁判シ、其両情乖戾シテ、甘結セサルモノハ、審案ヲ
具シテ原・被両者ニ附シ、之ヲ民部省ニ上請セシム、
十一月廿八日

御布告写

府藩県管轄交渉之訴訟、是迄民部省ニ於テ裁判候処、
自今府藩県ニ於テ、裁判被 仰付候條、別紙規程ヲ照
準シ処置可致事、

府藩県交渉訴訟准判規程

第一条

凡訴訟ヲ准判スルハ、其本人ニ限ルベシ、若シ疾病・
老幼或ハ廢疾等ニテ、親族其他ノ代人ヲ請フトキハ、
事實ヲ糺訊シ、止ヲ得ザレバ其請ヲ許スベシ、

第二条

凡訴狀、士族、卒ハ官長、平民ハ里正ノ奥印ヲ押スベ
シ、其奥印ナキハ訟詞理アリト雖モ、之ヲ准理スベカ
ラズ、

但官長・里正依怙偏頗ヲ挾ミ、其情実ヲ壅塞セシム
ル時ハ、審按廉察シ、奥印ナシト雖モ、准理シテ
冤枉ナキヲ要ス、

第三条

治下ノ士民、他ノ管内ノ者ト紛議ヲ生シ、其裁判ヲ請フトキハ、知事或ハ参事親シク推糺審問シ、善ク訴状ノ情実証拠ヲ明ニシ、条理正当ナレハ副書ヲ作り、庁印ヲ押シ、訟者士卒ハ差添人、平民ハ里正ト其本人トニ授付シ、对答人ノ管轄庁ニ送り、其裁判ヲ受シム可シ、

第四条

他管轄庁ノ副書ヲ以テ、我カ断訟ヲ請フ者アラハ、先ツ其訴状ヲ按シ、訴人ヲ推問シ、原情ヲ得ルトキハ、訴ラル、ノ本人並ニ士卒ハ差添人、平民ハ里正ヲ呼出シ、右訴訟ノ件十日ヲ限り、証拠確実謬詐ナク答書セシムヘシ、

但中元・歳終ノ両季ニ近ツクトキハ、必ズ十日ヲ限ラズシテ可トス、

第五条

日限中訴答ノ者对談熟議シ、共ニ内済ヲ請フトキハ、双方ノ連署状ヲ出サシメ、後言ナキヲ相証セハ之ヲ允シ、其旨趣ヲ記載シ、訟者ノ管轄庁ニ復スベシ、

但对談熟議ノタメ、日限猶予ヲ請フトキハ、五日乃至十日ノ延期ヲ許スベシ、

第六条

对答者ノ事実、訟者ノ旨意ト大ニ反スルトキハ、其願末ヲ認め、答書ヲ作ラシメ、官長或ハ里正コレニ奥印ヲ押シ、士卒ハ差添人、平民ハ里正ヲ副へ、本人ト共ニ訟者ノ管轄庁ニ送ラシム、

第七条

庁訟第一次ハ、必ス知事或ハ参事庭ニ蒞シテ審判ス、掛リ属モ之レニ陪ス、其日裁決セザルトキハ、第二次ヨリ属ヲシテ聴カシムルモ可トス、属兩個並、座審札ス若シ事重大ニ涉リ、或ハ訴へ重罪ニ至ルベキハ、再三知・参事礼問スベシ、

第八条

訴訟断決スルトキハ、双方連署ノ受書ヲ出サシメ、永ク異論ナキヲ証セシメ、其書ノ写ヲ訟者ノ管轄庁ニ送達スベシ、

第九条

聴訟初日ヨリ百日ニ至リ、事理盤錯、両情乖戾シテ決シ難キハ、其糺問ノ始末審ニ記載シ、之レヲ訴答ノ者ニ示シ、謬違ナキヲ証印セシメ、且庁印ヲ押シテ訴答ノ者ニ授付シ、民部省ニ出シテ裁断ヲ受シムヘシ、

但金穀其他貸借ノ訴訟ハ、解訟ヲ度トナシ、限ルニ百日ヲ以テスベカラズ、且訴答ノ者疾病其他ノ事故アリテ、時日遷延スルトモ、宜シク斟酌シテ日ヲ限ルベカラズ、

第十条

百日ニ至リ決シ難キ訟ヲ民部省ニ出ストキハ、其始末ヲ記載シテ、訟者ノ管轄庁ニ達シ、民部省ノ裁決ヲ請フベキ事ヲ報スベシ、此時ニ至リ、訟者ノ庁官異議アルベカラズ、

第十一条

民部省ニ出シテ裁断ヲ請フ事ヲ、訟答ノ者ニ達シテ、後十五日ヲ以テ、発途ノ期トナス、若シ其期ヲ遅緩セハ、越度タルベキ旨ヲ示スベシ、

但訴答者ノ内、郷里其庁ト遠隔シ、往復調度ノ事ニ付、十五日ニシテ発途シ難キ者ハ、相当ノ日限猶予スベシ、

第十二条

発途前ノ日限中対談熟議シ、内済ヲ請フ者ハ、第五条ノ如クシテ之ヲ許スヘシ、

第十三条

百日ニ至ラザルモ、訟者倔強頑愼ニシテ、其裁判ヲ非理トシ、他ノ聴訟ヲ請フトキハ、第八、九、十条ノ如クシテ、民部省へ出スヘシ、

第十四条

堤防用悪水及ヒ村市山林等、境界彼我管轄交牙ノ地ニ関涉ノ訴訟ハ、訟者ノ管轄庁ヲ主ト為シ、訴状ニ其庁印ヲ押シ、関涉ノ庁ニ達ス、其知・参事答者並ニ里正ヲ出シテ答書ヲ作ラシメ、状情証拠ヲ札問シ、事理至当ナルトキハ其庁屬ヲ副テ、訟者ノ管轄庁ニ送り、庁訟ノ庭ニ蒞マシメ、与ニ地図ヲ検査シ、契券ヲ照準シ、簿冊ヲ檢閲シ、或ハ実地ニ就テ協議審判スベシ、其裁決ニ至リテハ、都テ断案ヲ作り民部省へ伺ヒ出ツベシ、但訴状ヲ受ルヨリ答書ヲ送ルノ間、尋常十日ヲ以テ期トス、然レドモ尚査按ヲ加フベキ事件ハ、此期ヲ必トスベカラズ、

第十五条

堤防用悪水ハ、実地水路ヲ検査シ、彼我害ナキハ宜シク説諭ヲ加へ、熟議解訟セシムベキモ、境界論地ニ至リテハ、極テ詳裁審断シ、必ズ対談熟議ヲ許スベカラズ、

第十六条

田畑・山林・^(マツ)質地等ノ訴訟ハ、總テ其管轄ノ庁ニ於テ

裁決ス、故ニ訟者田畑・山林ト共ニ、我管内ノモノナ

レバ、第十四条ノ如クシテ、他ノ答者ヲ召シ^{庁屬副スル}及ハズ

訟者我管内ノ者ニシテ、田畑・山林他ノ管轄ナルトキ

ハ、第三条ノ如クシテ、答者ノ庁ニ遣シ、裁判ヲ受シ

ムベシ、熟談等ハ前ニ掲ル条々ノ如シ、

第十七条

既ニ裁断スル事件ト雖モ、訟者再訴スル所ノ証拠ニ比

較シ、前裁断至当ナラザルトキハ、民部省ヘ伺ヒ更ニ

裁断スベシ、

但再訴セザルモ、前裁断ヲ改メザルベカラザル事件

アラバ、条理本末詳ニ記載シ、明確ノ証拠ヲ以テ、

民部省ヘ伺ヒ、更ニ裁断スヘシ、

第十八条

遠國ノ者、其滞留スル地ノ士民ト、争論ヲ生ジ、直チ

ニ其地ノ庁裁ヲ請フ者ハ、旅宿主人又ハ其地親族ノ者

差添、訴出スルトキハ准理裁判シ、且断決之上、其始

末ヲ記載シ、訟者ノ管轄庁ニ達スベシ、

但百日ニ及ビ、断決ニ至ラザルトキハ、之ヲ訟者ノ

庁ニ達シ、民部省ニ出スベシ、

第十九条

管内滞留スル兩個ノ旅人^{醫ハ長崎・函館ノ者}紛議ヲ起シ、其

地ノ旅宿或ハ親族ヲ証人トシ、直チニ其裁判ヲ請フト

キハ前条ノ如シ、

第二十条

訴訟中、訴答者ノ内死スルトキハ、其状ヲ審按シ、疑

事アラバ精竅ニ窮治スベシ、疑事ナキモ差添人又ハ里

正ノ証書ヲ取り、其管轄庁ニ達スベシ、

第二十一条

訴訟中、訴答者ノ内亡命スルトキハ、其管轄庁ニ達シ、

百日ヲ期トシ搜索セシムベシ、

第二十二条

凡訴訟ノ原由、訴答者ノ管轄庁吏ニ連及シ、裁断シ難

キハ、速ニ民部省ニ出スベシ、其裁判シ得ベキモ、決

ヲ同省ニ伺フベシ、

庚午十一月

九二八 府藩県ヲシテ各其管内社寺領現収六箇年

平均ヲ録上セシム

十一月廿八日

府藩廳ヲシテ、各其管内社寺領現収六箇年平均ヲ録上セシム、

〔第八百七十九〕十一月二十八日(布) (太政官)

〔頭註〕「四年太政官第二百十八番」
府藩廳管内社寺領現収納六ヶ年平均、別紙雛形之通取

調、社寺別冊ニ致シ、往復日数ノ外五十日ヲ限り可差
出事、

(別冊)ハ略ス、

九二九 山口藩通逃ノ徒豊後地方ニ横行ス

十一月廿九日

山口藩通逃ノ徒、豊後地方ニ抵リ、陰ニ不逞ノ徒ヲ煽動
ス、是日、彈正少忠河野敏鎌ヲ日田県ニ差遣シテ、之ヲ
処分セシム、又二豊・両筑・肥後諸藩ニ令シ、嚴ニ浮浪
ノ徒ヲ緝捕シ、臨機兵ヲ用フルヲ許ス、

十一月廿九日

御沙汰書写

日田県

近来浮浪ノ徒、豊後路辺各所ニ潜伏致シ、時々出没暴

行ニ及候趣、依之右為取締、河野彈正少忠被差遣候条、
諸事差図ヲ可受候事、

岡藩

府内藩

杵築藩

臼杵藩

森藩

日出藩

佐伯藩

近来浮浪ノ徒、豊後路辺各所ニ潜伏、時々出没暴行ニ

及候段、中津藩・日田県ヨリ届出候ニ付テハ、近傍地

方官管内捕押方嚴重手配ハ勿論、臨機兵威ヲ以テ処置

可致候、尤右為取締河野彈正少忠、日田県へ被差遣候、

時宜ニヨリテ指図ニ及候儀モ可有之候条此旨相違候

事、

豊津藩

中津藩

千束藩

同文

福岡藩

同文

秋月藩

中略

天保六年乙未一月生
一郎

久留米藩

同年明治十一年晦日

柳川藩

一御用有之、日田県へ被差遣候事、

三池藩

同日

同文

熊本藩

一近來浮浪ノ徒、豊後路辺各所ニ潜伏、出沒暴行ニ及候趣ニ付、右為取締河野彈正少忠日田県へ被差遣候間、

延岡藩

諸事申談取計可致事、

人吉藩

以下略ス

同文

〔本〕「右太政官日誌ニモ同文ヲ載ス」

九三〇 民部大丞松方正義ヲ日田県ニ差遣ス

九三〇ノ二

寺師宗道日記

十一月晦日

十一月廿七日 雨天雪

民部大丞松方正義ヲ日田県ニ差遣シ、又兵部省ニ令シテ、豊後地方ノ徒ニ備へ、薩・日・肥・長・藝・豫・讃ノ諸藩、大坂府及ヒ長崎・兵庫・倉敷諸県ニ令シテ、其逃逸者ヲ緝捕ス、
九三〇ノ一

鹿兒島県士族

松方正義

風邪、昨日之通頼遣候、風呂建入浴ス、英之丞来ル、豊後日田江長州之奇兵隊潜居候処、近頃細川藩杯と暴発乱妨いたし候由、副知県事白濱勘兵衛より急報あり、一昨日方三邦丸出帆より貴嶋卯太郎江被仰付、斥候被差出候、右之報次第時機兵ヲ出賦之由也、此文為乗候、近国藩々惣て急ニ引取帰郷之由、

九三〇/三

鹿兒島県士族

川村純義

与十郎

天保十二年庚子正月生

中略

同年明治三年十一月廿五日

一御用有之、大坂出張被仰付候事、

同月三十日

一日田県騷擾ニ付、臨機出兵ノ儀、大久保参議・木戸参

議申談可受指揮事、

以下略ス

九三〇/四

十一月晦日

御沙汰書写

兵部省

近日浮浪ノ徒、豊後路所々出沒暴行ニ及候趣ニ付テハ、

自然不逞徒、時ニ乗シ動揺モ難計ニ付、諸処取締嚴重

ニ致候ハ勿論、兼テ不慮ノ備無油断様、為心得相達候

事、

九三〇/五

十一月晦日

御沙汰書写

鹿兒島藩

飢肥藩

佐土原藩

高鍋藩

近来浮浪ノ徒、豊後路辺各所ニ潜伏、出沒暴行ニ及候

段、中津藩・日田県ヨリ届出候ニ付テハ、右為取締河

野弾正少忠、日田県へ被差遣、且近傍地方官へ、捕押

へ方嚴重手配ハ勿論、臨機兵威ヲ以テ処置可致旨、相

達候ニ付、兼テ其管内嚴重取締致シ、万一右ノ徒脱走

立込候節ハ、速ニ捕縛可届出候事、

九三〇/六

十一月晦日

御沙汰書写

廣島藩

[番号九三〇/五と同文により削除]

九三〇ノ七
十一月晦日

御沙汰書写

佐賀藩

平戸藩

小城藩

島原藩

唐津藩

蓮池藩

大村藩

鹿島藩

福江藩

〔番号九三〇ノ五と同文により削除〕

九三〇ノ八

松山外七藩へ御沙汰

松山藩

宇和島藩

大洲藩

西條藩

今治藩

吉田藩

同文

九三〇ノ九

山口外四藩へ御沙汰

新谷藩

小松藩

山口藩

豊浦藩

岩國藩

徳山藩

清末藩

同文

九三〇ノ一〇

高松外二藩へ御沙汰

高松藩

丸亀藩

多度津藩

同文

九三〇ノ一一

長崎外三府県へ御沙汰

長崎県

明治3年(1870)

同文

各通 兵庫県

倉敷県

大坂府

別紙之通春日艦へ

御沙汰ニ相成候条、此旨可相達事、

庚午十一月卅日

太政官

春日艦

九三一 春日艦ニ横濱港警衛並ニ諸港応援ヲ命ス

十一月晦日

春日艦ノ長崎港警衛ヲ解キ、更ニ横濱港警衛並ニ諸港応

援ヲ命ゼラル、

九三二ノ 鹿兒島藩献艦春日艦修覆出来、本月十九日品海江着艦

ニ付、受取申候、全体右艦之義ハ局外中立ニ付、長崎

港江守衛候様先般御達仕置候処、当今右湊之義ハ、至

テ平穩ニ候間、幸当方江相廻候事ニ付、更ニ横濱江守

衛被仰付方ニハ有之間敷哉、此段奉伺候也、

庚午晦日

兵部省

弁官

御中

九三二ノ二

兵部省

長崎港警衛被免、横濱港警衛並ニ諸港応援被 仰付候
事、

庚午十一月

太政官

九三二 大山綱良ニ上京ヲ命ス

是月(十一月)

大山格之助改綱ニ上京ヲ命セラル、

一 大山格之助

右は東京江御用有之、急ニて上京被 仰付候条、向々

江可申渡候、

明治三年十一月

知政所

九三三 外国公使旅行ノ節取扱方ヲ藩内ニ達ス

是月(十一月)

先キニ外国公使旅行ノ節、取扱方ヲ東京ニ於テ令セラレタルヲ以テ、藩庁更ニ之ヲ藩内ニ達ス、

[第六百八十一] 十月十七日(沙) (太政官)

外国公使旅行之節、心得方別紙之通候条、此旨相違候事、

(別紙)

府藩臬

外国公使旅行之節、城下又ハ陣屋許へ休泊致候ハ、
官員一人平服ニテ旅館へ相越シ、知事之口上ヲ以尋問可致事、

但公使ニ無之候ハ、不及其儀事、

旅館へ幕・台・提燈・盛砂等、総テ馳走ケ間敷儀ニ不
及候事、

外国官人通行之節、其宿駅ニ於テ、問屋役人之内出迎
案内可致、地方官庁ヨリ送迎之役員等不及差出候事、
外国人通行之節、往來見物イタシ候儀ハ、不苦候エト
モ、彼方ニテハ高官ノ者モ手輕ニイタシ、且彼我之礼
義モカハリ候儀ニ付、在々ノ人民ニ於テハ、殊更外国
人之情態ヲモ熟知セサルユエ、不作法等之儀有之候テ

ハ、不相濟儀ニ付、地方官ニテ屹度取締可致事、

外国人へ対シ万一不礼イタシ候モノ有之歟、或ハ不都合之儀有之節ハ、取締出張之官員又ハ宿駅役人トモ附添、官員へ申談嚴重始末相付ケ、其段書取ヲ以テ、外務省又ハ開港場最寄ニ候ハ、其開港場へ可届出事、旅籠料並人足賃錢トモ、相對ヲ以テ仕払候筈ニ候条、外務省又ハ開港場之臬庁ヨリ之先触面通り相心得、夫々不都合無之様取計可申、尤休泊之場所ハ、宿駅役人共取締筋精々心付、夜中ハ別テ入念見廻リ可申事、外国人旅行先ニ於テ、土産物等買入候儀ハ不苦候得共、万一密商ケ間敷事柄有之候ハ、見聞次第御国人之儀ハ、其庁ニ於テ始末柄相糺シ、外務省又ハ最寄開港場へ可相届候事、

但外国人之儀ハ、外務省並最寄開港場ニ於テ取糺可
致事、

別紙之通、於東京被 仰渡候段申来候条、向々江可申
渡候、

明治三年午十一月

知政所

明治3年(1870)

九三四 藩庁公用方ヲ庶務方ト改称ス

是月(十一月)

藩庁公用方ヲ庶務方ト改称ス、

一東京公用方事、

庶務方

右之通唱被相替候条、向々江可申渡候、

明治三年十一月

知政所

九三五 藩庁廢寺ニ於ケル僧侶ノ活路ナキ者ヲ稟

申セシム

是月(十一月)

藩庁廢寺ニ於ケル僧侶ノ活路ナキ者ヲ稟申セシメ、給養方ヲ令ス、

一御藩内廢寺付、僧侶之内住職等相勤居候面々、還俗涯

活計難渋之訳を以、追々御養料米被下置候処、右之内

ニは極老病身孤独等ニて、有難黙止者も可有之候付、

尚又其情状年輩旁々一々精微ニ糺索いたし、且壮年に
て親族等も有之、只今より渡世可相調者は、銘々取分

可申出候、尤老体病身等ニて、未御養料不被下置候者

可有之哉も難計、右体之者は又委細取調可申出旨、地

頭江申渡、可承向々江モ可申渡候、

但

来月廿日限、

明治三年十一月

知政所

九三六 藩内諸官社代拝ノ節地頭・在番ニ支障アルトキハ、副

ルトキハ、副役・詰検事ヲ代理セシム

是月(十一月)

藩内諸官社代拝ノ節、地頭・在番ニ支障アルトキハ、副役・詰検事ヲ代理セシム、

一御藩内諸官社御代拝之儀、地頭故障之節は、副役より

相勤、屋久島在番同断之節は、詰検事より相勤候様被

仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年十一月

知政所

九三七 糺明局宗門掛ヲ解キ本局ニテ之ヲ取扱フ

是月(十一月)

糺局内ニ於ケル宗門掛ヲ解キ、本局ニテ更ニ之ヲ取扱フ、

一糺局之内、宗門掛被仰付置、專任之事情得共、此節

より掛之儀は被免、於本局取扱被仰付候条、取締向は勿論、諸郷請持廻勤等、万端行届候様可致取扱旨、糺

明局總裁江申渡、其外可承向々江も可申渡候、

明治三年午十一月

知政所

九三八 藩庁皇軍神社十座ヲ列祀スルコトヲ令ス

是月(十一月)

藩庁皇軍神社十座ヲ列祀スルコトヲ令ス、

一皇軍神スラミツサノカミノヤシロ社祭神

武壘槌神タケミカツツシノ

經津主神フツツヌシノ

橋正成卿

忠久公

忠良公

貴久公

義久公

義弘公

齊興公

齊彬公

右は、此節 御軍神社御改造被為在候付、右之通社号被相定、

皇国武道之祖神以下十座、御祭祀被 仰付候条、軍務

局江申渡、可承向江も可申渡候、

明治三年午十一月

知政所

九三九 藩庁蚕糸養殖ヲ奨励シ製品買上方ヲ達ス

是月(十一月)

藩庁蚕糸養殖ヲ奨励シ、其製品買上方ヲ達ス、

一蚕糸出産之儀、追々從

朝廷被 仰出候趣も有之候間、御藩内一統猶又致繁殖

候様可心掛候、自然手續不案内之者は、蚕織局江及尋

問可受差函候、且苗桑・蚕種之両品も、同局江願出候

は相渡置、白糸出来之上、相当之代銀を以、御買上可

被仰付候条、生産奉行江申渡、向々江不洩様可申渡候、

明治三年十一月

知政所

九四〇 加藤権兵衛ヲ長島地頭ト為ス

是月(十一月)

加藤権兵衛ヲ以テ、長島地頭ト為ス、

一長嶋地頭

加藤権兵衛

右之通被 仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年十一月

知政所

九四一 川畑伊右衛門ヲ伊作外五郷ノ地頭ト為ス

是月(十一月)

川畑伊右衛門ヲ以テ、伊作外五郷ノ地頭ト為ス、

一伊作 加世田 阿多 田布施 日置 永吉

地頭

川畑伊右衛門

右之通縁替被 仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年十一月

知政所

九四二 田原陶吉ヲ大隊長ト為ス

是月(十一月)

田原陶吉ヲ以テ、大隊長ト為ス、

一大隊長

田原陶吉

右之通被 仰付、学寮江被掛置候条向々江可申渡候、

明治三年十一月

知政所

九四三 藩庁諏訪瀬島ノ開拓ヲ聴ス

是月(十一月)

藩庁諏訪瀬島ノ開拓ヲ請フモノハ、之ヲ聴シ、二十箇年ノ租徴ヲ免ス、

一七嶋之内諏訪之瀬島之儀、文化之度燃動以降人民逃散、

自然荒蕪、絶海之孤嶋ニ相成居候処、同嶋之儀全体地

利勞類嶋ニ増り、尤當時ニ於てハ、燃動之憂不相見、

人民居住相整候付、以来開拓被 仰付候間、志望之者

は近嶋之面々は勿論、誰人ニ不依名前申出候ハ、即

開拓可被 仰付候、尤開拓之上式拾ヶ年は、年貢を聴
るし、各自ニ作取被 仰付候条、生産奉行江申渡、向
々江可申渡候、

明治三年午十一月

知政所